博　多　154

―博多遺跡群 第199次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1289集

２０１６

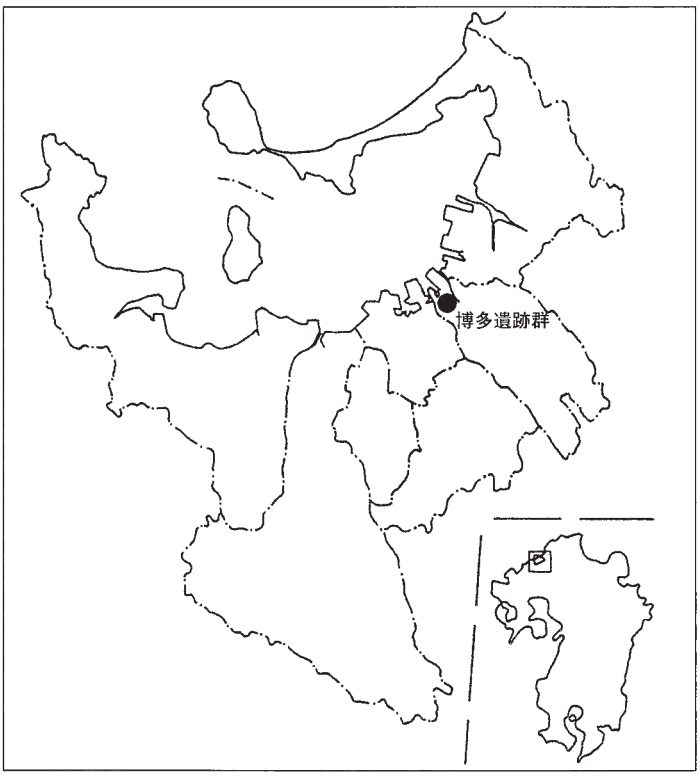
福岡市教育委員会

HAKA　　TA

博　多　154

―博多遺跡群 第199次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1289集



調査番号：1333
遺跡略号：HKT-199

2016

福岡市教育委員会

Ph. 1　SX647 遺物出土状況（北西から）

Ph. 2　SX647 出土遺物

序

福岡市には北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸と人、物、文化の交流を絶え間なく続けてきた歴史があります。この地の利を活かした人々の生活を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれて明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものが多く、学術研究上においても重要視されているところです。

本調査では中世の国際貿易都市として栄えた博多の様相が知られる遺構、遺物が数多く発見されました。特に、廃棄土壙から景徳鎮窯の陶磁器をはじめ多量の中国の貿易陶磁器が出土し、当時の貿易の状況を知ることができたことや近世初頭の黒田氏の家紋を付した軒丸瓦や鬼板瓦が出土し、博多に拠点となる重要な施設が設置されていたことが判明したことは重要です。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく多様な開発で消滅する埋蔵文化財を将来に残していく記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで関係者の皆様のご理解とご協力を賜りましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

平成28年３月25日

福岡市教育委員会

教育長　酒井龍彦

例　言

1．本書は福岡市教育委員会が平成25年度に共同住宅建設に伴い、福岡市博多区御供所町302番地内で実施した博多遺跡群第199次調査報告書である。
2．発掘調査および整理・報告書作成は民間受託事業および国庫補助事業として実施した。
3．調査は荒牧宏行が担当し、遺構実測図は荒牧の他，井上、藤野が作成した。
4．本書に掲載した遺構、遺物写真は荒牧、井上が撮影した。
5．本書に掲載した遺物実測図は、荒牧、林田憲三、浄書は樋口久美子、荒牧が行った。遺物整理は樋口、堀内澄美子が行った。
6．本文は荒牧が執筆した。
7．本書掲載の実測図、写真、遺物のほか調査で得られた総ての資料類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管され、活用されていく予定である。

凡　例

1．本書に用いた方位・座標は世界測地系による。
2．掲載した遺物の番号は通し番号とした。
3．遺構の種類を示す略号として掘立柱建物跡をSB，竪穴住居跡をSC、土壙をSK、溝をSD、柱穴をSP、性格不明のものをSXとした。
4．報文中の輸入陶磁器の説明には『大宰府条坊跡ＸⅤ』太宰府市の文化財 第49集 2000 太宰府市教育委員会、山本信夫・山村信榮「中世食器の地域性〔10〕九州・南西諸島」国立歴史民俗博物館研究報告第71集 1997の編年・分類を用いた。

調査基本情報一覧

遺　跡　名	博多遺跡群	調　査　次　数	199次	調　査　略　号	HKT－199
調 査 番 号	1333	分布地図図幅名	049	遺跡登録番号	0121
申請地面積	964㎡	調査対象面積	529㎡	調　査　面　積	154㎡
調 査 期 間	平成25（2013）年11月15日～平成26年３月20日			事前審査番号	25－2－439
調　査　地	福岡市博多区御供所町302番				

目　次

本文目次

Ⅰ　はじめに…… 1
　1．調査に至る経過…… 1
　2．調査の組織…… 1
　3．調査の経過と調査範囲…… 1
Ⅱ　位置と環境…… 3
　1．地形…… 3
　2．歴史的環境…… 3
Ⅲ　調査の方法…… 3
　1．調査区の設定…… 3
　2．調査の方法等…… 6
　3．層序と遺構面の設定…… 6
Ⅳ　遺構の説明…… 7
　1．調査の概要…… 7
　2．第Ⅰ面の調査…… 7
　　SK29、 SX129、SX105
　3．第Ⅱ面の調査…… 9
　　SK10、SX130、SD131、132、SX83、145、SX156
　4．第Ⅲ面の調査…… 9
　　SX179、SX182、X183、SX184、SX189、SX195、SX239、SX168
　5．第Ⅳ面の調査…… 10
　　SX230、X241、SX257、SX359、SX449、SX642、SP294付近の版築状土層
　6．第Ⅴ面の調査…… 12
　　SX381、SX521、SX639、SX647
　7．第Ⅵ面の調査…… 15
Ⅴ　出土遺物の説明…… 19
　1．第Ⅰ面SX105出土瓦 …… 19
　2．第Ⅰ面SX129出土瓦 …… 23
　3．第Ⅰ面SX105出土土器 …… 24
　4．第Ⅴ面SX647出土遺物 …… 26
　5．第Ⅰ、Ⅱ面遺構出土遺物…… 42
　6．第Ⅲ～Ⅵ面遺構出土遺物…… 43
　7．その他の土器、陶磁器…… 48
　8．墨書土器…… 49
　9．滑石製品…… 49
　10. 瓦…… 53
　11. ガラス、鋳造関連遺物…… 53
　12. 銅銭…… 53
Ⅵ　おわりに…… 54
　1．SX105、129について …… 54
　2．SX647について …… 54

挿図目次

Fig. 1　博多遺跡群の位置と調査地点 …… 2
Fig. 2　調査区範囲 …… 3
Fig. 3　調査区内土層図 …… 4
Fig. 4　Ⅰ面全体図（1/100）…… 6
Fig. 5　Ⅱ面全体図（1/100）…… 7
Fig. 6　Ⅲ面全体図（1/100）…… 8
Fig. 7　Ⅳ面全体図（1/100）…… 9
Fig. 8　Ⅳ面下部（1/100）…… 10
Fig. 9　Ⅴ面全体図（1/100）…… 11
Fig.10　Ⅵ面全体図（1/100）…… 12
Fig.11　Ⅵ面下部（1/100）…… 13
Fig.12　SX257実測図（1/20）…… 14
Fig.13　SX381実測図（1/20）…… 15
Fig.14　SX449、359、521・実測図（1/20）…… 17
Fig.15　SX639、642実測図（1/20）…… 18
Fig.16　SX105出土遺物実測図１（瓦　1/4）…… 20
Fig.17　SX105出土遺物実測図２（瓦　1/4）…… 21
Fig.18　SX105出土遺物実測図３（瓦　1/4）…… 22
Fig.19　SX105出土遺物実測図４（瓦　1/4）…… 23
Fig.20　SX105出土遺物実測図５（土器　1/3）…… 24
Fig.21　SX105出土遺物実測図６（土器、硯、板碑　1/3）…… 25
Fig.22　SX647出土遺物実測図１（青白磁、白磁　1/3）…… 27
Fig.23　SX647出土遺物実測図２（白磁　1/3）…… 28
Fig.24　SX647出土遺物実測図３（白磁小皿　1/3）…… 29
Fig.25　SX647出土遺物実測図４（青磁　1/3）…… 30
Fig.26　SX647出土遺物実測図５（青磁小皿　1/3）…… 31
Fig.27　SX647出土遺物実測図６（青白磁　白磁　1/3）…… 32
Fig.28　SX647出土遺物実測図７（墨書土器　1/3）…… 33
Fig.29　SX647出土遺物実測図８（陶器　1/3）…… 34
Fig.30　SX647出土遺物実測図９（陶器甕、鉢　1/4）…… 34
Fig.31　SX647出土遺物実測図10（陶器鉢、盤　1/4）…… 35
Fig.32　SX647出土遺物実測図11（陶器鉢　1/4）…… 36
Fig.33　SX647出土遺物実測図12（陶器甕、鉢　1/4）…… 37
Fig.34　SX647出土遺物実測図13（陶器甕　1/4）…… 38
Fig.35　SX647出土遺物実測図14（陶器壷、甕　1/4）…… 39
Fig.36　SX647出土遺物実測図15（陶器甕　1/4）…… 40
Fig.37　SX647出土遺物実測図16（土師器、石鍋、瓦　1/3）…… 41
Fig.38　SX130、131、132、129、110、179、145出土遺物実測図　（1/3）…… 42
Fig.39　SX189、239出土遺物実測図（1/3）…… 43
Fig.40　SE168、SK156、SX182、183、184、SX195、SX230出土遺物実測図（1/3）…… 44
Fig.41　SX241、SX268、X359出土遺物実測図（1/3、1/4）…… 45
Fig.42　その他陶器、磁器実測図（1/3、1/4）…… 46
Fig.43　墨書土器実測図（1/3）…… 47
Fig.44　滑石製遺物実測図（1/3）…… 47
Fig.45　瓦実測図（1/4）…… 48
FIg.46　取瓶、坩堝実測図（1/3）…… 49

Ⅰ　はじめに

1．調査に至る経過

福岡市教育委員会は同市の博多区御供所町302番地における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成25年７月19日付で受理した。これを受けて文化財部埋蔵文化財審査課事前審査係は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に含まれることから試掘調査を実施した。試掘調査では現地表面下140cmで遺構が確認されたことから遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから駐車場を除く建物部分ついて記録保存のための発掘調査を実施することで合意し、 平成25年11月５日付で有限会社　ギャランビルを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託を締結した。続いてこの契約に従い発掘調査を同年11月15日から翌年３月20日まで実施し、平成26年度、27年度に資料整理および報告書作成を行うことになった。

2．調査の組織

平成25年度の発掘調査，および26年度、27年度の資料整理、報告を以下の組織体制で行った。

【調査主体】 福岡市教育委員会

【調査総括】 経済観光文化局　文化財部埋蔵文化財調査課　課長　宮井善朗（25年度）常松幹雄（26、27年度）同課調査第２係長　榎本義嗣（25 ～ 27年度）

【庶　　務】 埋蔵文化財審査課　管理係長　和田安之（25年度）内山光司（26年度）大塚紀宜（27年度） 管理係　川村啓子（25 ～ 27年度）

【事前審査】 埋蔵文化財審査課　事前審査係長　加藤良彦（25年度）佐藤一郎（26、27年度）同課事前審査係　主任文化財主事　佐藤一郎（25年度）池田祐司（26、27年度）同課事前審査係文化財主事　森本幹彦（25年度） 板倉有大（26、27年度）

【調査担当】 埋蔵文化財調査課　主任文化財主事　荒牧宏行

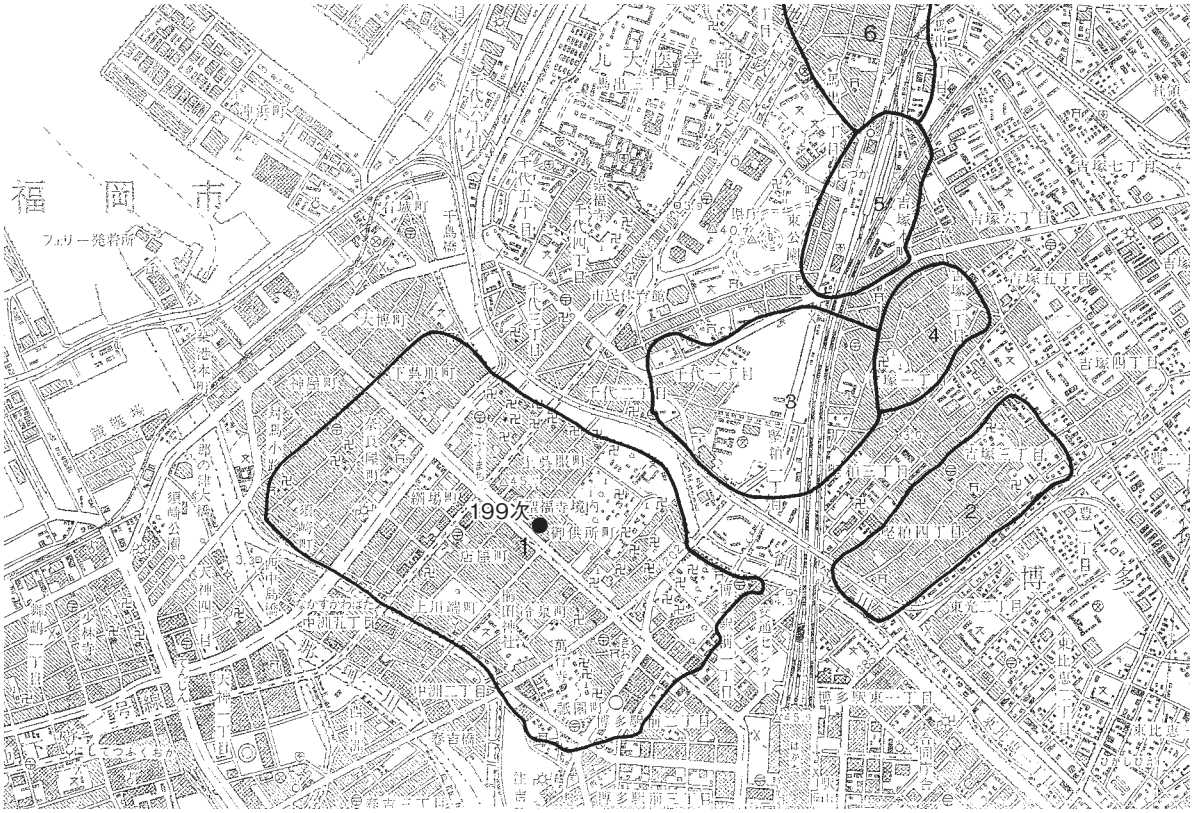
3．調査の経過と調査範囲

(1) 調査経過

本調査地点は後述のように地形的に砂丘頂部に近く、また、中世の国際貿易都市、博多の中心的役割を担った聖福寺の門前という歴史的環境からも重要な位置を占めると考えられる。そのため、本調査が可能であった面積に対して遺物量が極めて多く、 コンテナ500箱以上が出土した。 その中には希少な輸入陶磁器も含まれている。遺構密度も濃く、遺構の切り合いが著しく、調査は厳しいものとなり、４ヶ月間の契約期間の間際である３月20日まで要した。

(2) 調査範囲（Fig.２）

本調査を開始した時点では全体の敷地のおよそ1/3を占める南側全体に、 未調査である既存建物のベタ基礎が残っていた。その為、この部分については基礎の状況をみて審査課で検討するということであった。従って、調査範囲は建築予定地の約1/2となり、更に、入り口の通路確保や法面によって調査面積が縮小することになった。



1 博多遺跡群　2 吉塚遺跡群　3 堅粕遺跡群　4 吉塚祝町遺跡群　5 吉塚本町遺跡群　6 箱崎遺跡

Fig.1　博多遺跡群位置図（1/25,000）

Fig.1　博多遺跡群の位置と調査地点（1/2,000）

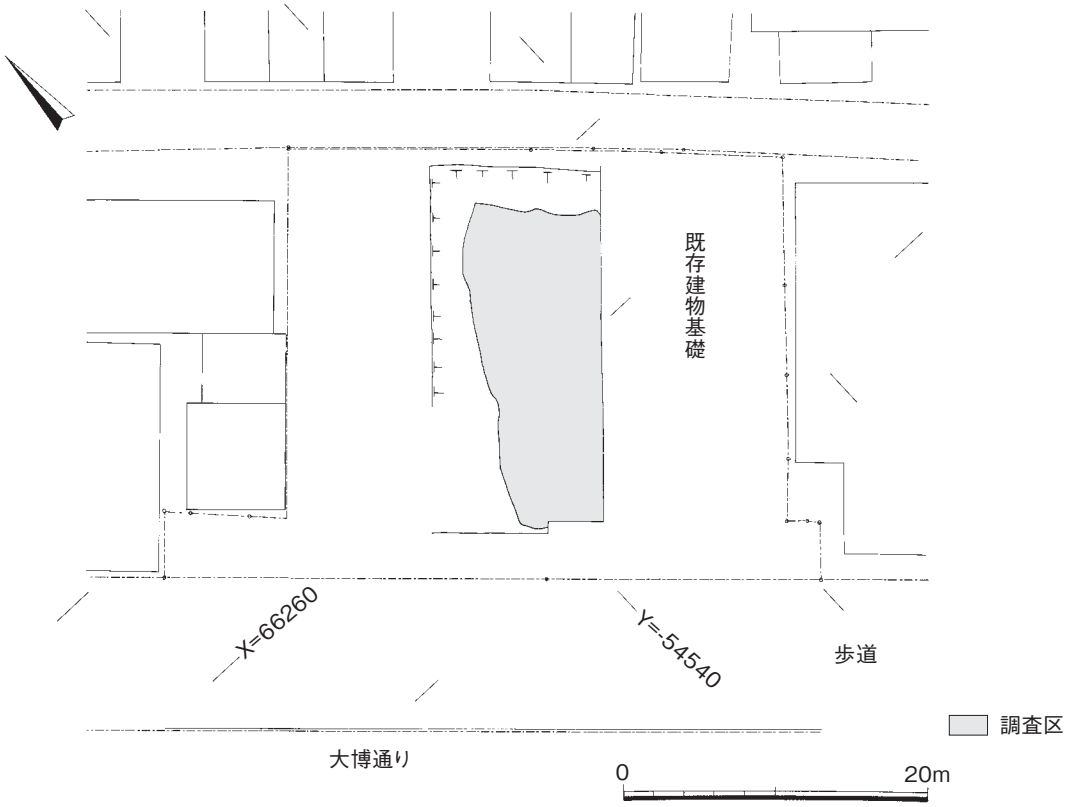


Fig. 2　調査区範囲（1/500）

Ⅱ　位置と環境

1．地形（Fig. 1、2）

博多遺跡群は博多湾沿いに形成された砂丘列上に立地する。調査地点はその砂丘列の最高所付近に位置する。周辺には同じく砂丘上に形成された吉塚遺跡、箱崎遺跡が立地し、その南側の堅粕には背後に形成されたラグーンが広がる。

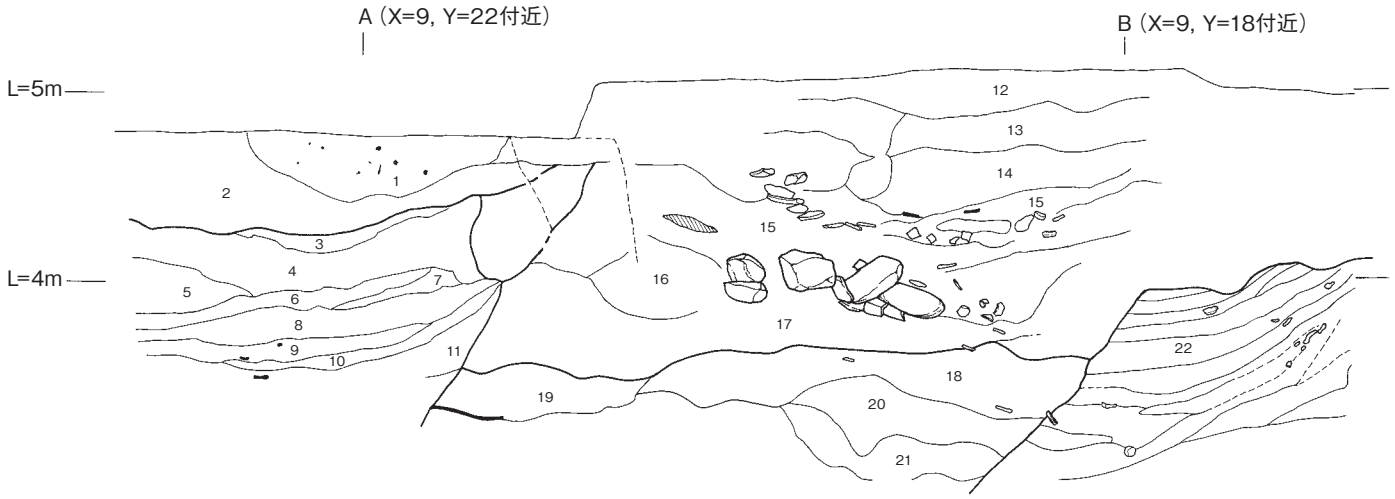
2．歴史的環境

博多遺跡群は11世紀以降の中世において国際貿易都市として繁栄を極めていた。その中心的な役割を担った寺院である聖福寺が建久六年（1195）に建立されている。その前面には第35次調査でメインストリートとかんがえられる道路が検出されている。立地、歴史的環境ともに中心的な位置を占めていると考えられる。

Ⅲ　調査の方法

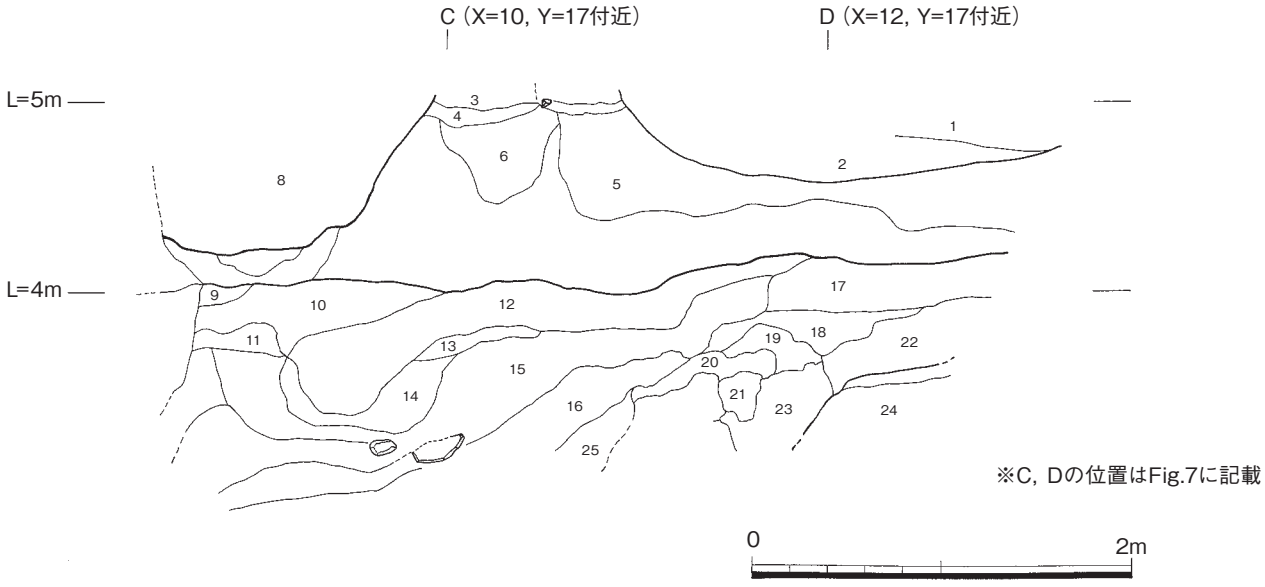
1．調査区の設定

建物部分のみが調査対象となった。敷地の北側の約1/3は駐車場建設のため、遺構に影響が及ばないことから除外された。また、南側の約1/3は既存建物のベタ基礎が標高3.6mの本調査のⅤ面からⅥ面にかけての深さまで設置されていた。このベタ基礎部分は申請された建築部分であったが本調査時には



1. 焼土粒混じり黒褐色土
2. 黒褐色土
3. 暗灰色砂質土(以下11層まで遺構埋土)
4. 暗灰色砂質土(横シマ状に明黄色砂を含む)
5. 暗灰色砂
6. 黒色砂質土(焼土ブロックを含む)
7～9. 暗灰色砂質土
10. 黒色粘質土
11. 明黄灰色砂
12. 黄灰色粘質土
13、14. 暗灰色～黒灰色土
15～17. 暗灰色土
18. 灰色砂質土～砂(以下、砂土となる)
19. 灰色砂と黄灰色砂の互層
20. 灰色砂
21. 灰色砂
22. 黄灰色砂と灰色粘土の互層

※A, Bの位置はFig.7に記載



※C, Dの位置はFig.7に記載

1. 焼土ブロック混じり暗褐色土(SX129)
2. 瓦混じり焼土、炭(SX129)
3. 焼土ブロック、瓦混じり褐色土
4. 褐色土
5. 黒褐色土
6. 褐色土
7. 黒褐色土(以上の層が粘性をもつ)
8. 暗黄褐色土
9. 暗黄灰褐色砂質土(以下の層が砂質土となる)
10、11. 黄灰色砂質土
12～18. 暗灰色砂質土
19～23. 暗灰色～黒灰色砂質土
24. 褐色砂
25. 明黄色砂

Fig. 3　調査区内土層図

Ph. 3　調査区全景（南東から）

Ph. 4　調査区近景（南東から）

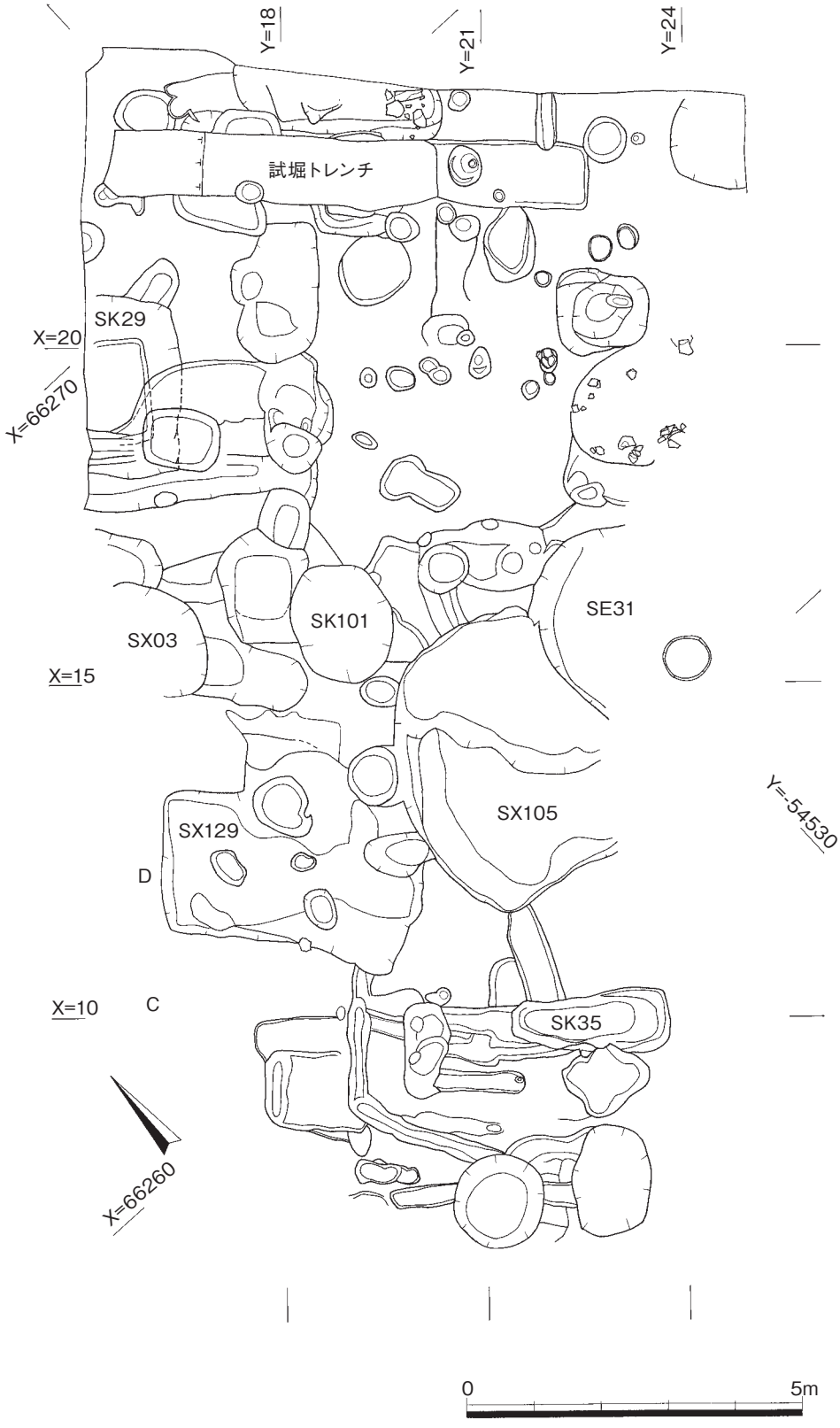


Fig. 4　　Ⅰ面全体図（1/100）

基礎が除去されず、調査を行うことができなかった。

2．調査の方法等

掘削は矢板までできず、法面をつけて行った。まず、暗褐色の砂質土が混じる中世面と考えられる現地表から約140cm下がった標高5.0mを第Ⅰ面の遺構面として、そこまでの堆積土を除去した。以後、調査による排土は随時、調査区の北西部に集め、隅の出入り口から搬出を行った。その為に、北西部の調査は最後にこの部分のみ行った。また、重機の出入口の確保のために、北西隅部分の一部の調査はできなかった。

記録のために調査区に合わせた任意の座標を設定し、1/20の遺構図等を作成した。後に都市再生街区基本調査の座標点から世界測地系の座標を設定した。

3．層序と遺構面の設定

現地表面は標高6.4mである。第Ⅰ面は近世以降と思われる黒色粘質土を除去した、暗褐色砂質土面とした。部分的に焼土面が広がる。近世遺構も多いが、15、16世紀代の遺構も検出される。標高は5.0mを測る。

第Ⅰ面から第Ⅴ面までは鍵層となる土層は無く、便宜的に30 ～ 40cm下げて遺構面とした。第Ⅴ面は褐色砂となり、容易に判別ができる。遺構も明確となり、柱穴等も検出できる。第Ⅵ面は地山の明黄色砂となり、標高3.4mを測る。

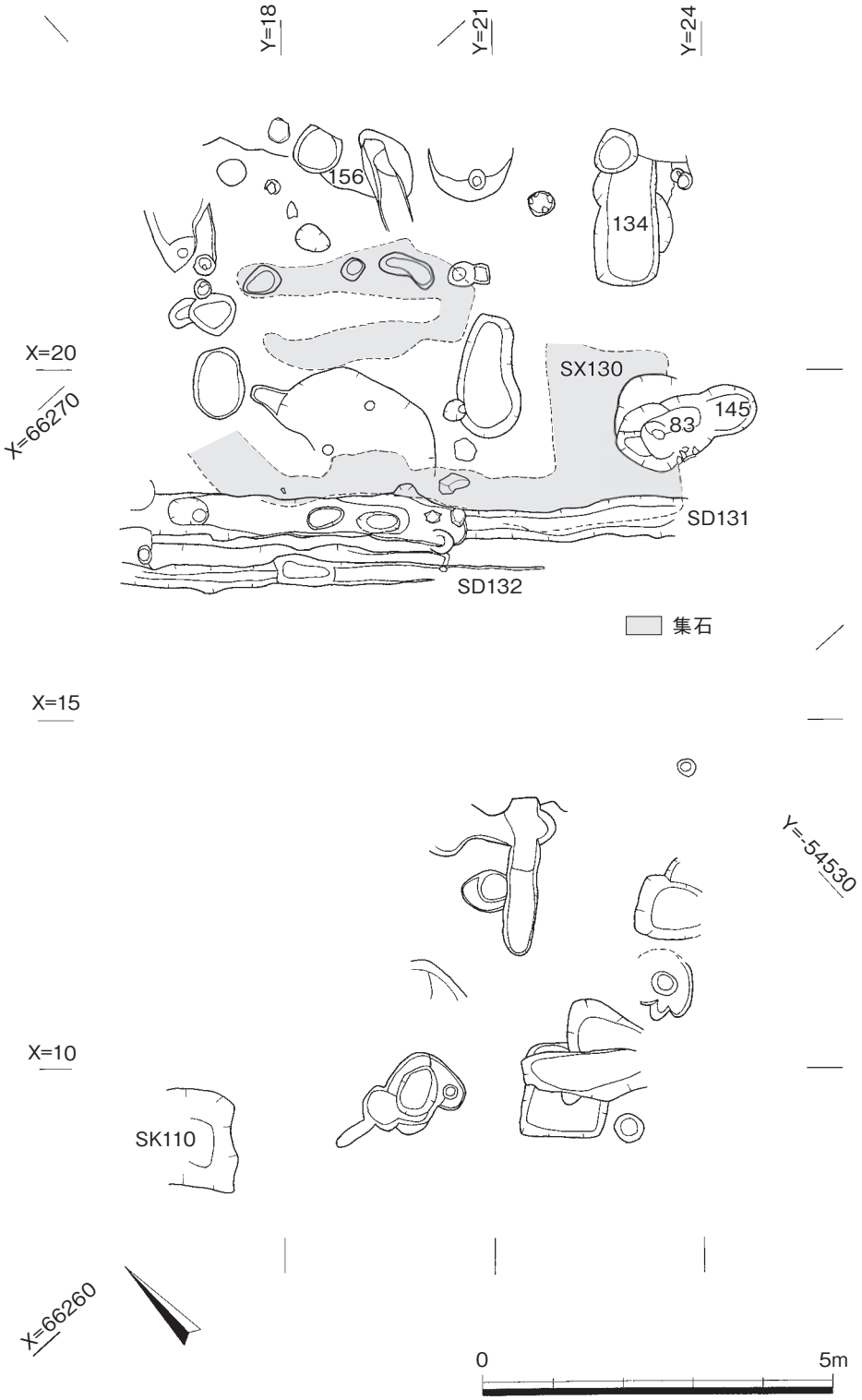


Fig. 5　Ⅱ面全体図（1/100）

Ⅳ　遺構の説明

1．調査の概要

遺物量は多く、狭い調査区にかかわらず、コンテナ500箱を越す量が出土した。遺物の時期は12世紀代が最も多く、16世紀代までの中世の遺物を含む。特に、第Ⅰ面は焼土の広がりが多くみられ、近世と16世紀代とみられる遺構が検出された。そのなかで、SX129とSX105からは黒田氏が入国して間もない頃の家紋瓦や鬼板瓦が出土し、拠点的な施設の設置が考えられる。

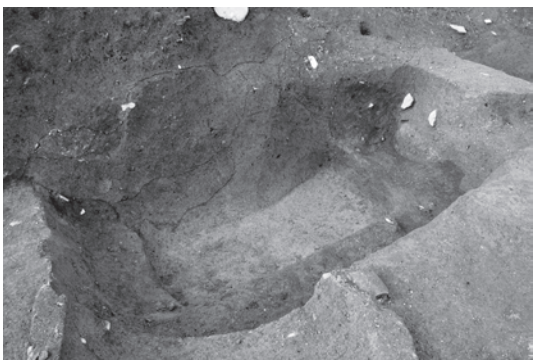
第Ⅱ面からは現在の町割りの方位に近似した帯状の集石列が検出された。建物基礎部分とみられる。第Ⅴ面から検出されたSX647からは多量の輸入陶磁器が出土し、12世紀末の基準資料となる。

そのほか、第Ⅴ面、第Ⅵ面からは弥生中期、古墳前期、８世紀代の須恵器等が出土したが、出土量は少なく、明確な遺構は検出されなかった。

2．第Ⅰ面の調査

標高5.0mで設定した。近世の遺構も多く、SE31は瓦組みの井筒を築き、近代以降までの遺物を含む。SX33も近代以降とみられ、銅滓が多量に出土した。

この面からは中世後半期の遺物も出土し、X＝10より南側の溝が検出された付近では焼土面が広く分布し、炭や灰を多く含むSX35も検出された。



Ph. 5　Ⅰ面SK29検出状況（南東から）

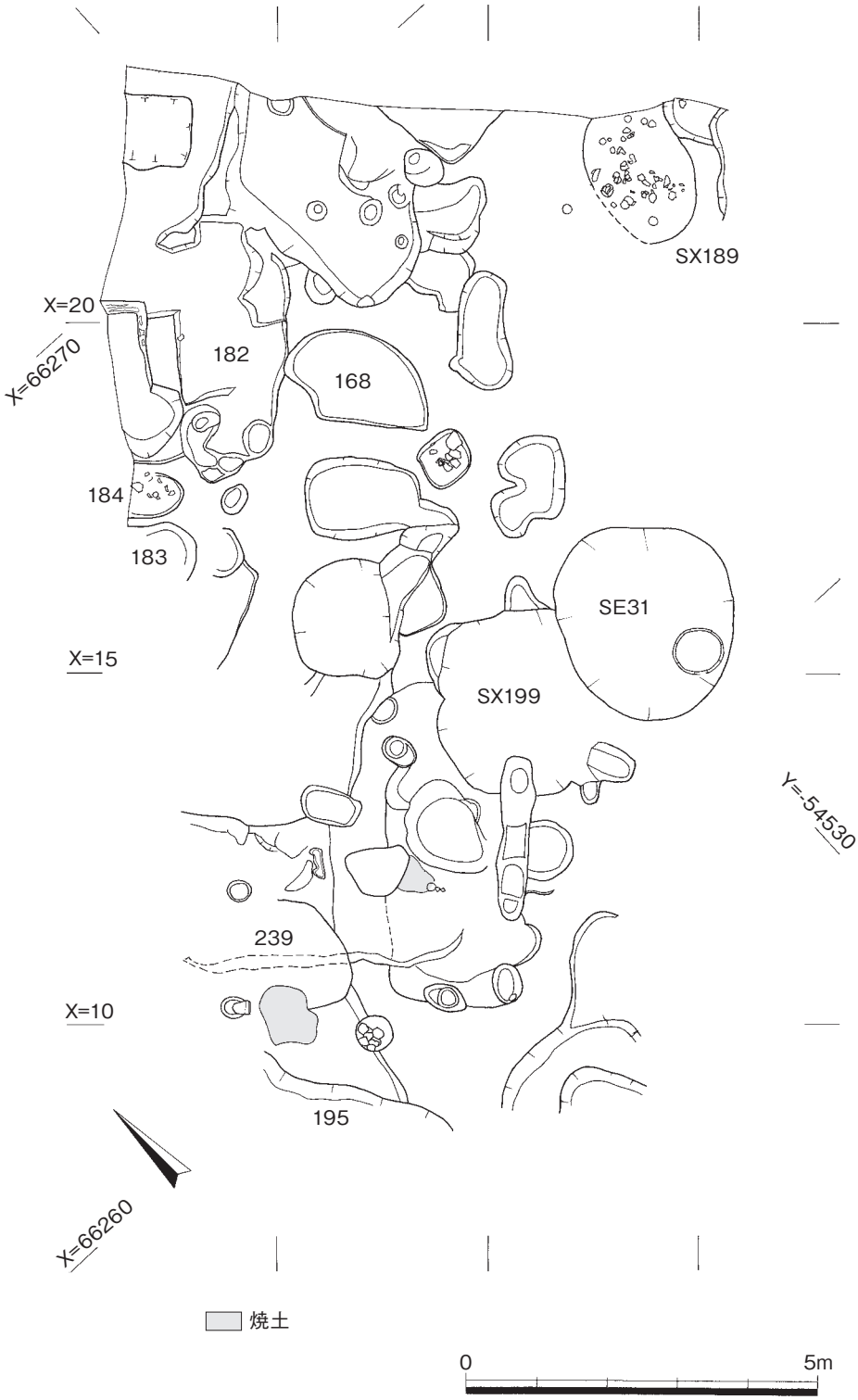


Fig. 6　Ⅲ面全体図（1/100）

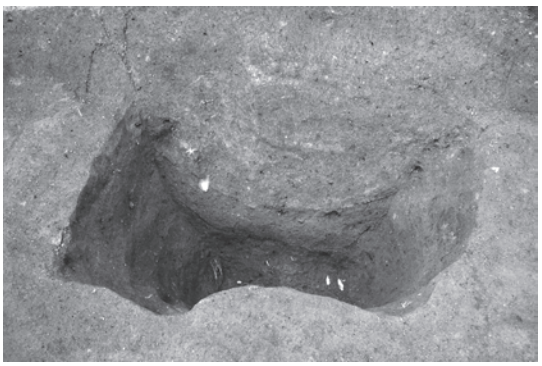
SK29（ph. 5 ）

調査区北東部（X=10、Y=16）で検出された。北側が調査区外となる為に形状が不明であるが、東辺2.5mを測る方形プランとみられる。深さ136cmを測る。周囲に黒灰色土が巡り、底面は先細りしている。板枠か。その内側には上層に明黄色の砂質土、下層にグライ化した灰色粘質土が堆積していた。

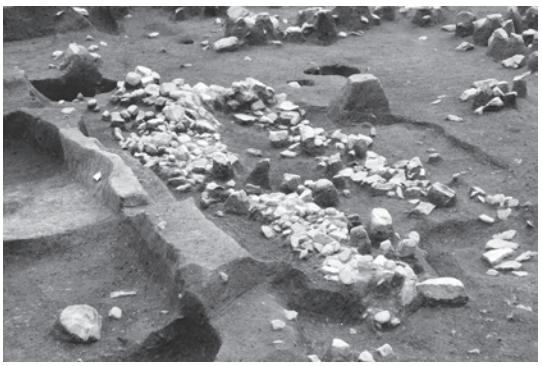
SX129（Ph.30、31、Fig. 19、38の237）

調査区北辺際の中央部（X=13、Y=17）で検出された。全体の形状が不明瞭な不整形プランである。上層に焼土や壁体を多く含み、下層に瓦を多く含む炭混じりの黒色土が堆積している。防湿機能を設けた炉壁下部の可能性もある。

出土した多量の瓦の中に黒田氏の家紋瓦を含む。（Fig.19）復興の博多町割りが実施された時期から黒田氏入国後の17世紀初頭頃までが考えられる。



Ph. 6　Ⅱ面SK110検出状況（南東から）



Ph. 7　Ⅱ面集石SX130検出状況

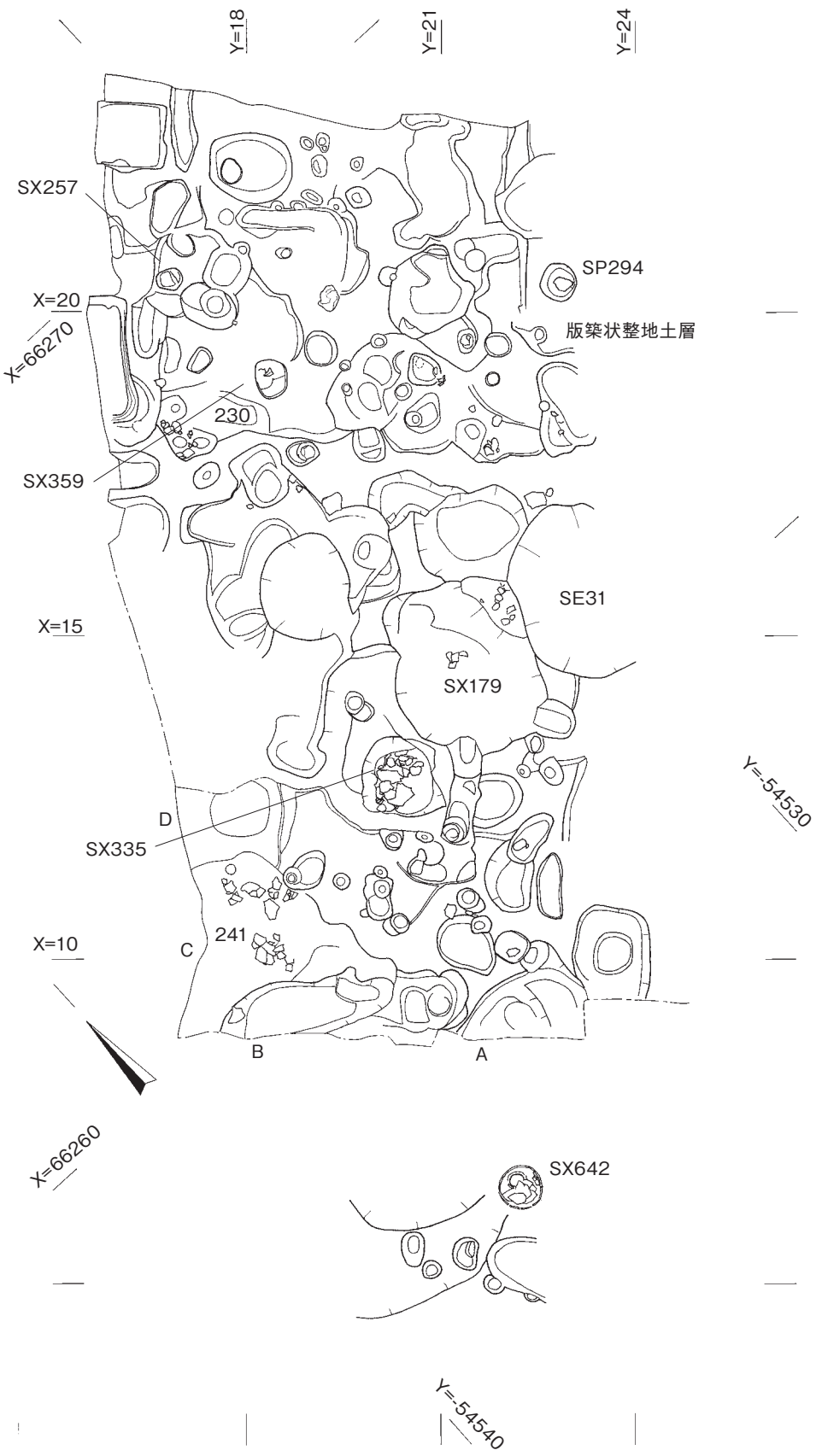


Fig.7　Ⅳ面全体図（1/100）

SX105（Ph.29、Fig.16～21）

調査区中央部（X=14、Y=21）で検出された。長軸長4.5mの楕円形プランを呈し、北側を近代以降のSE31に切られている。中央にかけて深くなり最深部は検出面から約70cmを測る。上層は暗黄褐色砂質土、下層は瓦を多く含み、炭や灰が混じる。

出土遺物はFig19、38に掲載している。時期はSX129と近い時期とみられ、17世紀初頭頃までと考えられる。

3．第Ⅱ面の調査

SK110（Ph.6）

調査区の南西際（X=9、Y=17）で検出された。東辺1.4mの方形プランとみられる。深さ80cmを測り、上層に明黄褐色砂質土、下層にややグライ化した灰色土が堆積する。形状、埋土がⅠ面検出のSK29と近似するが内壁の痕跡は検出されない。

SX130、SD131、132（Ph.7、28、Fig.38）

平行した幅50cmの溝である。深さは30cm程度である。重複して集石列（SX130）が検出された。現在の町並みと同じ方位を取ることから博多町割り以後の遺構とみられる。出土遺物はFig.38に掲載しているが16世紀末以後と考えられる。

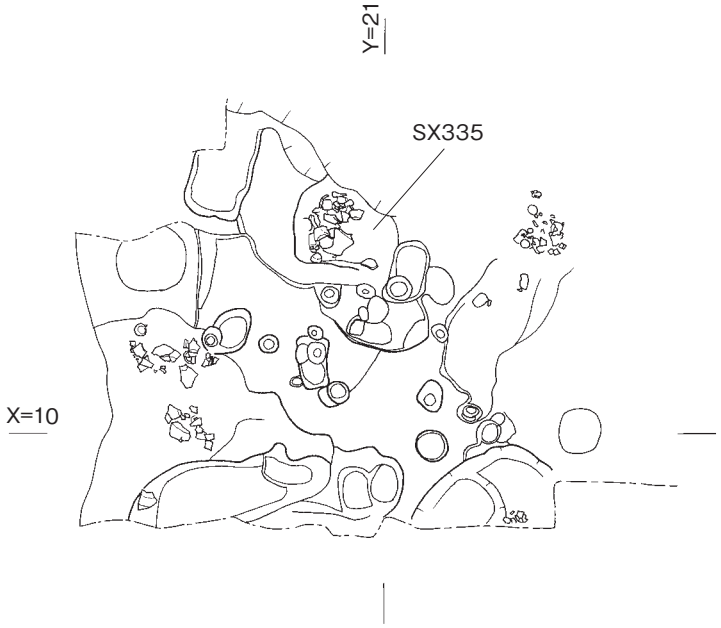
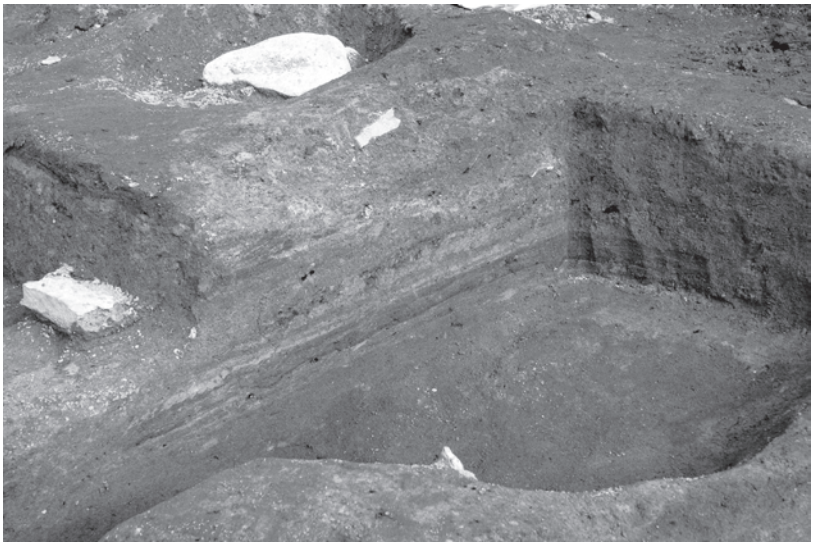


Fig. 8　Ⅳ面下部（1/100）



Ph. 8　Ⅳ面北東部SP294付近の版築状土層（南から）

Ph. 9　SX195遺物出土状況（南東から）

SX83、145（Fig.38）

調査区中央部で検出された。SX83からは獣骨が多く出土。深さ74cm、SX145は深さ50cmを測る。

SX156（Fig.40）

調査区北端で検出された不整形土壙である。

4．第Ⅲ面の調査

SX189やSX182のような土師皿の集積遺構が検出されるようになる。また、南側のX=11、Y=19付近を中心に焼土、炭や炉壁が出土したが、明確な遺構は検出することができなかった。

SX179（Fig.38）

中央部で、第Ⅰ面検出のSX105下層から第Ⅲ面で検出された。1辺2.5mの方形に近いプランである。深さ約120cmを検出したが、第5面で同位置からSE340が検出され、その掘方上部の可能性がある。

SX182（Fig.40）

調査区北西部で検出された土師器集中遺構である。

SX183（Fig.40）

調査区北西部で検出された不整形土壙である。

SX184（Fig.40）

調査区北西部で検出された焼土を含む不整形土壙である。

SX189（Fig.39）

調査区北東隅で検出された。土師器、坏、皿が集中して出土。

SX195（Fig.40）

調査区の南西際で検出された土師器集積遺構である。下部は第Ⅳ面の241となる。

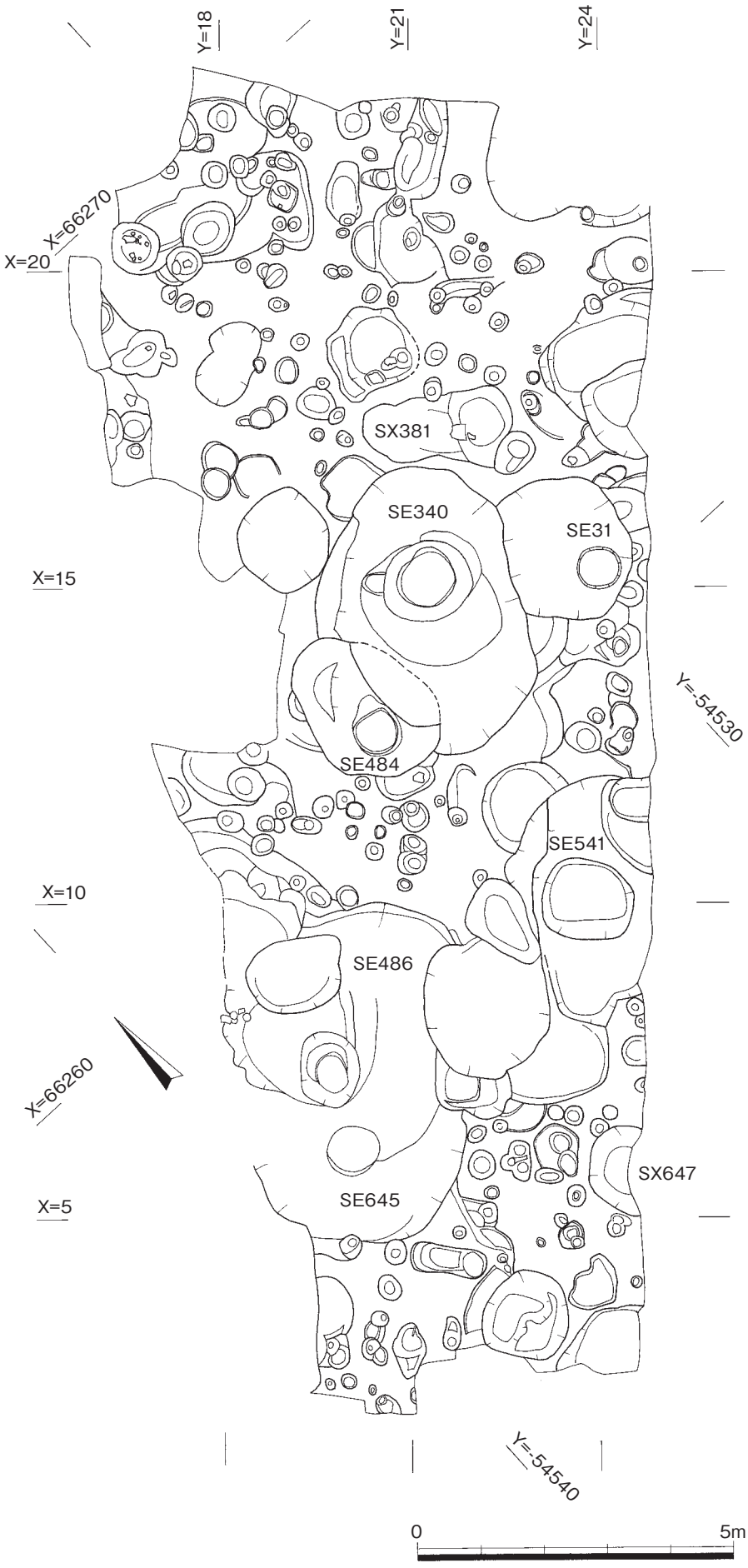


Fig. 9　V面全体図（1/100）

SX239（Fig.39）

調査区の南側で検出された焼土周辺域である。

SX168（Fig.40）

調査区北側で検出された不整形土壙である。

5．第Ⅳ面の調査

SX230（Fig.40）

調査区中央北辺寄りで検出された土師器集中遺構である。上部はⅢ面のSX182と重複する。

SX241（Fig.41）

調査区の南西部で検出された。土器集中遺構である。上部はⅢ面の239と重複する。

SX257（Ph.12、13、32、Fig.12）

調査区の北東部（X=21、Y=17）で検出された。墓壙は明確ではなかったが、人骨1体が側臥屈葬に近い状態で検出された。頭骨、左右の上腕骨、背骨の椎骨、肋骨、片方の大腿骨、腰骨が遺存する。

頭骨の大半が顔面を左にして横向きになっているが、前頭部（顔面）は分離して内面を天にした状態で出土した。この状態はかなり違和感があり、埋蔵後に自然営力で分離してこの位置関係になるものか疑問である。歯は第3大臼歯までが残り、磨耗はほとんどみられない。

骨はかなり細く、頭骨が前頭骨とその後ろの間で分離、縫合があまり進んでいないとみられ未成年、もしく若い成年か。

SX359（Ph.18、19、33、Fig.14）

調査区の北西部（X=19、Y=18）で検出された。陶器四耳

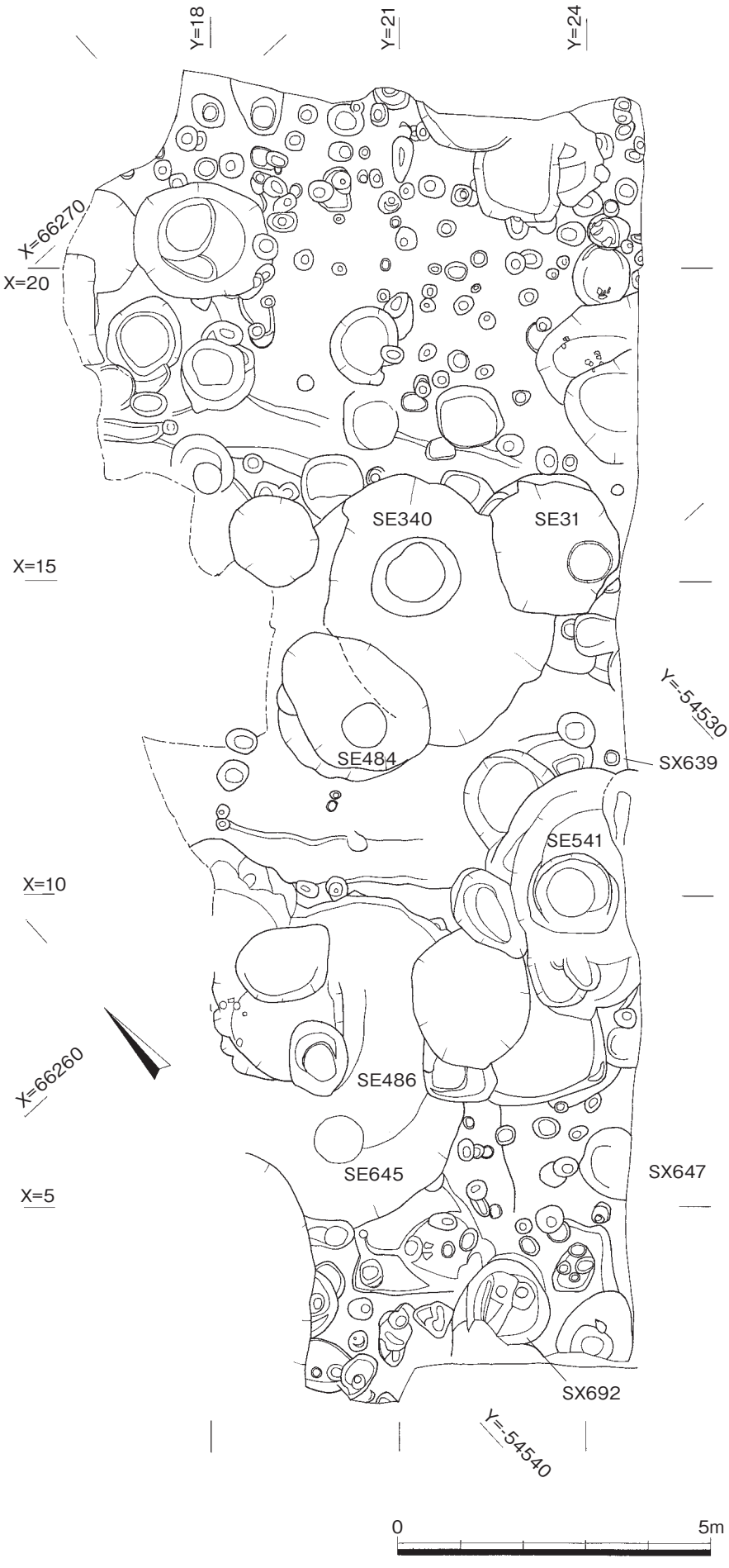


Fig.10　Ⅵ面全体図（1/100）

壷313が倒置した状態で出土した。底部を欠き、内部には白磁椀312が入り込んでいた。

SX449（Ph.16,17,34、Fig.14）

調査区の北西部（X=18、Y=18）でSX359に接して検出された。径85cmの円形プランを呈し、深さ73cmを測る。内部からは陶磁器片とともに獣骨片が出土した。獣骨は未鑑定である。

SX642（Ph.24、35、Fig.15）

調査区の南側（X=6、Y=22）で検出された。径70cm、深さ28cmの掘り方に完形の褐釉陶器四耳壷（321）の1個体が倒置して潰れた状態で出土した。

SP294付近の版築状土層（Ph.8）

第Ⅳ面の調査区北東部SP294付近で版築状の土層がみられた。範囲が限られ性格は不明であるが基壇や道路が考えられる。

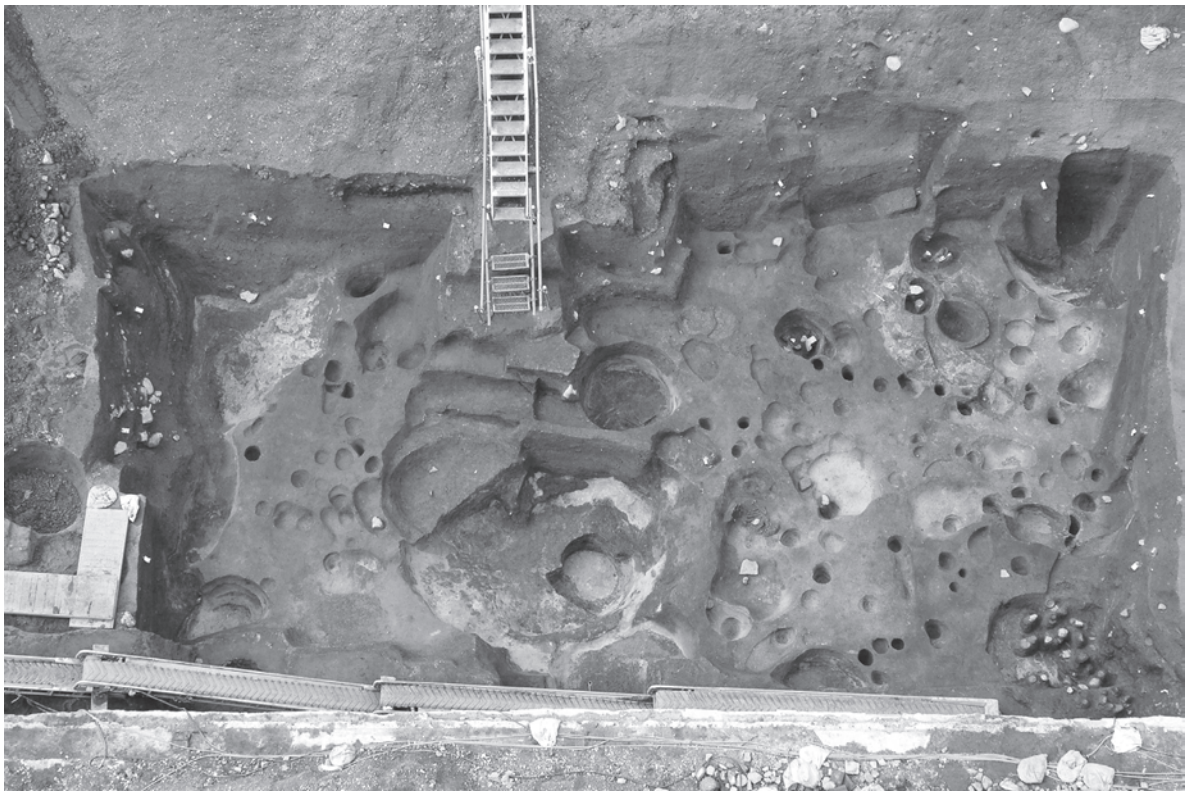
6．第Ⅴ面の調査

SX381（Ph.14、15、Fig.13）

調査区の中央部（X=18、Y=21）で検出された。掘り方は不明瞭であるが、馬骨1体が埋置されていた。未鑑定のため詳細な検討は機会を得て報告する。

SX521（20、21、Fig.14）

調査区の北側（X=19、Y=21）でSX381に近接して検出された。径90cmの円形プランを呈し、深さ40cmを測る。内側に径65cmの炭化した木



Ph.10　第Ⅴ面全景（南東から）

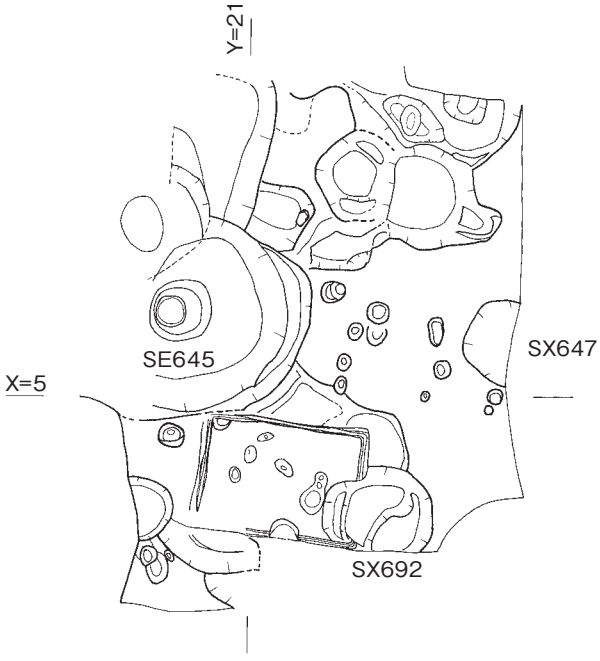


Fig.11　Ⅵ面下部（1/100）

Ph.11　第Ⅵ面全景（南東から）

質が巡り、桶状のものが入っていたと考えられる。その内部からは獣骨が出土したが、未鑑定である。

SX639（Ph.25、Fig.15）

調査区の中央東寄り（X=12、Y=24）で検出された。礫、陶磁器を含み瓦片が集中する。

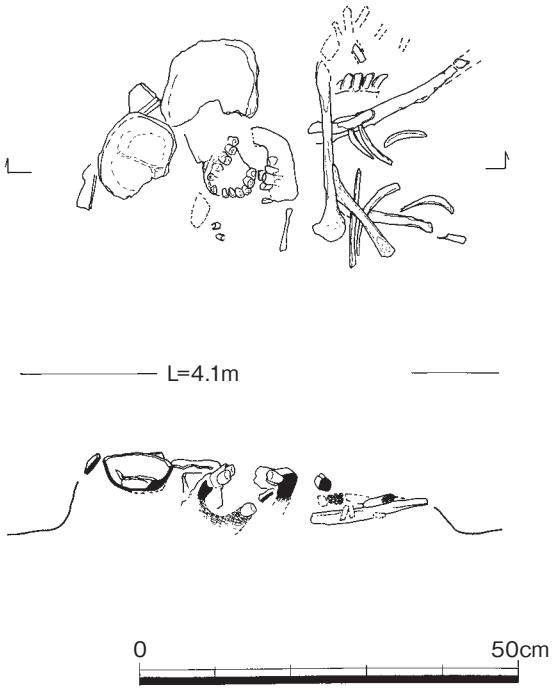
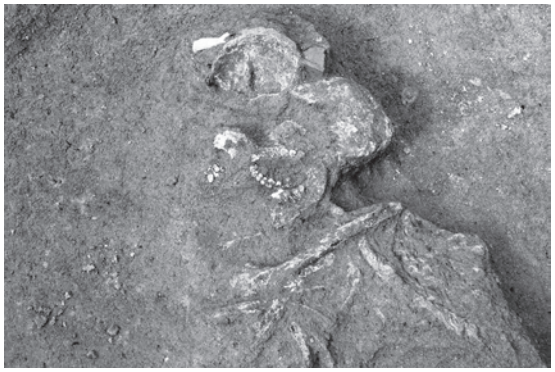


Fig.12　SX257実測図（1/20）



Ph.12　SX257人骨検出状況

Ph.13　SX257人骨検出状況2

Ph.14　SX381　馬骨検出状況（北東から）

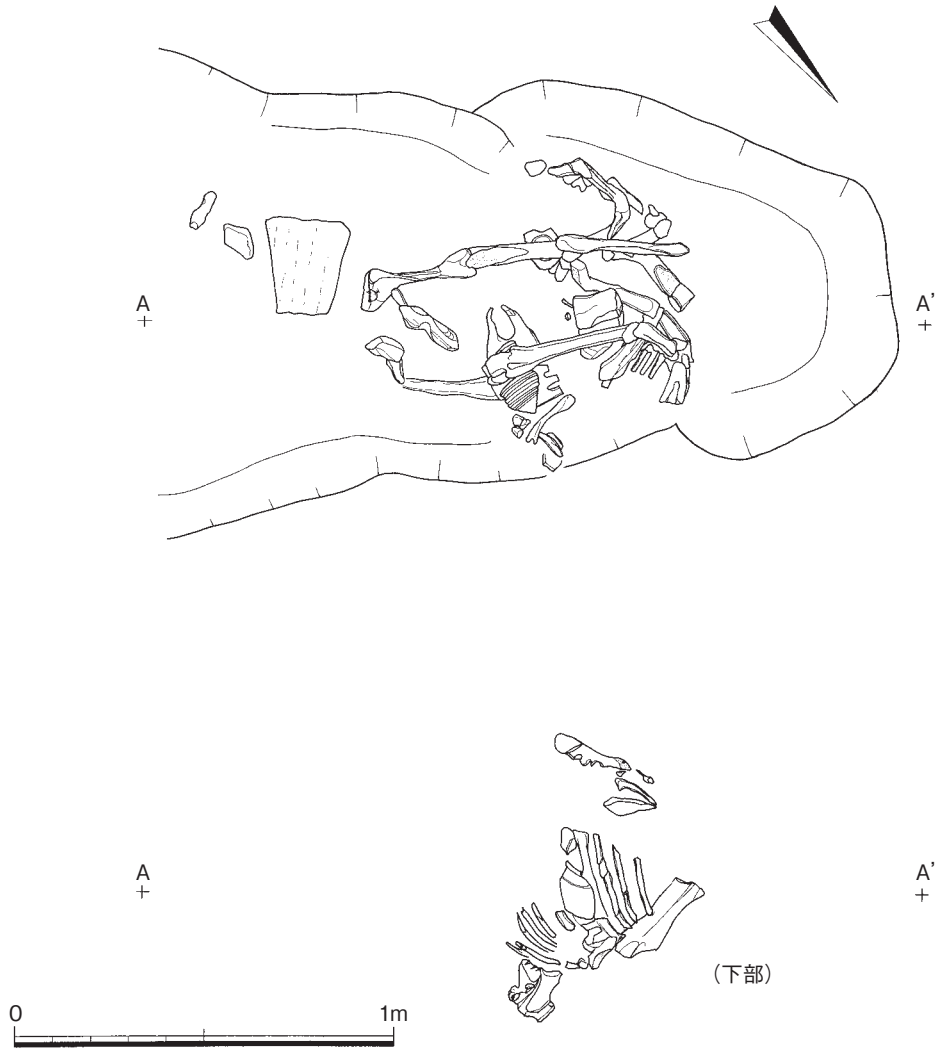


Fig.13　SX381実測図（1/20）

SX647（Ph.1、2、22、23）

調査区の南側（X=6、Y=25）で検出された。径1.2mの円形プランを呈し、深さ75cmを測る。上部の25cm程度の深さまでは白磁片を多く含み、下部に礫を含み陶器片が多くなる。出土遺物に土師器類はほとんど無く、陶磁器片が大半を占める。また、多量の陶磁器片は完形のものは無く、重ねた状況もみられないことから廃棄されたものと考えられる。出土遺物には火熱を受け劣化したものも多い。

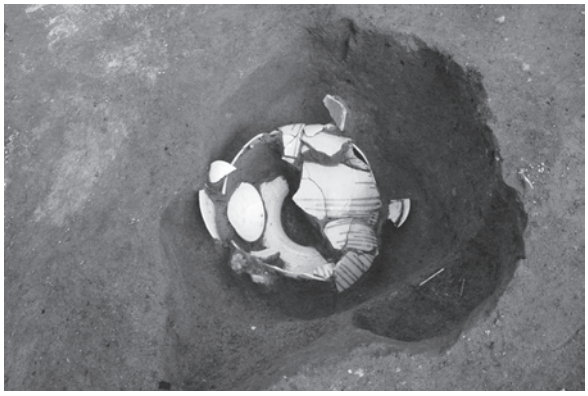
7．第Ⅵ面の調査

地山の明黄褐色砂で、柱穴や井戸の井筒の検出を行った。

Ph.15　SX381　下部検出状況（北東から）

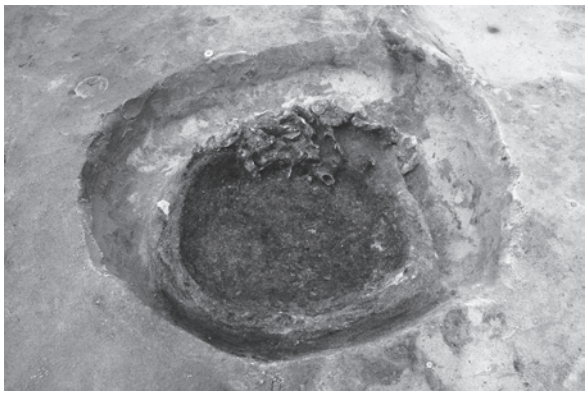
Ph.16　SX449検出状況（北東から）

Ph.17　SX449遺物出土状況（北西から）



Ph.18　SX359検出状況（東から）

Ph.19　SX359陶器壷（東から）



Ph.20　SX521検出状況（南から）

Ph.21　SX521獣骨検出状況（南から）

Ph.22　SX647検出状況（西から）

Ph.23　SX647遺物出土状況（西から）

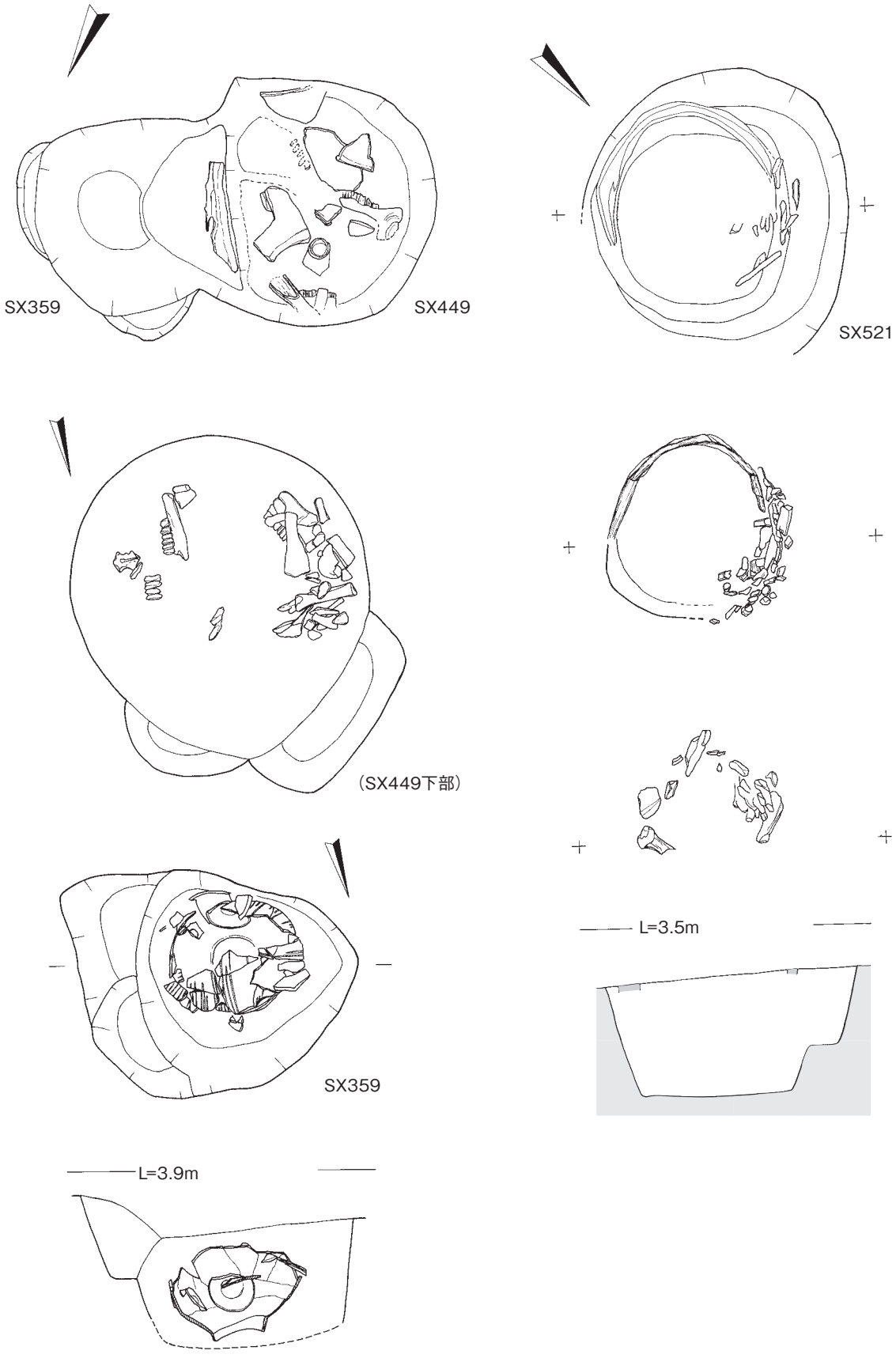
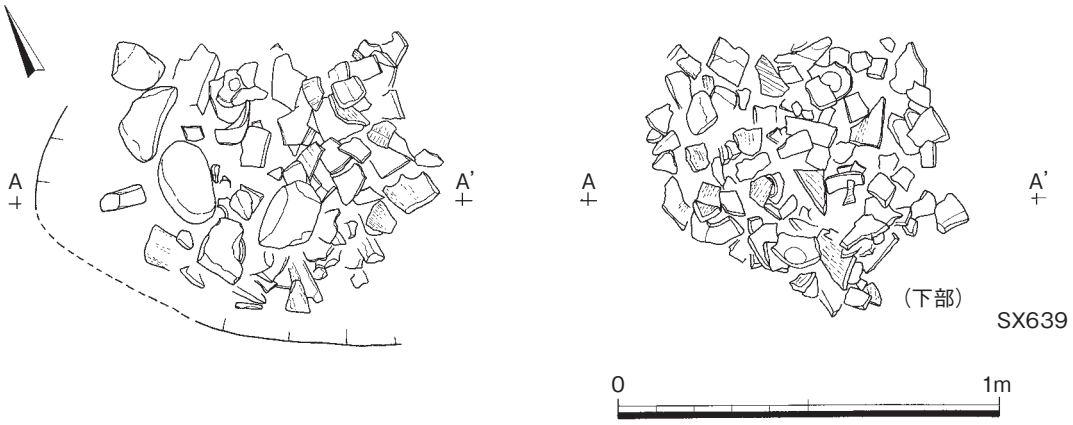


Fig.14　SX449、359、521・実測図（1/20）



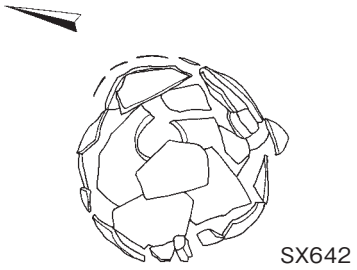


Fig.15　SX639、642実測図（1/20）

Ph.24　SX642検出状況（南から）

Ph.25　SX639遺物出土状況（北東から）

Ⅴ　出土遺物の説明

1．第Ⅰ面　SX105出土遺物

鬼瓦、鬼板瓦

黒田氏の家紋である「橘」「枝橘」の鬼板瓦片が出土したので参考に鷹取城出土の瓦をFig.16に掲載した。

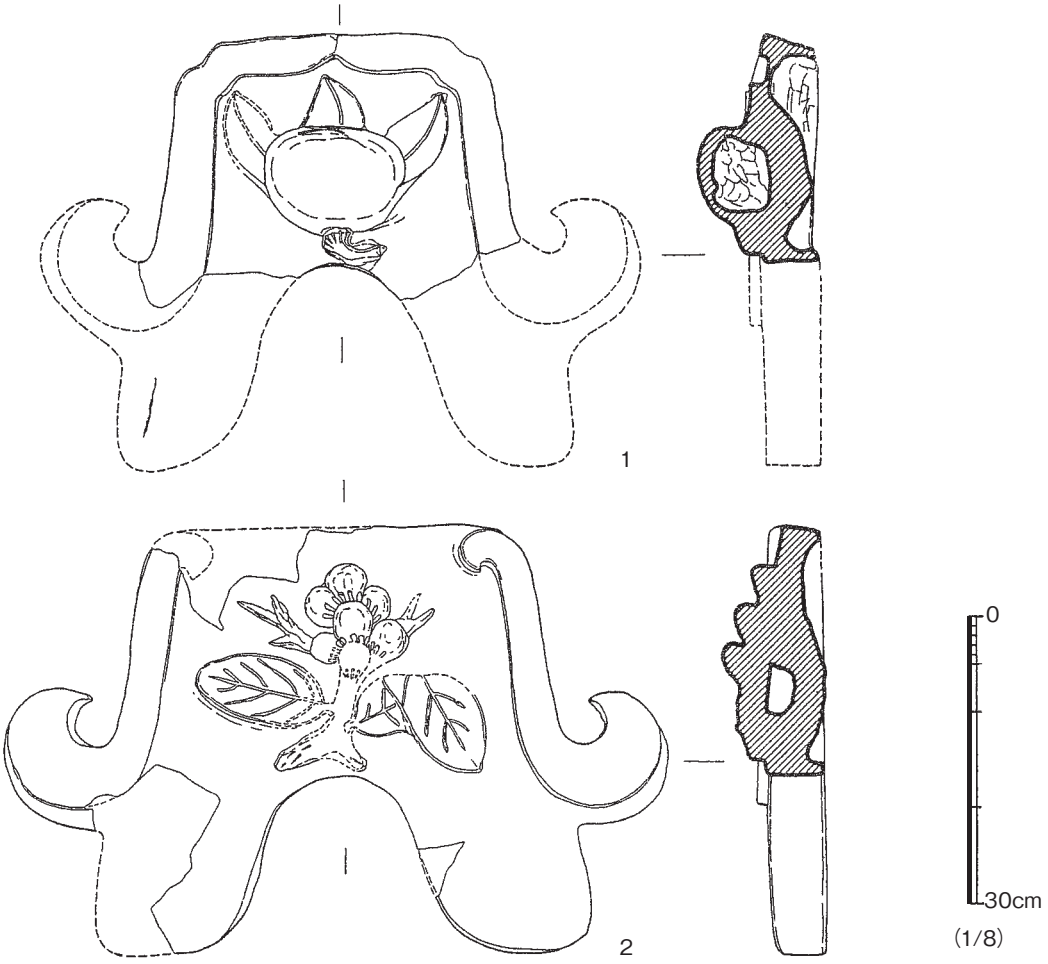
1は直線的に伸びた角か。外面にケズリの条線が残る。径7mmの孔が先端まで貫通している。2は牙で反り返り、断面が丸みのある三角形である。3は耳か。4は反りがある外縁部とみられる。断面V字状の平行した条線がめぐる。

5 ～ 19は鬼板瓦片である。5、6は「橘」紋の果実上部に付した葉の部分である。縁辺と中心軸が盛り上がり、中心軸は湾曲した稜線となっている。7は「枝橘」紋の下部の葉の部分である。葉の外縁部を盛り上げ、内側に線刻で葉脈を表現している。背面には取手の一部が残り、9のような固定用の取手を貼り付けている。8もアーチ部上部に付された「枝橘」紋の一部である。右左斜め上に伸びる枝とそれに重なる葉、下部には分かれた枝が左下に伸びている。9は背面に付けた取手である。アーチ部より上の中心線に貼り付けている。アーチ部には突出した断面方形の顎を貼り付け補強している。

10は幅2cm程度の湾曲した部分が剥離している。「巴」紋の可能性もあるが不明である。11 ～ 19は貼り付けた外縁部で、13 ～ 19は下部の鰭部である。11は幅2.5cm程度で狭いが、側縁の貼り付けた部分のみの高さは4.0cmと高い。上部の中心に向けて低くなるようにナデによる成形を行っている。16は櫛目状の刻みを施した接合面から剥離している。17の鰭部は反転せず、端部を丸く収めている。また、アーチ部も台形に近い。18の粗いナデを施した裏面は光沢がみられる。

丸瓦瓦当

20は周縁を含めた瓦当径は16.0cm、内区径11.6cmを測る。同文、同笵の瓦は名島城、名護屋城からも出土し、名護屋城出土瓦分類のⅠ-R16に比定できる。尖った巴頭の中心に径2mm弱の小さな珠文を配す。巴首のくびれは無く断面は台形に近い。尾は細く伸びて圏線をつくる。珠文は径9mmで断面半球状をなす。周縁の高さは7mm、瓦当部の厚さは2.5cmを測る。裏面の丸瓦部は刻みを施した接合面から剥離している。21は20と同笵である。丸瓦部が接合面から剥離している。厚さ8mmの瓦当面の背面には厚さ13mmの粘土を、周縁には幅16mm、高さ20mmの粘土を加え、丸瓦を接合している。22は輪宝（法輪）の紋様を付した瓦当である。同文の瓦は23の「橘」文とともに長崎市の万才町遺跡から出土している。周縁を含めた径が12.6cm、内区径が9.0cmを測り小さい。中心に周縁に沿って浅い圏線で縁取った円文（轂）を配す。円文の径2.1cmを測り、その断面は低い凸形である。この円文から放射状に8本の肘木（輻）が延びる。この肘木は幅5mm程度で外側に若干広がる。肘木は長さ8mmで凸凹が連続した外輪（輞）に接する。その接した部分は断面V字状に凹む。さらに肘木の外輪外側の延長に鉾先（鋒）の三角形の文様を付されている。上部は丸瓦部との接合面から剥離している。瓦当面の厚さ1.0cmの背後外側に粗い櫛目を施して接合面とし、厚さ1.0cmの粘土を貼り付けている。周縁の高さは1.9 ～ 2.7cmを測り、上部の丸瓦部にかけて高くなる。内区側の高さは9mmを測り高い。23は黒田氏の家紋である「橘」紋を付した瓦当である。周縁を含めた径は14.1cm、内区径は9.3cmを測る。果実部分には上部にヘソを表した5個（遺存するのは4個）の滴状のレリーフ、下部にはヘタを表した3個の三角形状のレリーフが型作られている。果実の周りには中心脈が割れた葉が5葉（遺存するのは3葉）を配している。また、ヘタの中心から下部には茎（枝）を表した屈曲する線とその



（参考）鬼板瓦1、2は鷹取城跡出土
（『鷹取城跡Ⅲ』直方市教育委員会1989より転載）

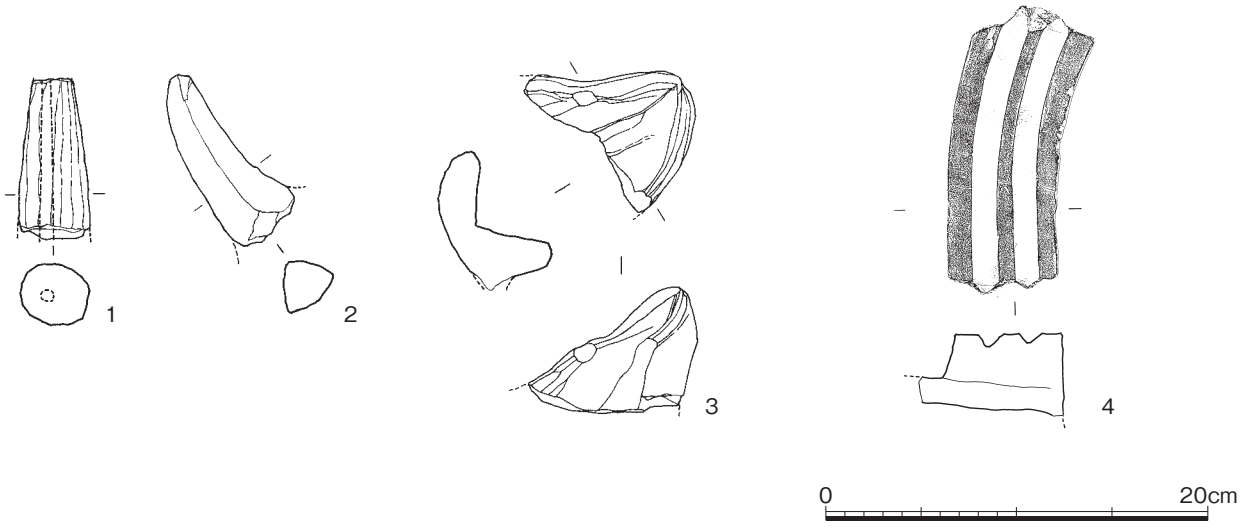


Fig.16　SX105出土遺物実測図１（瓦　1/4）

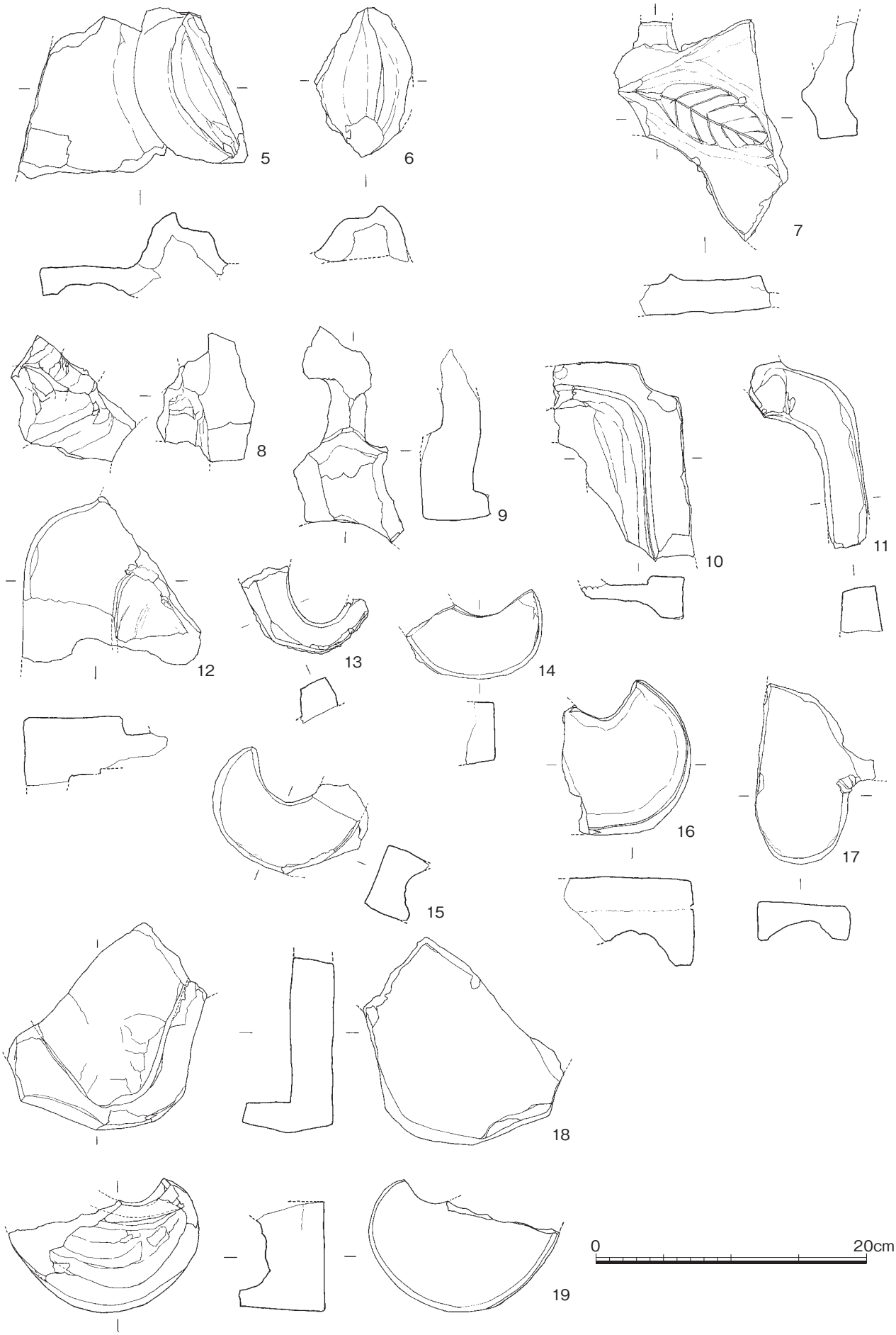


Fig.17　SX105出土遺物実測図２（瓦　1/4）

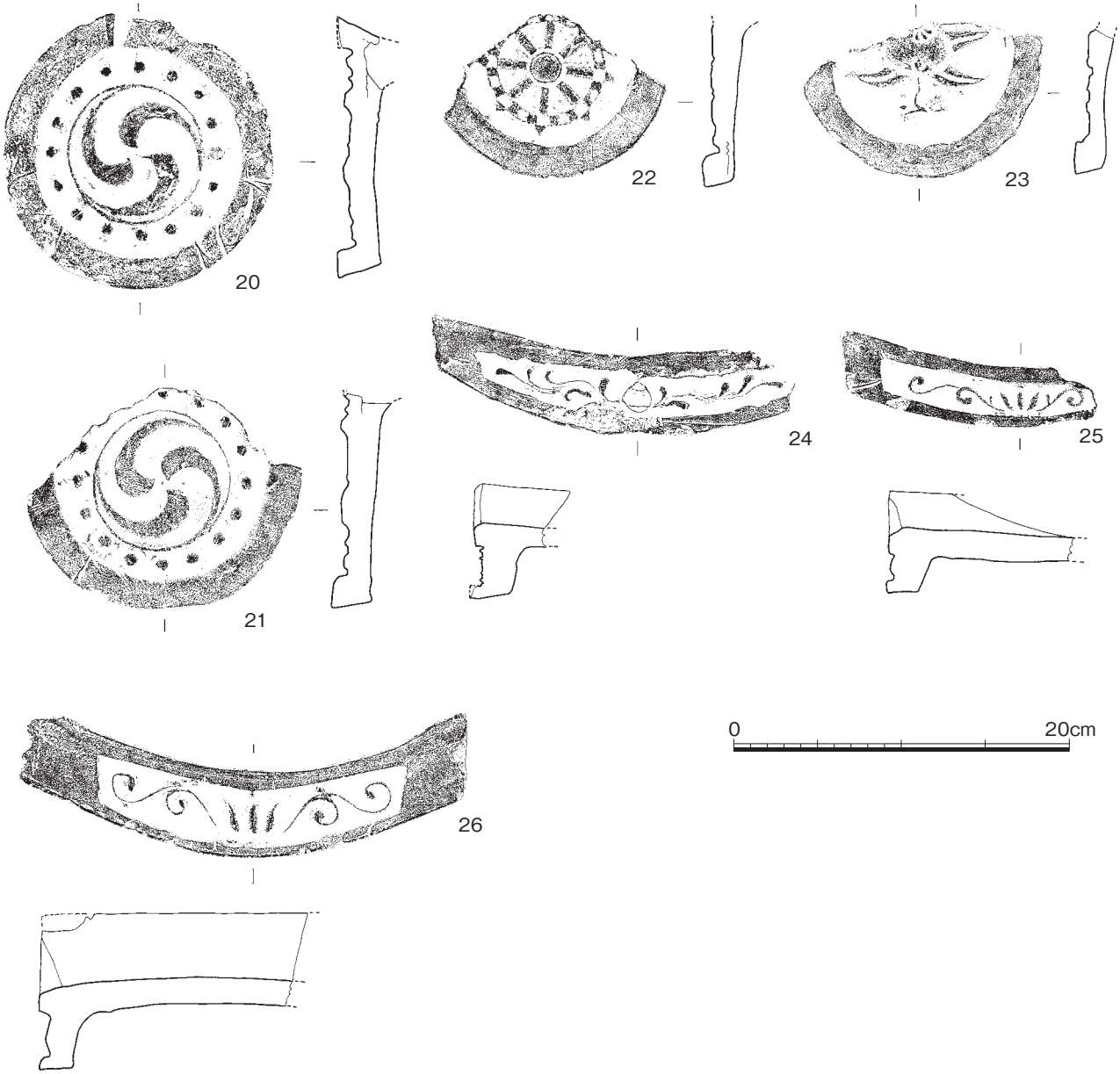


Fig.18　SX105出土遺物実測図３（瓦　1/4）

先端近くに小さい菱形の付点が配されている。上部の丸瓦部は欠損している。瓦当部の厚みは1.3cm、周縁の高さは1.9cm、周縁の内区側の高さは1.0cmを測る。同文、同笵瓦は福岡市名島城、長崎市の教会群が所在する万才町遺跡から出土している。

平瓦瓦当

24は名護屋城出土瓦の分類でⅢ-６類に比定できる中心文に丸い宝珠文を配し、５回転の均正唐草文を付す。瓦当面の幅は側縁から中央にかけて広がり、周縁の高さは3.4 ～ 4.3cm、内区は1.5 ～ 2.4cmを測る。瓦当上縁のヘラケズリの幅は７ ～ 10mmを測り、広がることはなく、ほぼ一定である。平瓦凹面は縦位のナデや板ナデ、凸面は瓦当接合面まで縦位の粗いハケメが明瞭に残る。瓦当の下縁から裏面にかけては横位のナデが施されている。平瓦部との接合面は浅い指頭痕があるが、強いナデ調整はみられない。25は護屋城、名島城ともに同文の瓦当は現在までのところ出土していない。中心飾りの

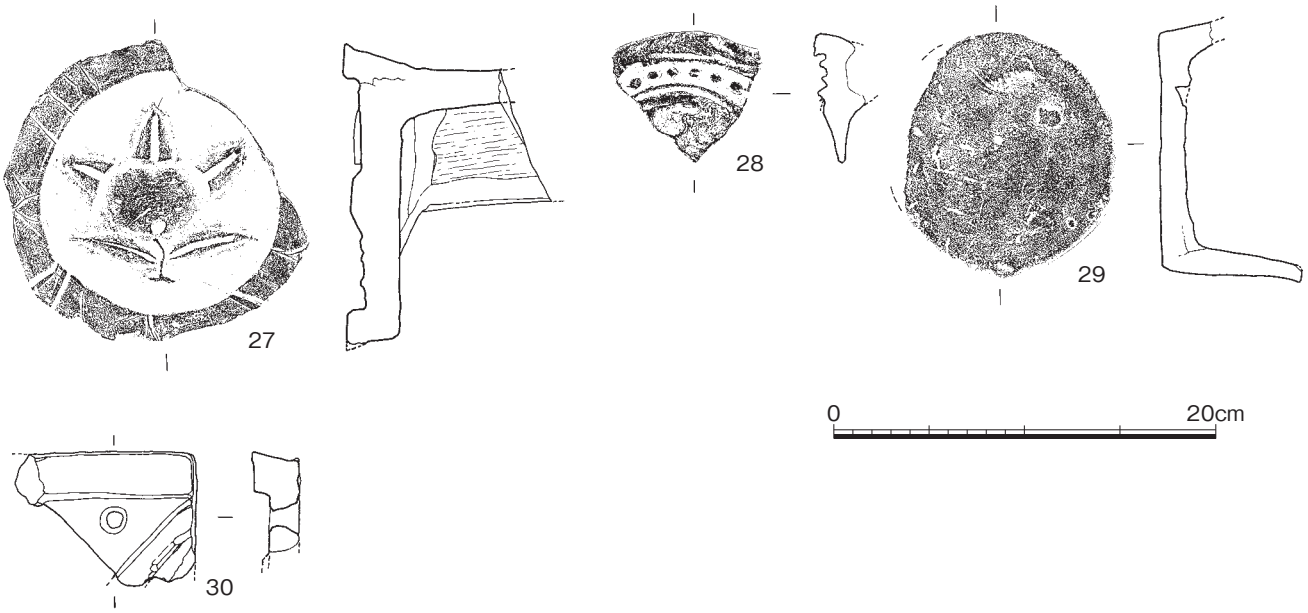


Fig.19　SX105出土遺物実測図４（瓦　1/4）

三葉文の脇葉は直線的ある。接する伸展葉が２回転配されているが、１回転目の途中に短い反転葉が付く。瓦当上縁のヘラケズリは中央部にかけて1.0cmまで広がる。瓦当下縁から裏面にかえて横位のナデが施され、下縁の角は丸みをおびる。平瓦の凸面にかけても、強くはないが、横方向のナデが加えられている。26は名護屋城跡瓦分類のⅠ-１類に比定できる中心飾りの三葉文脇葉は外側へ小さく反る。子葉は接して２回転である。内区幅18.5cm、高さ2.4cmを測る。周縁を含めた幅は26.3cmを測り、上縁部には中央にかけて1.0cmまで広がるヘラケズリを施す。瓦当下縁から裏面にかけて横位のナデを施し角が丸みを帯び、裏面から平瓦凸面にかけての接合部は粘土が被り、横位のナデによって丸く移行する。平瓦凸面は不定方向のナデ調整、凹面は縦位と横位のナデが丁寧に加えられている。

２．第Ⅰ面SX129出土瓦

27は黒田氏の家紋である「橘」文を付した瓦当である。果実上部のヘソは割れたように抉り込ませ、下部のヘタは小さな楕円形の凹で表す。上部に中心が割れた３葉を配し下部の茎に２葉を付ける。周縁を含めた径は16.0cm、内区径は11.7cmを測る。内区側の周縁の高さは９mmを測る。瓦当の一部が接合面から剥離し、瓦当面に丸瓦部を薄く被せ、接合面に櫛歯状の刻みを入れて、その上部に反り上がる周縁を接合していることがわかる。丸瓦凸面は縦位のナデ、凹面には布目がわずかに残る。明黄灰色を呈し、軟質の焼成である。28は丸瓦瓦当の小片である。小さく、高い珠文が密に連続し、内側に巴文の尾とみられる細い凸線がめぐる。裏面は丸瓦部が剥離している。明黄褐色を呈し軟質である。前代の混入か。29は垂先瓦か瓦質の容器とみられる。楕円形の短い筒状の形状を呈す。長軸長12.8cm、短軸長11.5cm、深さ7.5cmを測る。外面はヘラやナデ調整によって滑らかに仕上げられ、内面は底面が強いナデ、側面には横位のハケメが部分的に残る。外面黒色を呈す。30は棟込瓦である。上、下縁を凸帯で縁取った内側に菱文を連続して、間隔を置いて釘孔を配したものである。名島城からも同タイプが出土している。

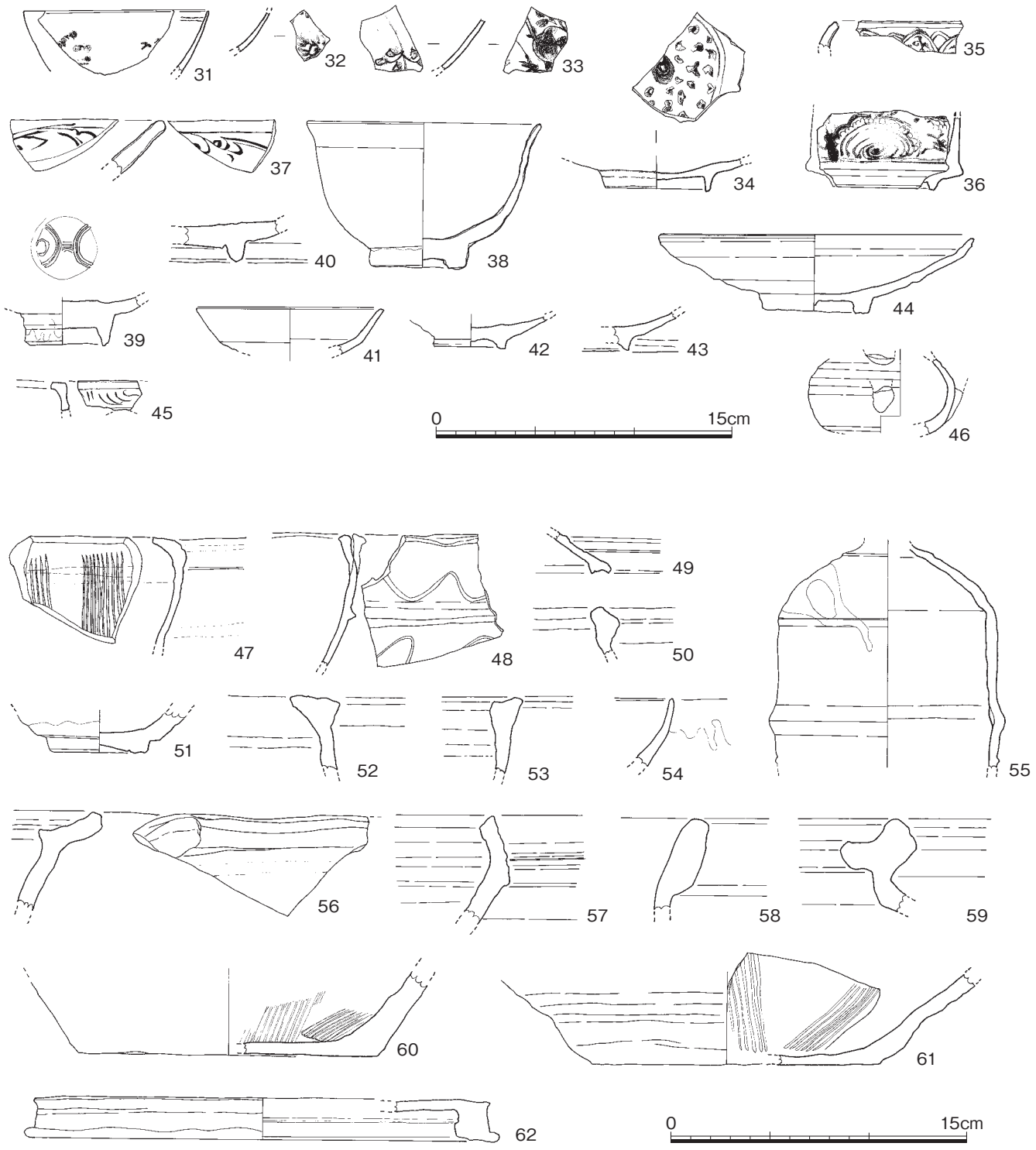


Fig.20　SX105出土遺物実測図５（土器　1/3）

３．第Ⅰ面SX105出土土器（Fig.19）

磁器など

31は染付で、伊万里の混入であろう。32 ～ 36は青花である。36の内面は露胎である。37は青磁、38は朝鮮青磁である。胎土は赤褐色を呈し、陶器に近い。釉は畳付から高台内側の底部にまで掛かる。39も朝鮮の白磁か。内底にスタンプ文が付く。釉は緑がかる黄灰色に発色し、高台の内側まで掛かる。

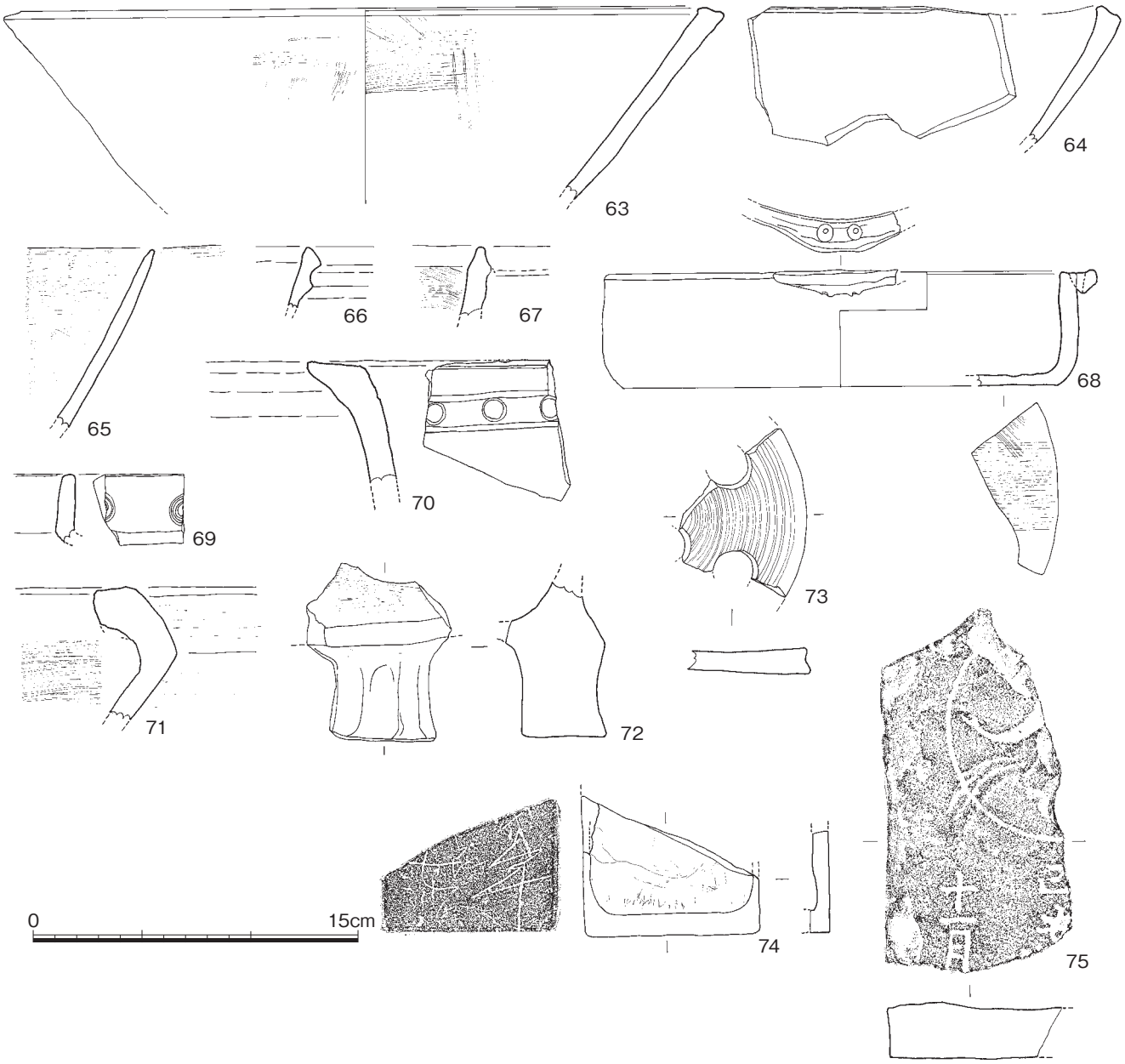


Fig.21　SX105出土遺物実測図 6 （土器、硯、板碑　1/3）

40は青磁皿である。41は青磁小皿、42は朝鮮青磁小皿である。内底に 3 箇所の目跡が残る。43は粉青沙器である。内外面に白化粧土がハケ痕を残し施されている。44は朝鮮青磁皿である。内底部と高台畳付に4箇所、砂目跡が残る。外底部まで施釉され、口唇部は剥落し赤褐色を呈す。45は青白磁香炉で、前代の混入である。46は粉青沙器の小壷である。内外面に白化粧土が掛けられている。

陶器

47は褐釉陶器摺鉢である。内外面の口縁部付近のみ施釉している。48は黒褐釉の片口である。49は黄褐釉の蓋である。50は緑色がかる褐釉陶器壷である。51は黒釉の天目である。厚い釉が下底近くまで垂下している。52は褐釉、53は緑色がかる褐釉で、外面と内面の口縁部から2.5cm下がった位置まで施釉されている。54は外面上部に黄灰色の釉が垂下し、露胎部は橙色を呈す。55は褐釉の竹筒状の水入である。上部に白色の釉が垂下している。内面は露胎。56は褐釉陶器片口、57、58は備前焼であ

る。59は褐釉陶器壷である。60の褐釉摺鉢は内底部が光沢のある橙色に発色している。61陶器摺鉢は青灰色の須恵器に近い。62は器台か。備前焼に近い発色である。

土師質、瓦質土器

63は土師質の捏蜂である。内面に3本の浅い摺目状の沈線がみられる。64も土師質の片口である。65は土師質土器で口唇部が尖る。火熱を受け、内外面に煤が付着し、外面が赤変している。66は陶器に近い。67は瓦質土器、68は土師質の焙烙状の鍋である。火熱を受け、内外面に煤が付着している。耳に取手を付ける2穴を穿つ。69は土師質の湯釜、70は瓦質に近い（火）鉢、71は土師質である。72は土師質の鉢脚部である。73は土師質の七輪、74は黄灰色の粘板岩質の硯である。裏面に「七」、「年」の線刻がみられる。75は板碑である。

4．第Ⅴ面SX647出土遺物

完形がなく、破片の形で陶磁器類が多量に出土した。以下、個体数は底部の破片の大きさから1個体を推定した数値である。特に白磁椀102、103と高台が付いた小皿122、123、青磁椀122、青磁小皿136が群を抜き多い。

青白磁

76、77は同タイプの椀である。口ハゲで外面に蓮弁、内面に草花の劃花文を施す。火熱を受け、劣化している。3個体の破片が出土。78は内底部の圏線がなく緩やかに体部が広がる口径が大きい椀である。底部も薄く、遺存する全面に施釉されている。76と類似した劃花文を施す。79と80は同一個体とみられる。高台内側の外底部が露胎である。3個体分の破片が出土。81と82は同一個体とみられる。81の口縁端部は外湾している。82は櫛目文を多用する。高台畳付から内側の外底部が露胎で淡褐色を呈す。1個体分のみの出土である。83から87同タイプの椀である。16個体分の破片が出土した。内面見込みの圏線内に片彫りと櫛目による草花文を施す。文様は83のような複雑なものから87のような簡略化したものまでみられる。高台畳付から内側の外底部が露胎である。88は83にみられるように内面体部の中位に小さく、劃花文を施す。89～91の小皿は口縁端部が水平に近く折れ、輪花の刻みを施す。91には白堆線を付す。外底部が露胎で褐色を呈す。92の小椀は内面見込みに印花文を施す。外面の高台畳付から底部にかけて露胎で黒褐色を呈す。1個体のみの出土。93の小椀の内面見込みには圏線がめぐり、高台畳付にはハマを有す。

白磁

94と95は同一個体とみられる。内面見込みの圏線がなく、体部は緩やかに立ち上がった口径が大きい浅い椀と思われる。器胎は薄く、内面に細い劃花文が施されている。高台を含め施釉され、外底部は露胎である。釉は青みがかる灰白色を呈す。3個体分が出土。96と97は同一個体とみられる。文様、色調等が95に近似する。内面の見込みの圏線が径2.7cmと小さい椀である。施釉範囲も95と同じである。2個体分が出土。98は青みがかり青白磁に近い。体部が外側へ広がり浅皿に近い器形である。内面には櫛目で囲まれた中に片彫りの劃花文が施されている。施釉範囲は95、97と同じく高台から内側の凹んだ底部の一部までである。99と100は同一個体の可能性がある。99の口縁部は大きい波状の輪花となり、端部は小さく外反する。外面の外反した口縁端部下に釉溜りがみられる。内面に細い劃花文が施されている。100の外面は釉の厚さにムラがみられ、高台畳付から外底部にかけては露胎である。外底に墨が付くが墨書とはみられない。釉色は95、97、99と近似した灰白色を呈す。101は青みがかった灰白色を呈し、青白磁に近い。高台畳付きから外底部にかけて露胎である。体部、底部ともに器胎が薄く、内面に櫛描文が施されている。1個体のみの出土である。102は内面見込みの釉を輪状に掻き

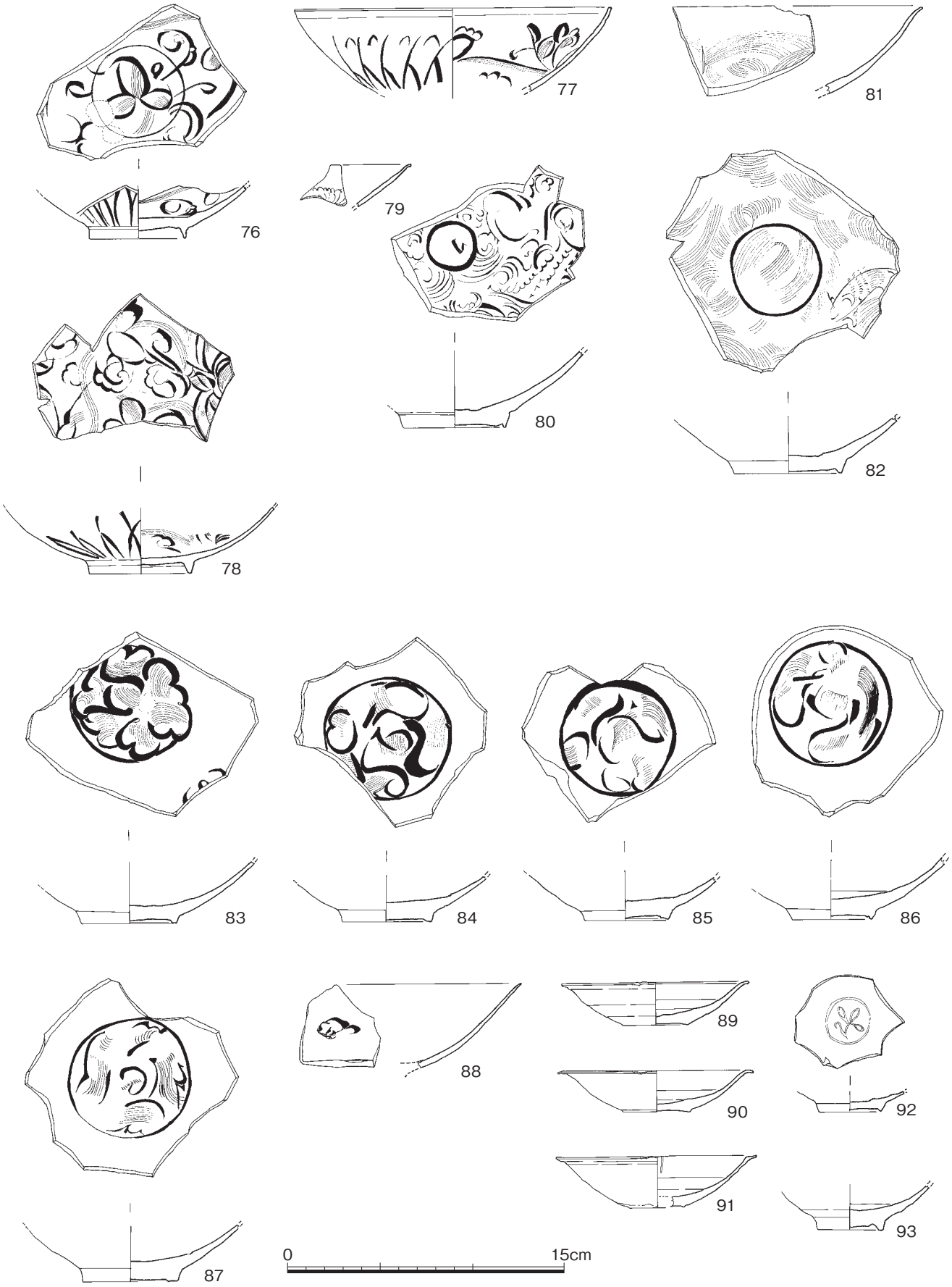


Fig.22　SX647出土遺物実測図１（青白磁、白磁　1/3）

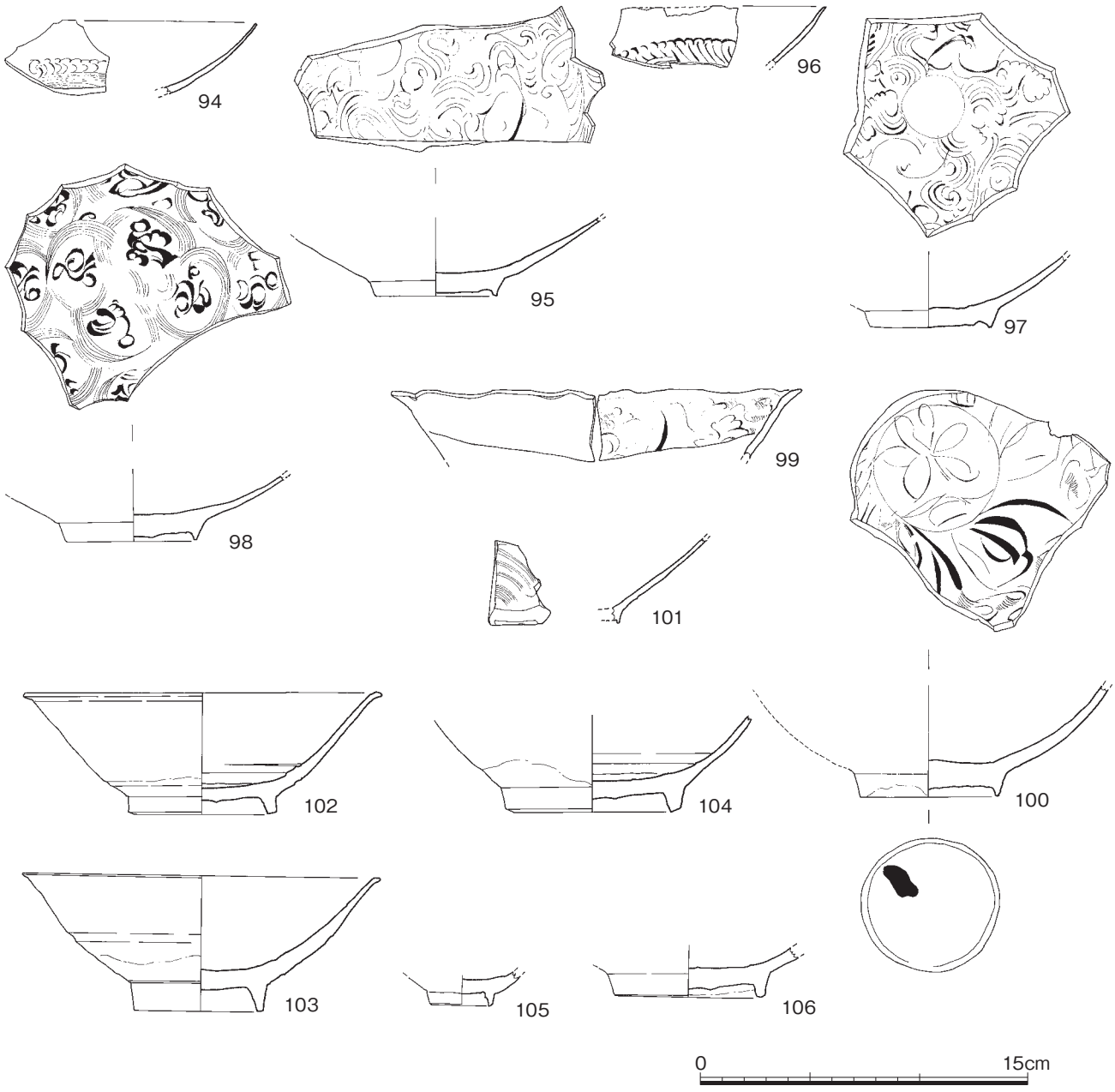


Fig.23　SX647出土遺物実測図２（白磁　1/3）

取った大宰府分類のⅧ-１類である。口縁端部が折れ、体部下位は露胎である。41個体が出土し、103とともに多量である。103は大宰府分類のⅤ-４aに比定できる。外面体部下位は露胎である。最も多い175個体分の底部が出土した。104は内面見込みを輪状に掻きとる。外面体部下位は露胎である。高台径が大きく、畳付は幅広く切られている。105は外底部まで全面に施釉された小椀である。１個体のみの出土。106は高台畳付まで厚い釉が施されている。２個体分が出土。

120を除く107 ～ 121は白磁小皿である。120は青磁である。内面の文様から107の無文、108 ～ 113の箆による湾曲した線による劃花文、114、115、118、119、121の花弁と茎をモチーフにしたものとその他に分けられる。107 ～ 113は体部中位で折れ、露胎の底部は上げ底である。33個体以上が出土した。114 ～ 121の底部も露胎である。114は平底で３個体分が出土。118の底部は突出し、平坦である。３個体分が出土。119は口径が大きく底部が段を有して凹む。４個体分が出土。120は青磁皿である。底部

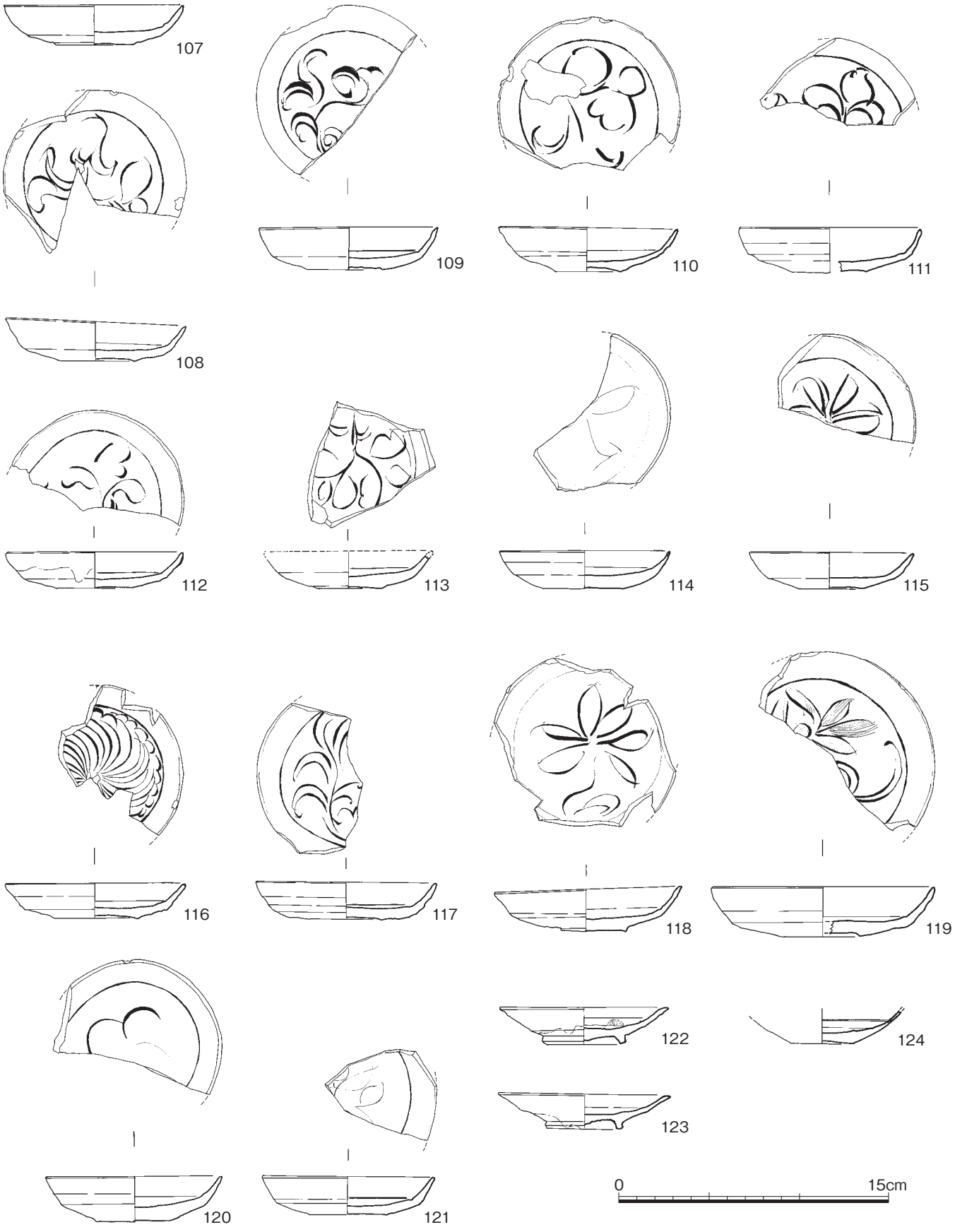


Fig.24　SX647出土遺物実測図３（白磁小皿　1/3）

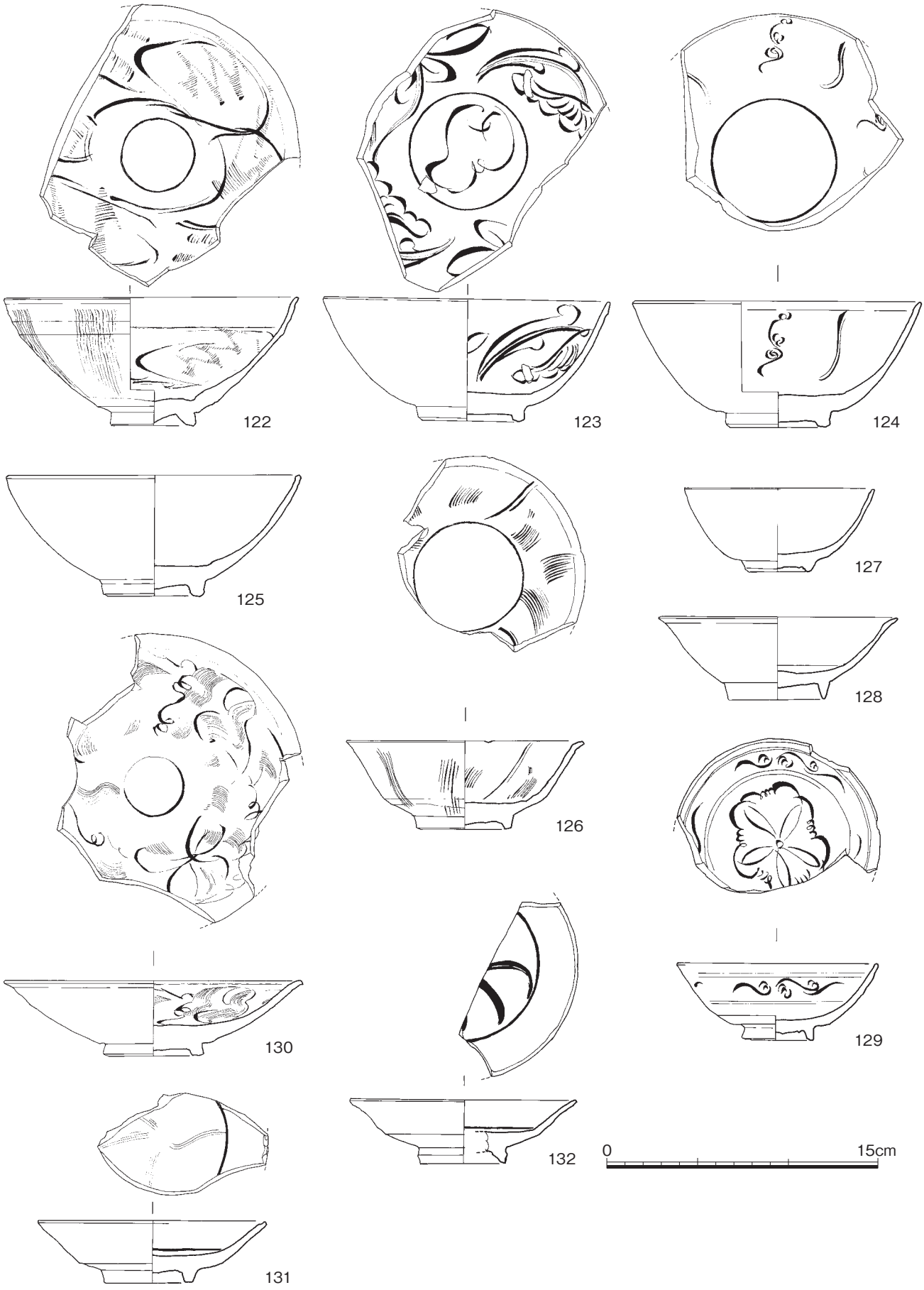


Fig.25　SX647出土遺物実測図 4 （青磁　1/3）

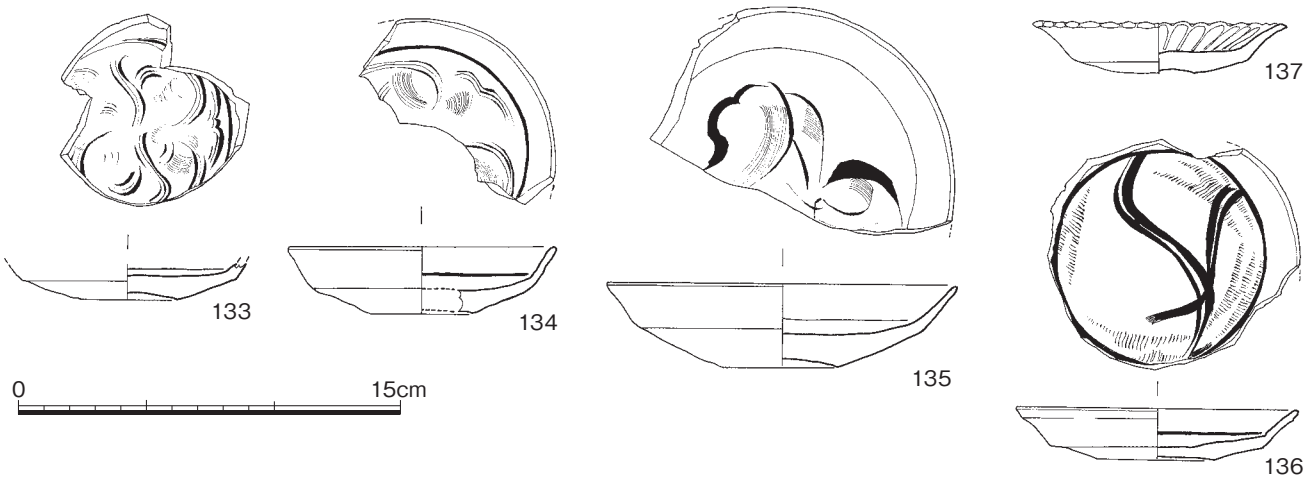


Fig.26　SX647出土遺物実測図５（青磁小皿　1/3）

は少し突出し、平坦である。内面に浅い劃花文が施されている。122、123は高台付き皿である。122の内面見込みに一部砂目跡が残り、釉が輪状に掻き取られている。外面体部下位は露胎である。43個体以上が出土。123の内面全体と外面中位までを施釉している。６個体以上が出土。124は器胎が薄く、上げ底の底部は露胎である。

青磁

（122から124の番号は前項の白磁皿と重複）122は大宰府分類の同安窯系Ⅰ-１b類である。43個体分が出土。123は龍泉窯系Ⅰ-２b類である。３個体分が出土。124は輪花の有無は判らない龍泉窯）系のⅠ-４類である。３個体分が出土。125は無文の龍泉窯系Ⅰ-１a類に比定できる。高台畳付から外底部にかけて露胎である。６個体分が出土。126は同安窯系の小椀である。外反した口縁端部には輪花を有す。外面に粗い櫛目、内面には片彫りの２本の線で区画し、櫛目を３箇所配す。体部下位から下部は露胎。１個体分のみ出土。127は龍泉窯系の小椀である。深みのあるオリーブ色を呈し、高台畳付から外底部にかけて露胎である。体部は湾曲して立ち上がり、口縁端部は直口である。１個体分のみ出土。128も無文の小椀である。口縁端部が外反し、施釉は外面体部の下位までである。129は龍泉窯系の小椀である。明色のオリーブ色を呈し、高台畳付から外底部にかけては露胎である。内面の体部上位に沈線を巡らして、文様帯を画し、劃花文を施す。内面見込みには花弁が彫られている。３個体分出土。130は浅形椀である。口縁端部が外反し、外面の端部下に釉溜りを生じている。明るく淡い緑色に発色し、高台畳付から外底部にかけて露胎である。外面は無文、内面には短い櫛目と箆描きの草花文が施されている。１個体分のみ出土。131、132は同安窯系の高台付きの皿である。内面見込み中心から２本単位の櫛目を５本、放射状に刻む。黄色が強いオリーブ色に発色し、高台から外底部は露胎である。２個体分出土。

133、134は同タイプの龍泉窯系皿のⅠ-２c類である。底部は上げ底となり、露胎である。水色の発色である。７個体が出土。135は法量が大きい龍泉窯系皿Ⅰ-１c類である。明緑灰のオリーブ色を呈し、上げ底の底部は露胎である。３個体分が出土。136は同安窯系皿Ⅰ-１b類である。外底部は露胎である。19個体が出土。137は龍泉窯系に近い緑色が強い明オリーブ色を呈す。内面に細かい花弁文が連続し、外反した口縁端部には小さく波状となった輪花が施されている。外底部は焼成前に釉が掻き取られ、露胎となり黒褐色を呈す。１個体のみの出土。

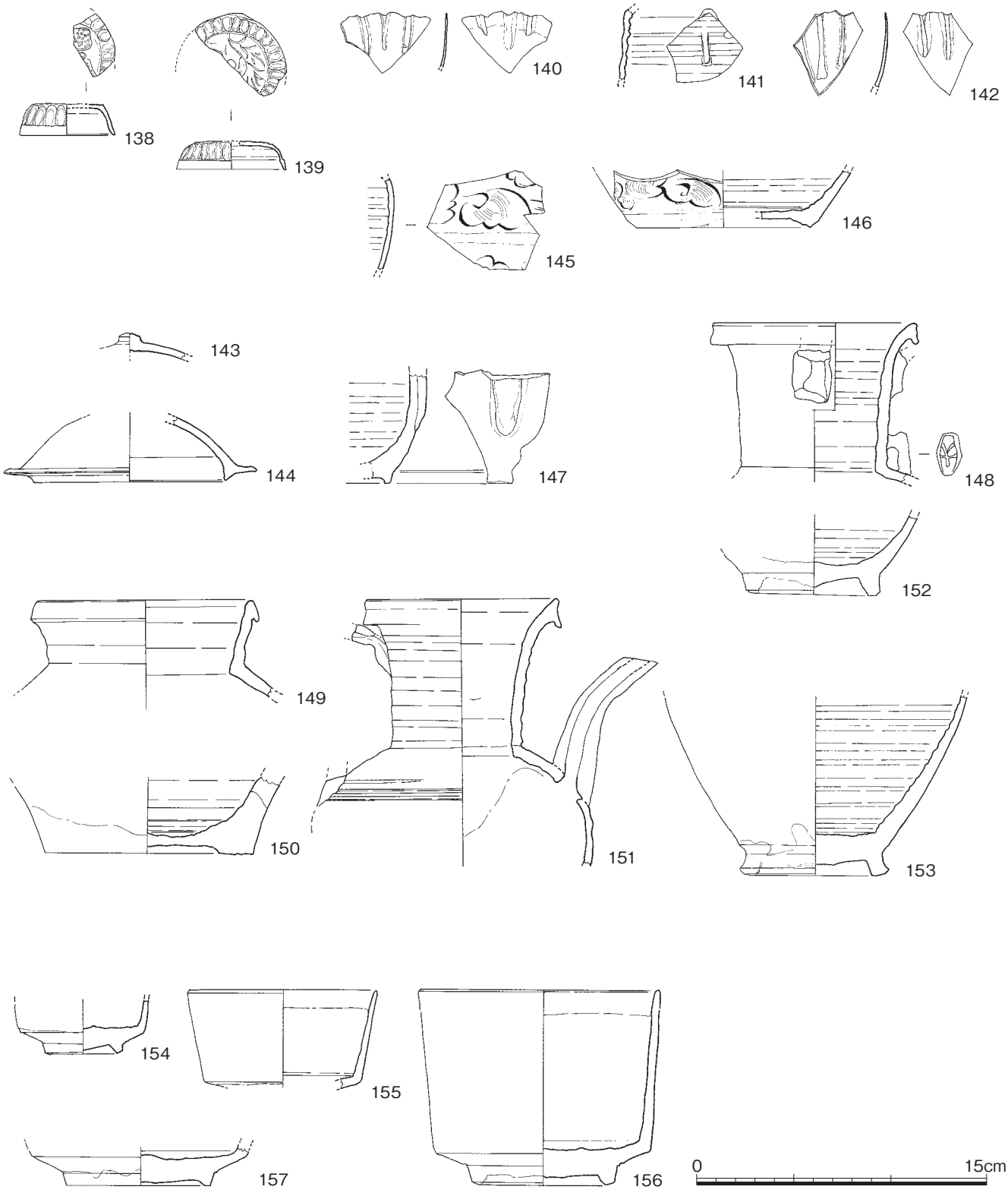


Fig.27　SX647出土遺物実測図６（青白磁　白磁　1/3）

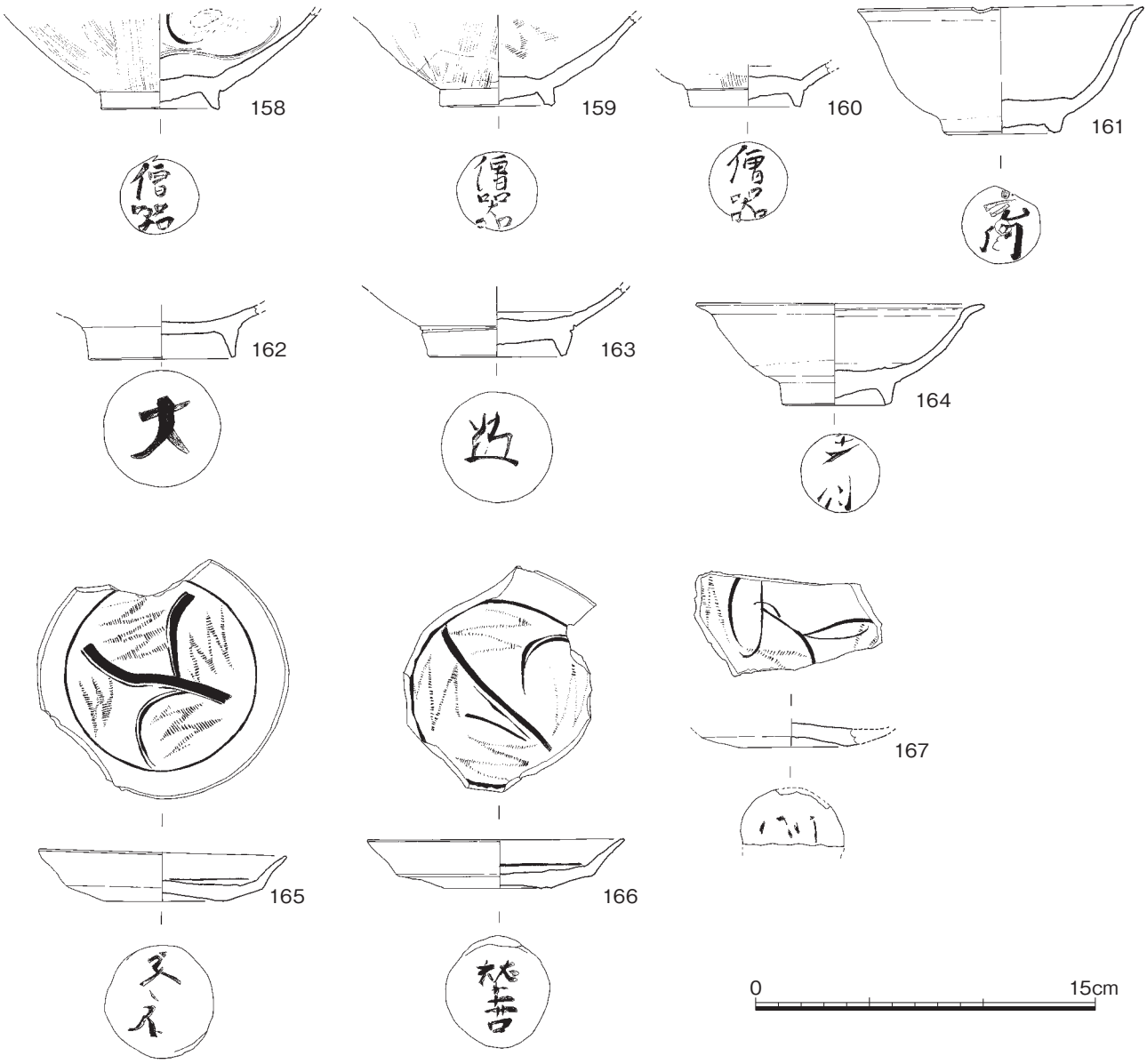


Fig.28　SX647出土遺物実測図７（墨書土器　1/3）

白磁、青白磁

138、139は青白磁の合子である。140 ～ 142は青白磁である。143は白磁の蓋撮み、144は白磁の蓋である。受部の裏面は露胎である。145は青白磁、146は青白磁、147は青磁で水色を呈す。高台畳付から外底部にかけては露胎である。148 ～ 153は白磁である。148の水注の肩部に付けられた耳部には「大」を反転し、倒置したスタンプ文が付く。154 ～ 157は灰白色の白磁である。筒状に深い鉢形の器形をなす。内面の口縁部近くと外面の体部に施釉する。154は底部全体、155は屈曲部から少し内側の底部、156は底部全体、157は高台より内側が露胎である。法量に差異がある。

墨書土器

158から160は「僧器」。同安窯系青磁椀Ⅰ-1 b類である。161は□綱。龍泉窯系青磁椀Ⅰ-1 b類である。162は「大」。白磁椀である。163は花押か。白磁椀Ⅷ類である。164は不明。白磁小椀である。165 ～ 167は同安窯系青磁Ⅰ-1 b類である。167は不明。166は「祐吉」か。

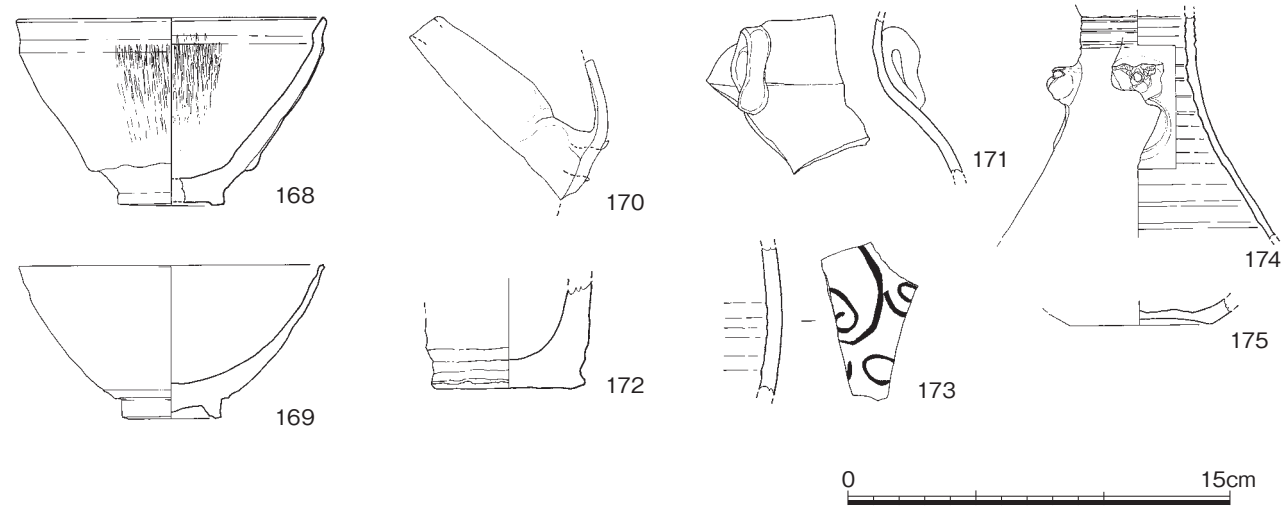


Fig.29　SX647出土遺物実測図８（陶器　1/3）

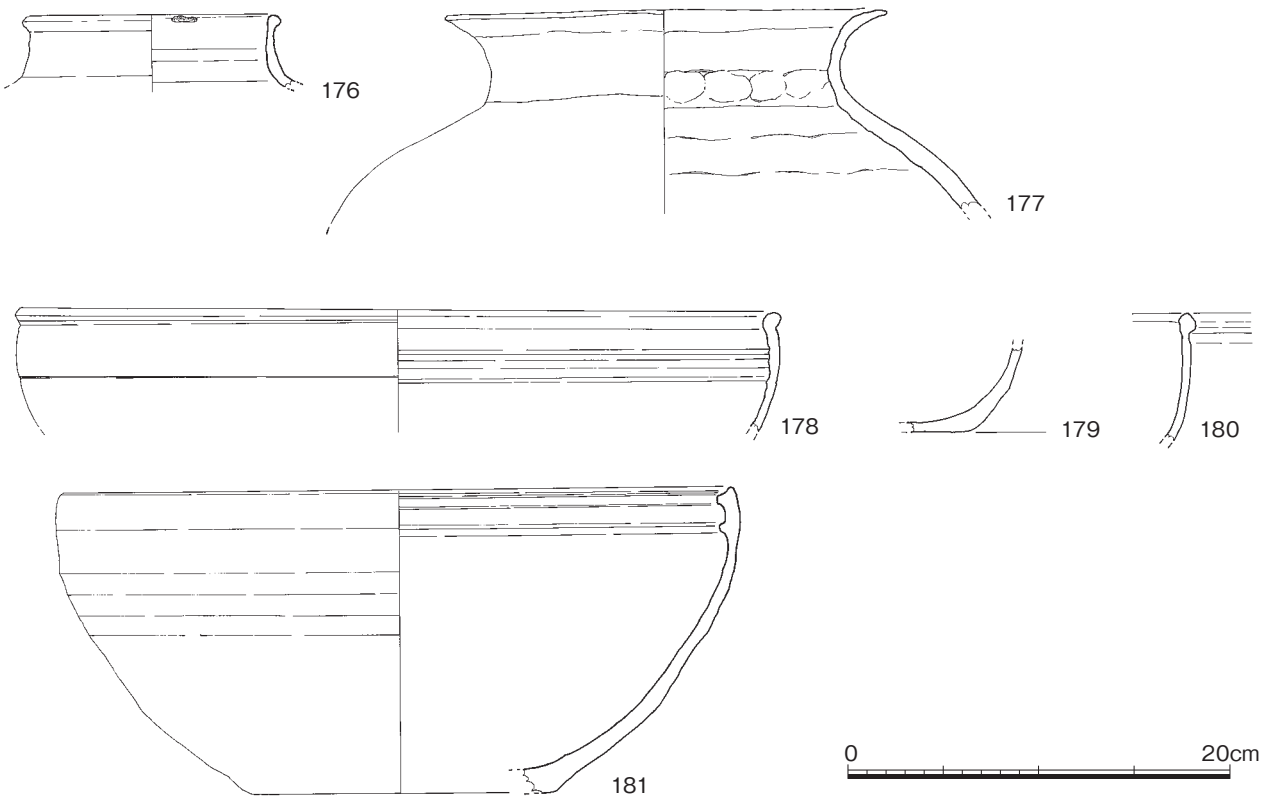


Fig.30　SX647出土遺物実測図９（陶器甕、鉢　1/4）

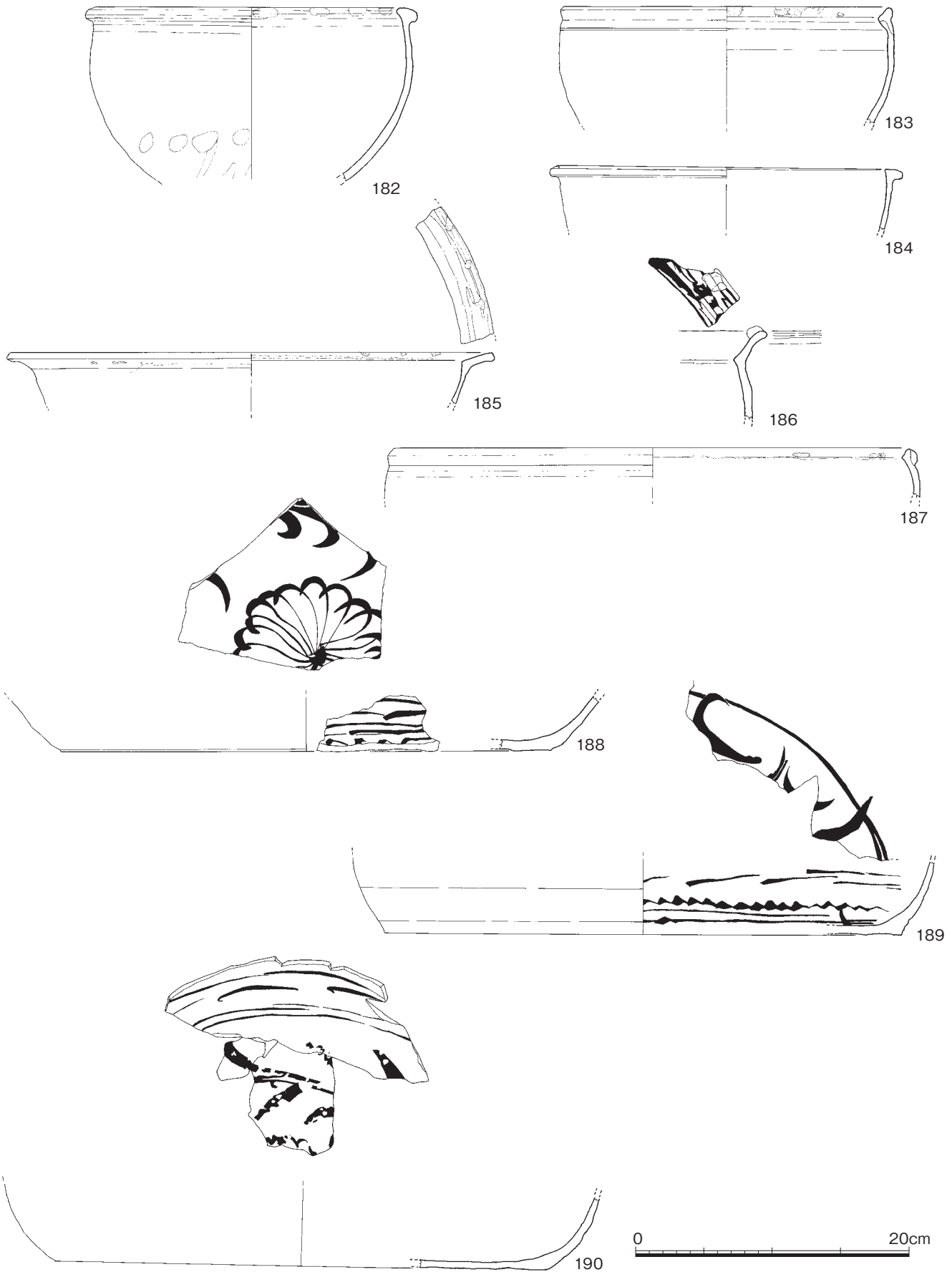


Fig.31　SX647出土遺物実測図10（陶器鉢、盤　1/4）

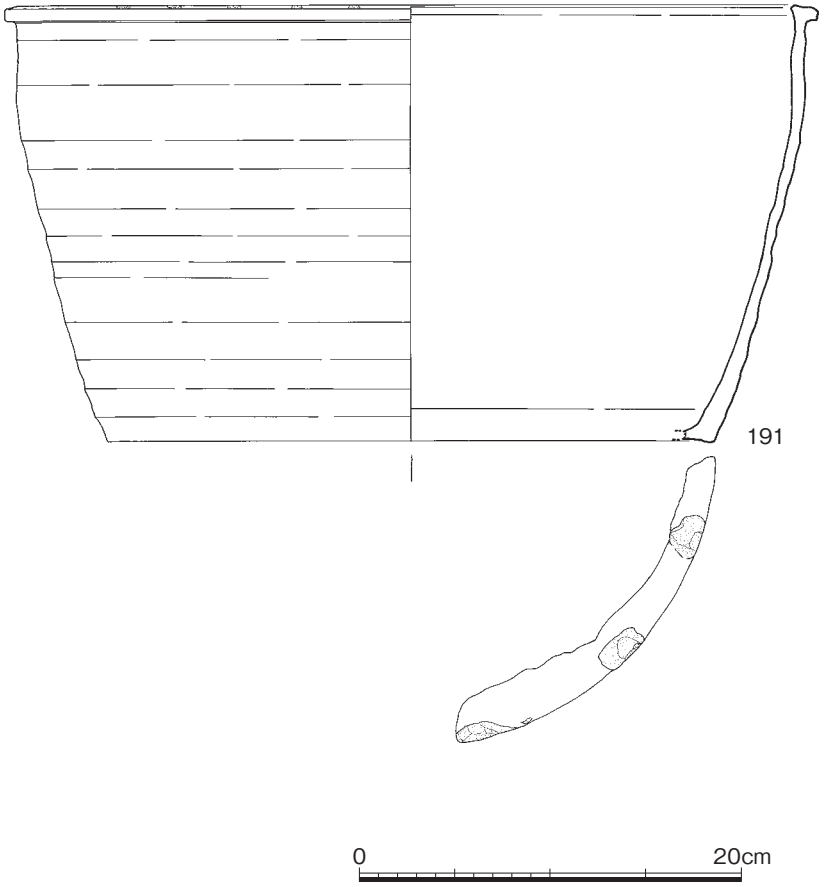


Fig.32　SX647出土遺物実測図11（陶器鉢　1/4）

陶器

168、169は天目である。168は禾天目で、湾曲した口縁部は露胎である。170、171は褐釉陶器の水注である。172の褐釉陶器は底部以外の内外面に施釉されている。173は磁州窯系の瓶か。褐釉の下地に緑釉が施され、線刻状に掻きとって草花文を表す。174、175は同一個体の緑釉陶器の瓶である。火熱を受け劣化が著しい。遺存する内面は露胎であるが、外面は底部まで全面施釉されている。獅子の顔とその下に環が付されている。176はオリーブ色に発色した灰釉陶器壷である。同一個体に耳部がある。177の灰釉陶器壷は緑色が強いオリーブ色に発色した釉が外面全体と口縁部内面まで施されている。口縁端部はすぼまり尖り気味である。渥美窯系の可能性がある。178 ～ 180は緑釉陶器の盤である。181 ～ 216は褐釉、黄褐釉陶器の壷、盤、鉢である。

土師器、瓦、石器

217、218は土師器坏である。219、220は滑石製石鍋片である。221、222は丸瓦片である。凹面には布目が残り、355の凸面には縄目タタキ痕が残る。223の平瓦凸面には縄目タタキ痕が残る。224は中国寧波系の花卉文を付した丸瓦瓦当である。225は石製臼である。石材は花崗岩に近い。

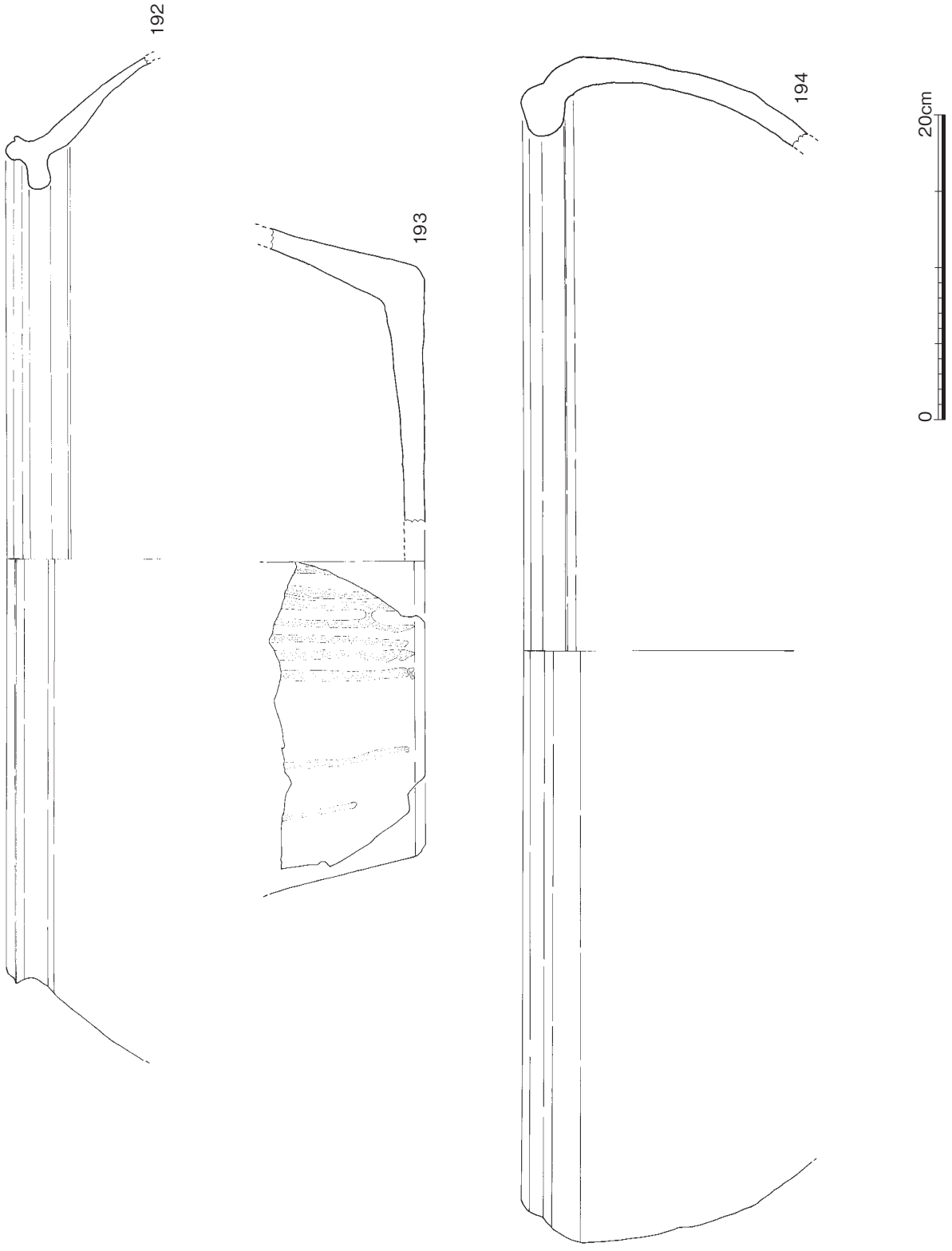


Fig.33　SX647出土遺物実測図12（陶器甕、鉢　1/4）

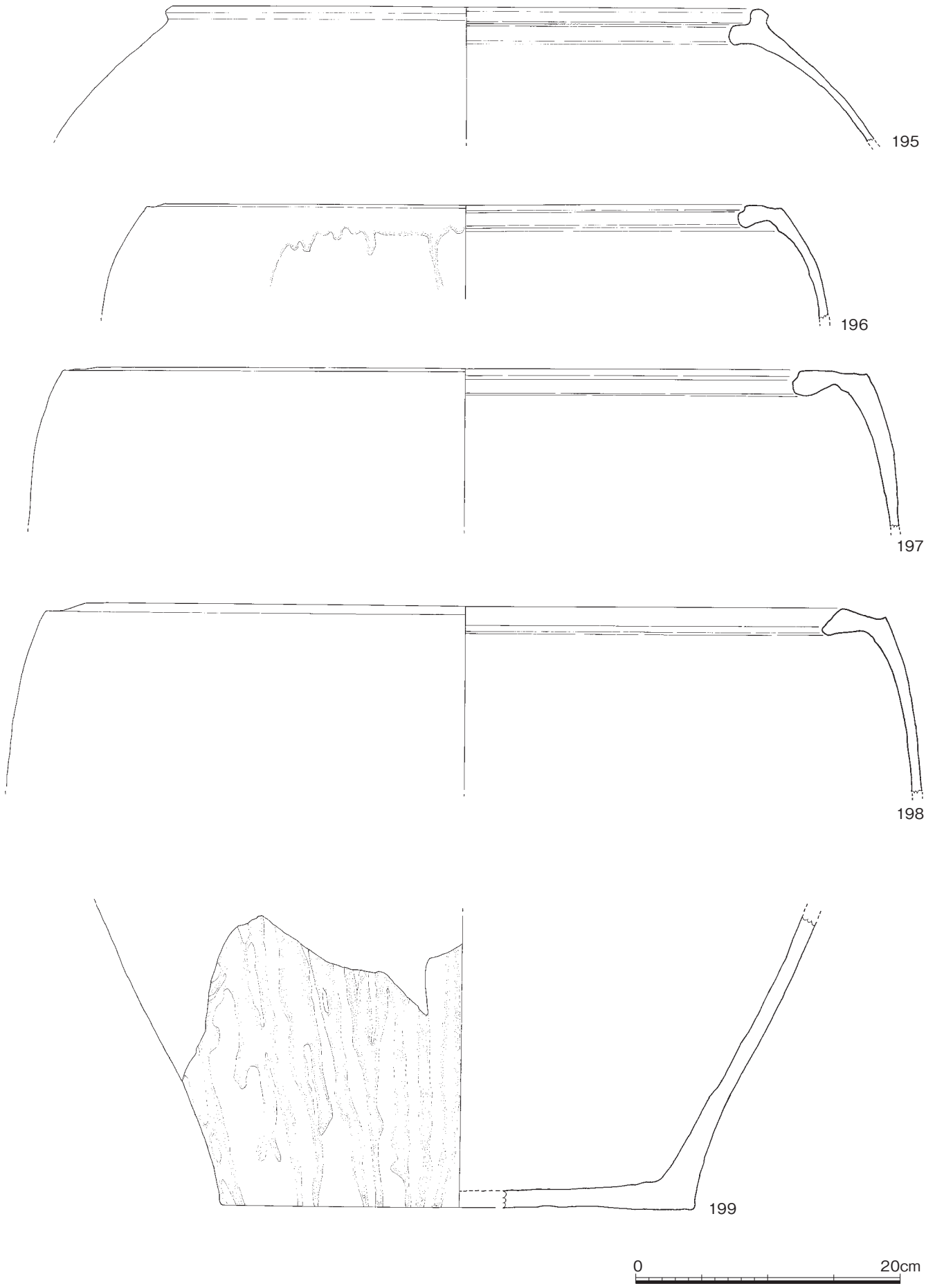


Fig.34　SX647出土遺物実測図13（陶器甕　1/4）

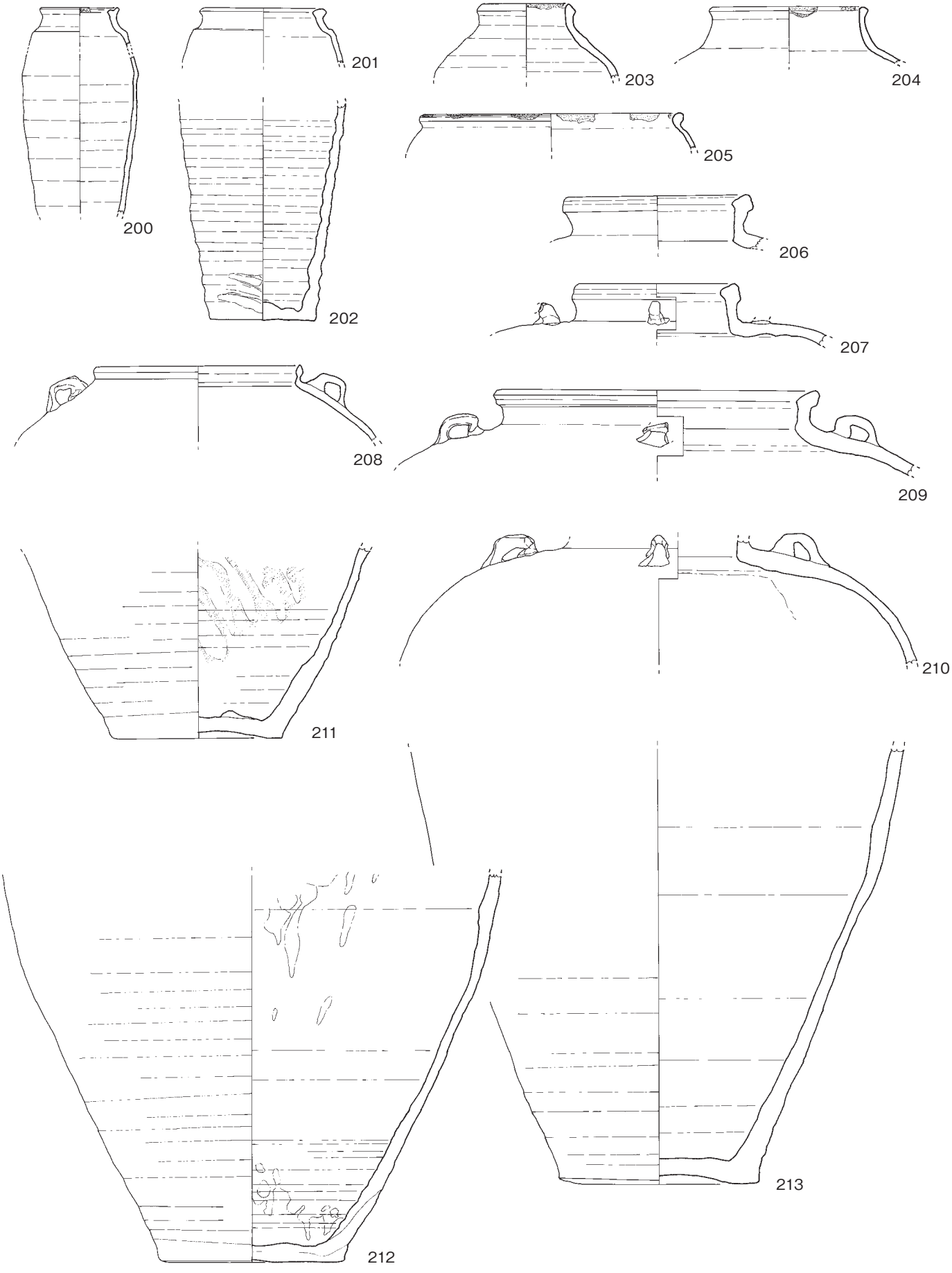


Fig.35　SX647出土遺物実測図14（陶器壷、甕　1/4）

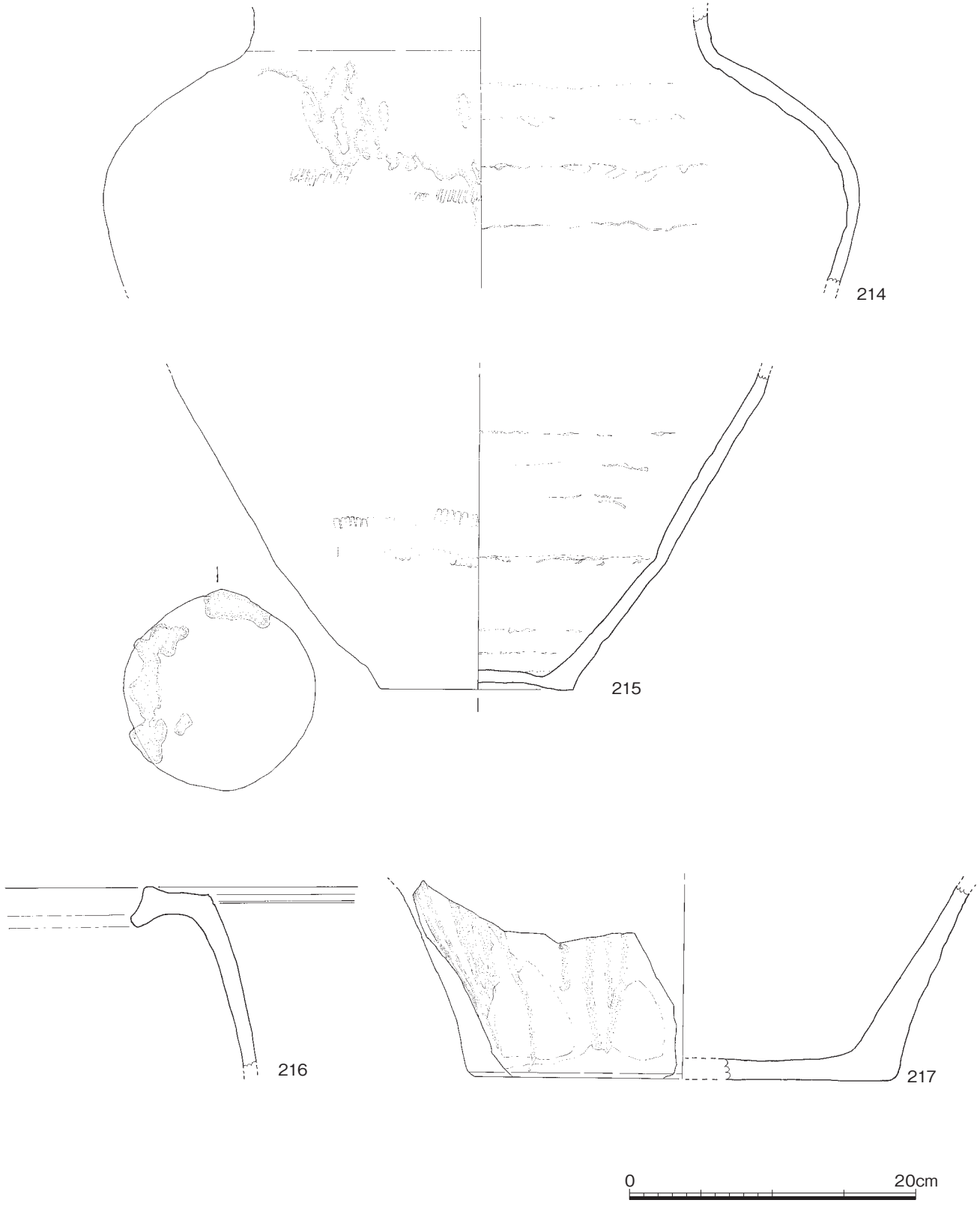


Fig.36　SX647出土遺物実測図15（陶器甕　1/4）

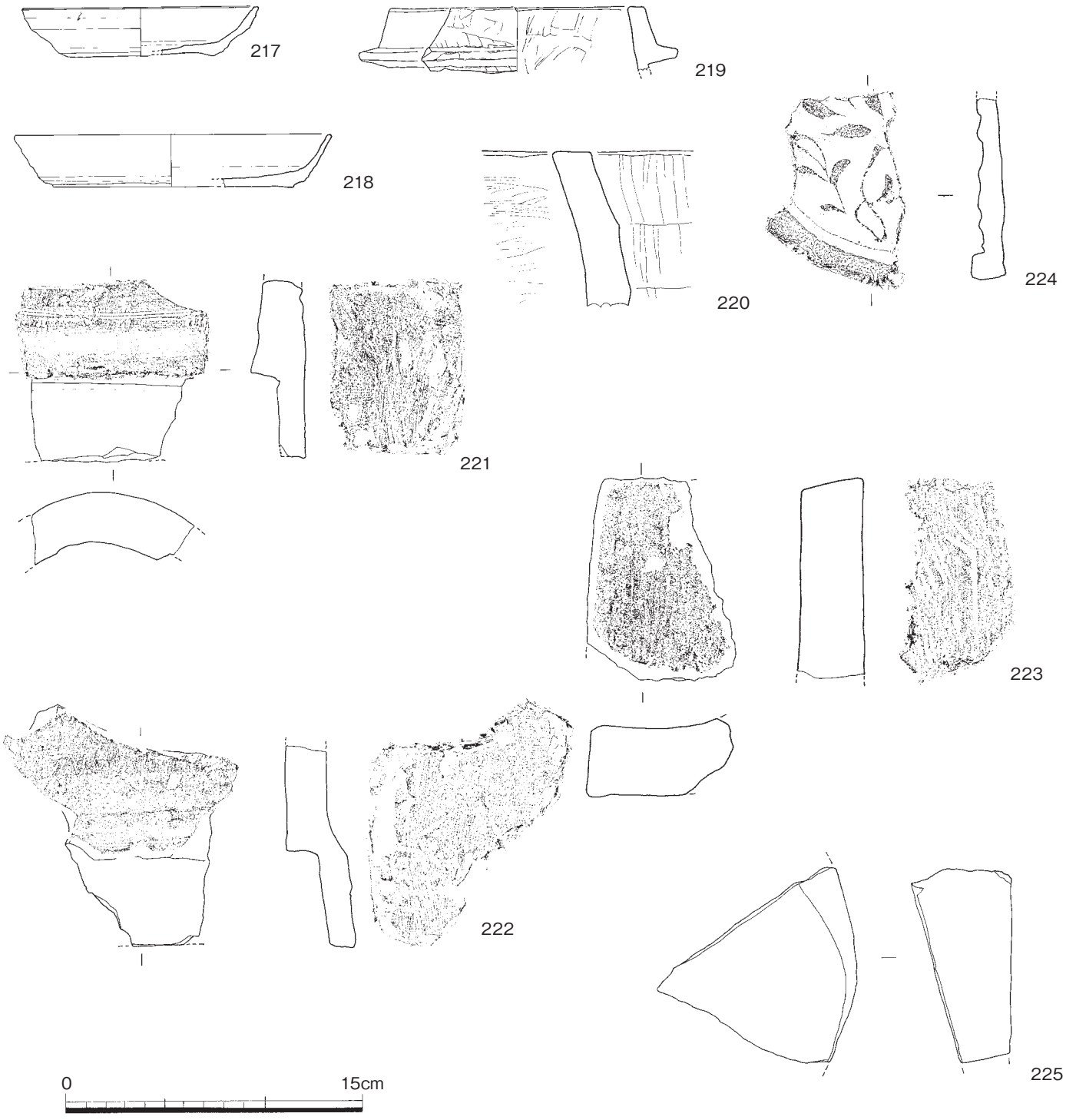


Fig.37　SX647出土遺物実測図16（土師器、石鍋、瓦　1/3）

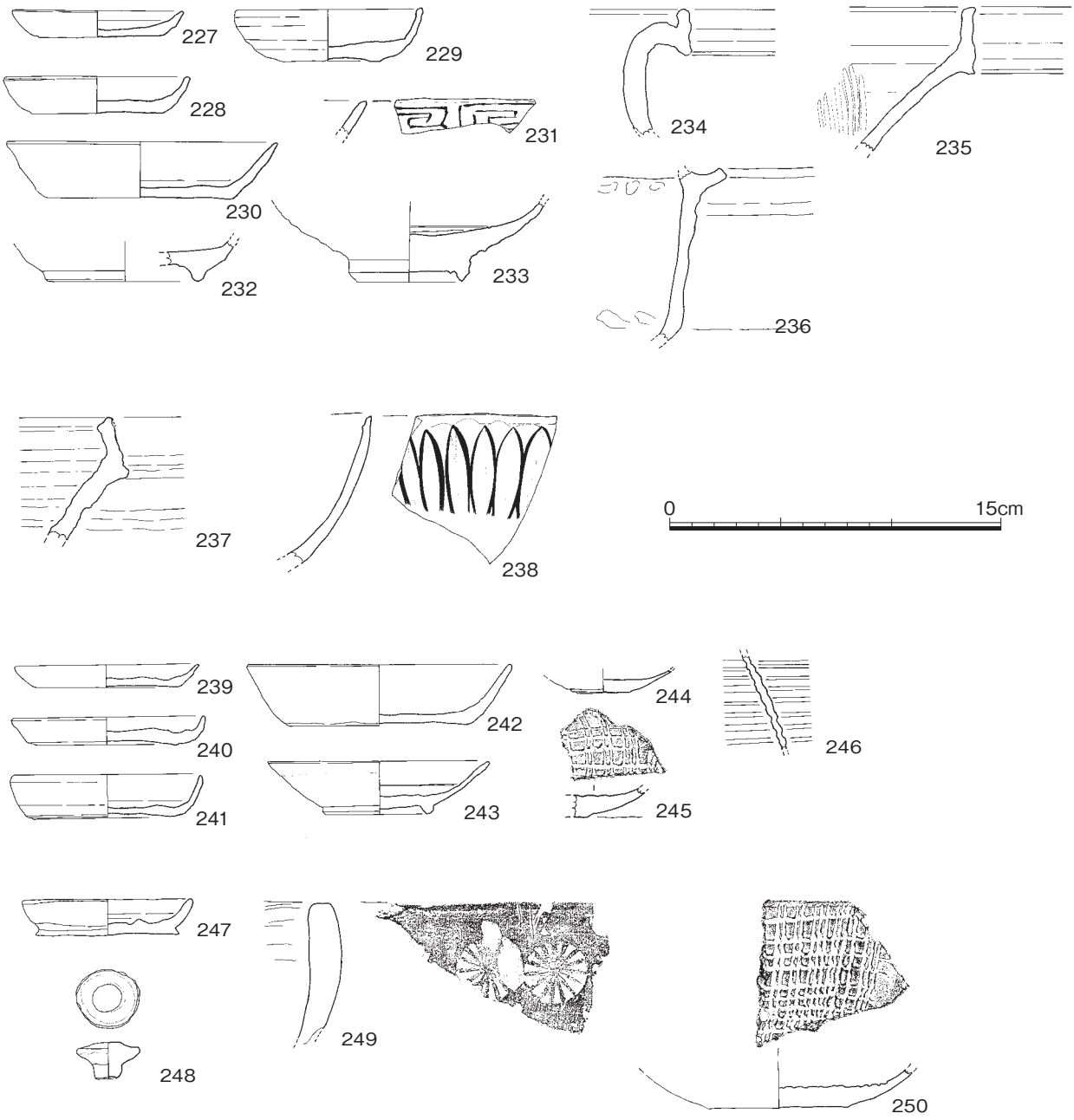


Fig.38　SX130、131、132、129、110、179、145出土遺物実測図　(1/3)

5．第Ⅰ、Ⅱ面遺構出土遺物（Fig.38）

SX130、SD131、132出土遺物（227 ～ 236）

227 ～ 236のなかで228がSD132、229がSD131出土以外は集石のSX130から出土した。227、228は土師皿、229は青磁皿である。外底部が露胎である他は厚く施釉されている。230は土師器坏231は青磁椀、232は青磁椀。高台内側の外底部は露胎で赤褐色を呈す。233は青磁椀。内面見込み内と外面高台内側から底部は露胎である。234は褐釉陶器の常滑焼。235は備前焼。236は瓦質の鍋である。

SX129出土遺物（237）

237は備前焼の鉢である。

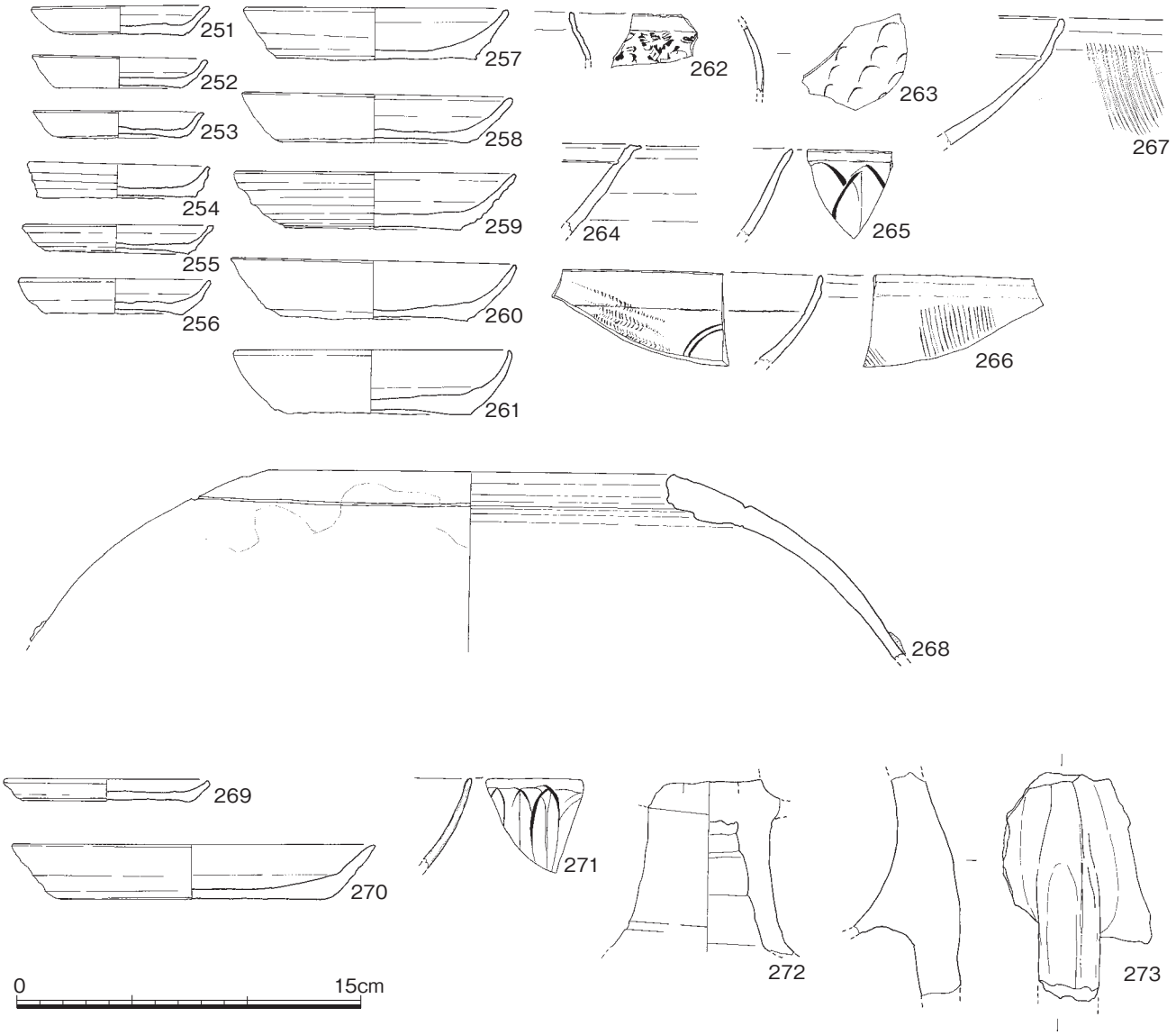


Fig.39　SX189、239出土遺物実測図（1/3）

SK110出土遺物（238）

238は細い鎬蓮弁の青磁椀である。

6．第Ⅲ～Ⅵ面遺構出土遺物

SK179出土遺物（239 ～ 246）

239、240は土師皿、241、242は土師器坏である。243は白磁皿である。内面見込みを輪状に釉を掻きとる。外面下位まで施釉している。244は内面に褐釉が施された陶器である。外面露胎で、小さな底部には糸切り痕が残る。245は外面に劣化した灰釉がみられる瀬戸陶器とみられる卸皿。246は須恵質の器胎が薄い壷である。黒色を呈す。

SX145出土遺物（247 ～ 250）

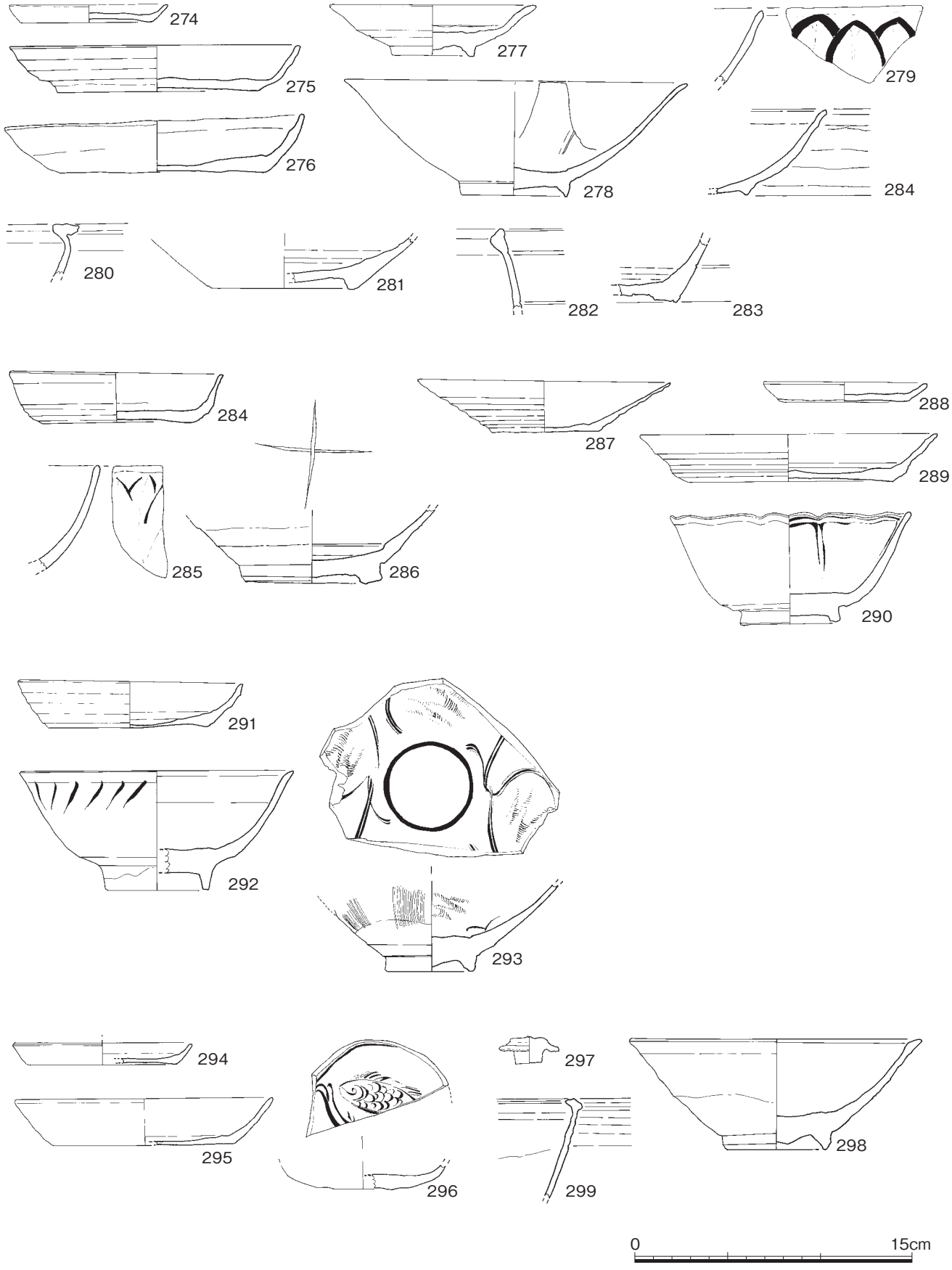


Fig.40　SE168、SK156、SX182、183、184、SX195、SX230出土遺物実測図（1/3）

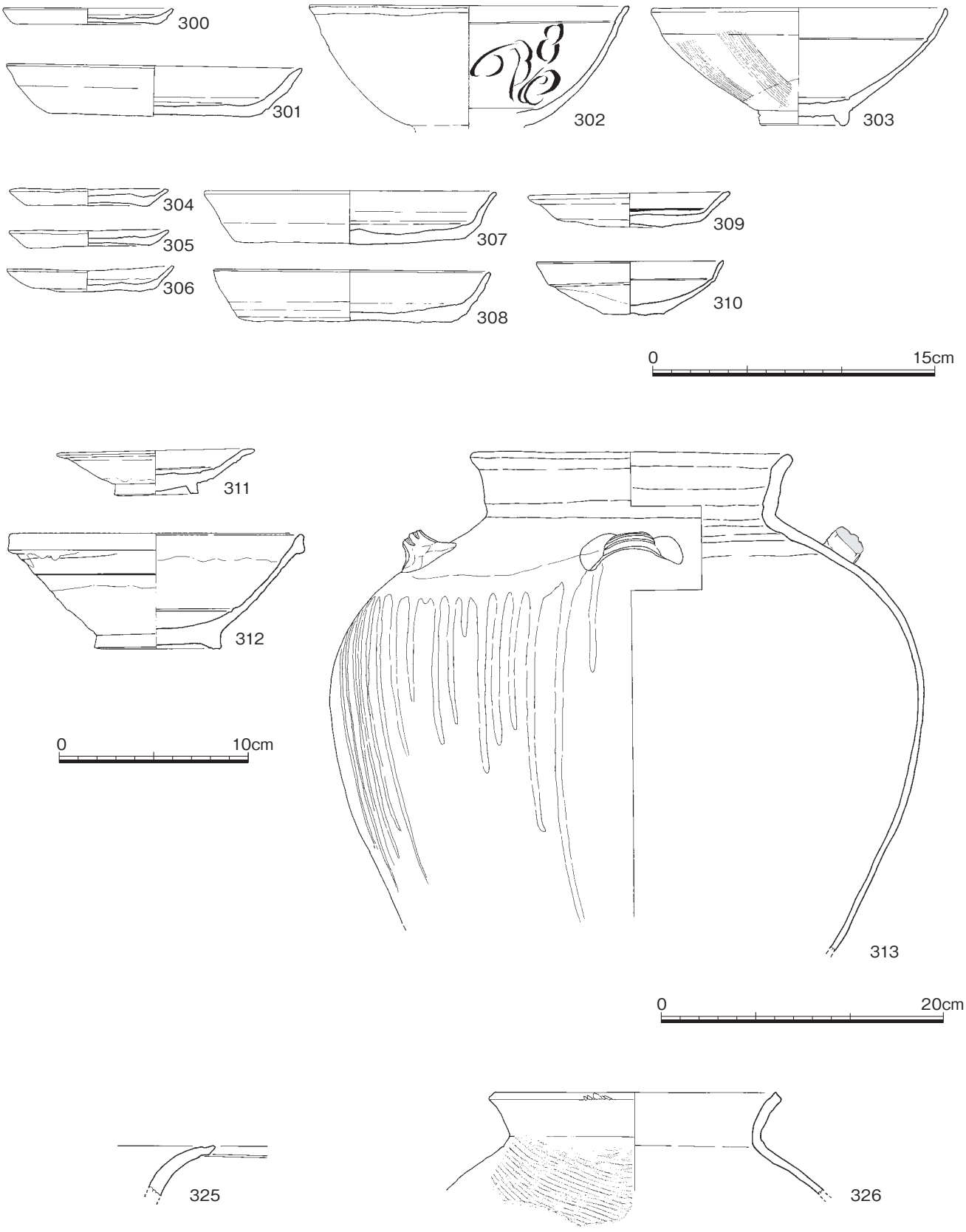


Fig.41　SX241、SX268、X359出土遺物実測図（1/3、313は1/4）

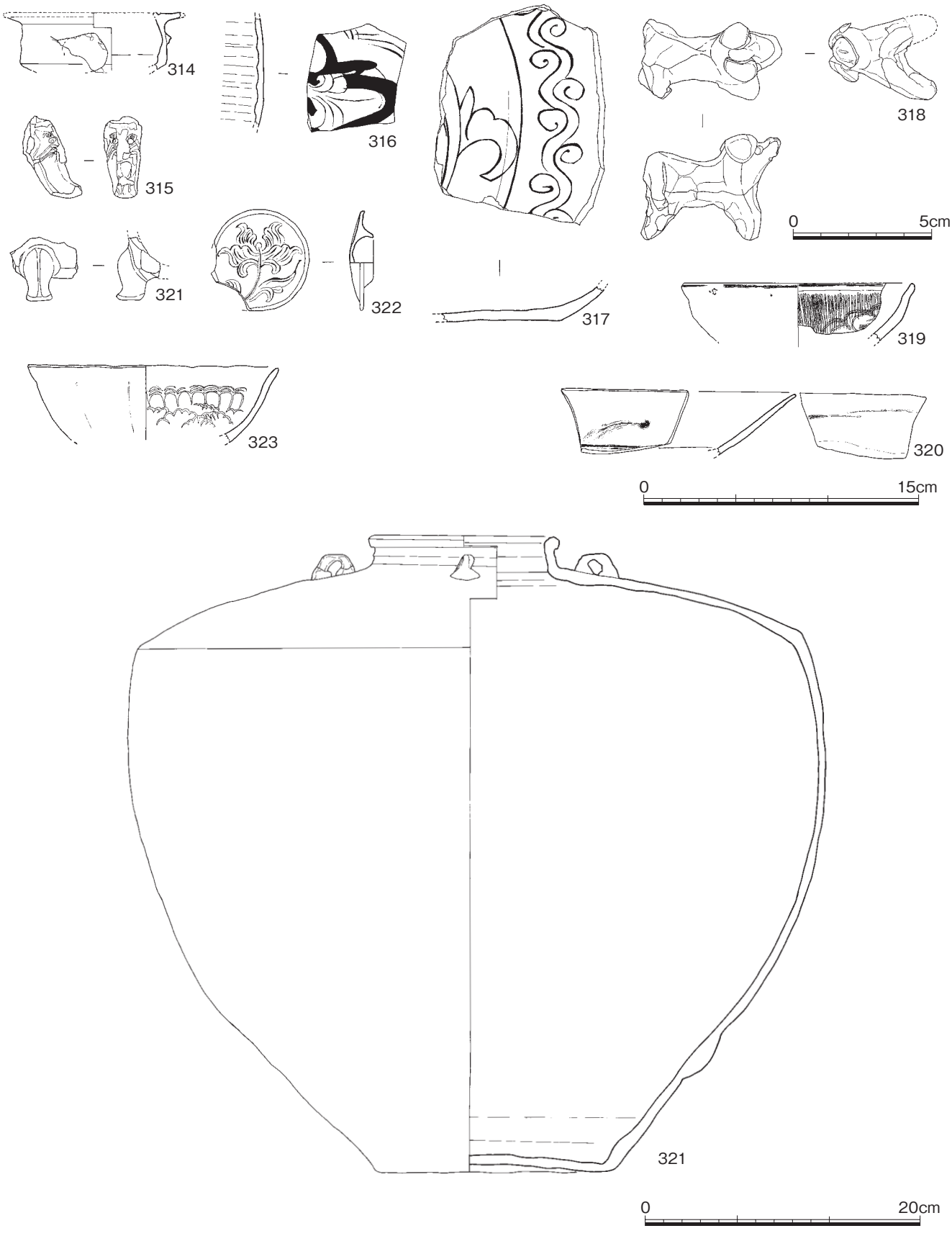


Fig.42　その他陶器、磁器実測図（1/3、321は1/4）

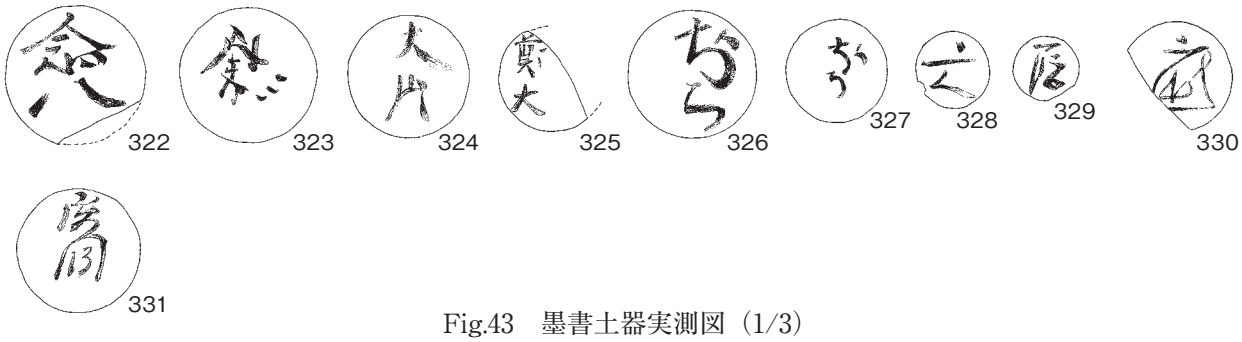


Fig.43　墨書土器実測図（1/3）

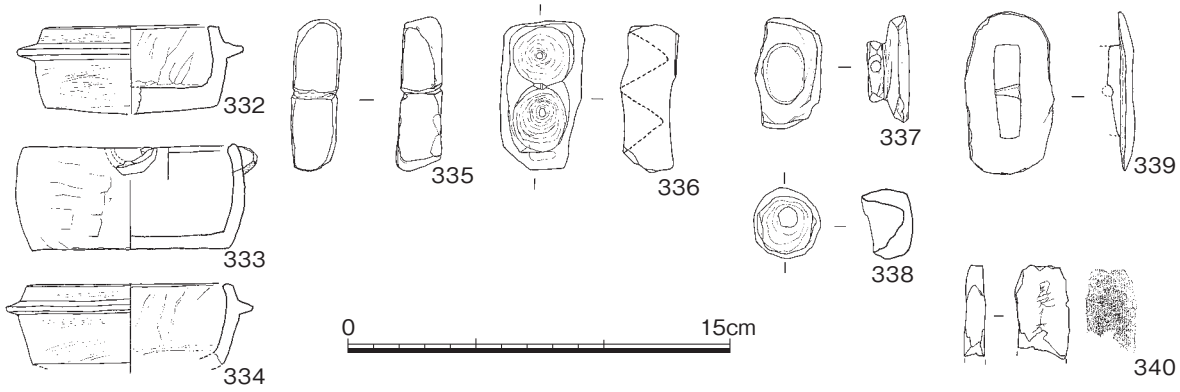


Fig.44　滑石製遺物実測図（1/3）

247は土師皿、248は白磁の栓（蓋）である。天井部のみ施釉されている。249は瓦質の鉢である。250は245と同一個体とみられる。灰釉が劣化している。

SK189出土遺物（251 ～ 268）

251 ～ 256は口径7.2 ～ 8.5cmの土師皿である。257 ～ 261は口径11.8 ～ 12.5cmの土師器坏である。262は青白磁の小壺で外面に印花文を付す。263は白磁、264は白磁椀、265は青磁椀、266は同安窯系青磁椀、267は白磁椀である。268は褐釉陶器で外面火熱を受け釉が劣化し白濁している。

SX239出土遺物（269 ～ 273）

269は土師皿、270は土師器坏である。271は細い鎬蓮弁の青磁椀である。272は褐釉陶器である。273は瓦質の足鍋である。

SE168出土遺物（274 ～ 283）

274は土師皿、275、276は土師器坏である。277は白磁皿で内面見込みを輪状に釉を掻きとる。278は白磁椀で、内面に白堆を付す。279は青磁椀、280、281は同一個体の褐釉陶器である。282、283は同一個体の青磁である。オリーブ色に発色し、外底部以外の内外面に施釉されている。外面の釉は火熱を受け白濁している。284は瓦器椀である。

SK156出土遺物（284）

284は口径11.5cmの土師器坏である。外底部に板目を残す。

SX182出土遺物（285、286）

285は鎬蓮弁の青磁椀、286は白磁椀である。内面に段を有して輪状に釉を掻きとり、内底部に×印のヘラ記号を有す。

SX183出土遺物（287）

287は大内系の土師器坏である。

SX184出土遺物（288 ～ 290）

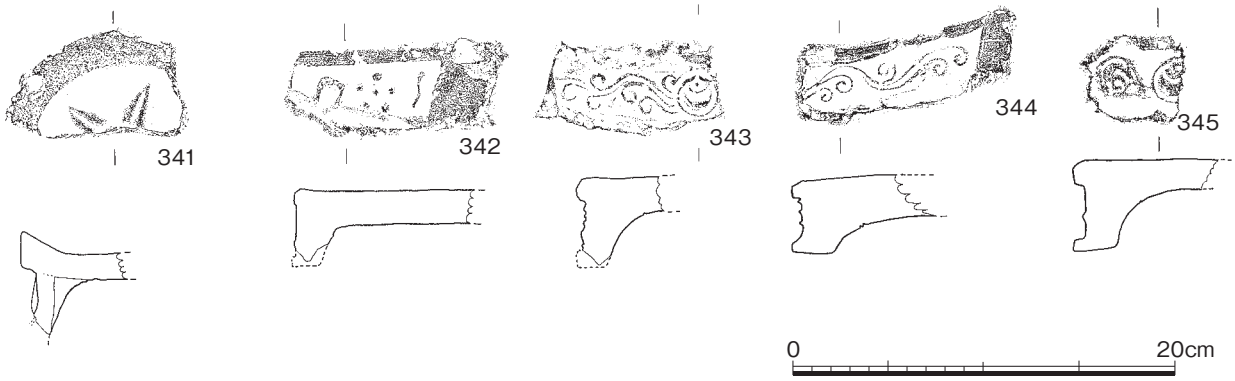


Fig.45　瓦実測図（1/4）

288は土師皿、289は土師器坏、290は龍泉窯系青磁椀である。

SX195出土遺物（291 ～ 293）

291は土師器坏、292は白磁椀、293は同安窯系青磁椀である。

SX230出土遺物（294 ～ 298）

294は土師皿、295は土師器坏、296は青磁皿、297は白磁の摘み状の栓である。天井部のみ施釉している。298は白磁椀である。内面見込みが重ね焼きによって輪状に剥離している。299は褐釉陶器。外面は露胎で、内面の体部下位に施釉している。

SX241出土遺物（300 ～ 303）

300は土師皿、301は土師器坏、302は龍泉窯系青磁椀、303は灰白色に発色した白磁椀である。外面に櫛目、内面には口縁部下に沈線が巡るのみである。外面体部下位は露胎である。

SX268出土遺物（304 ～ 310）

304 ～ 306は口径8.5cm前後の土師皿、307、308は口径14.8cm前後の土師器坏である。309、310は青磁皿である。309は底部、310は体部下位から露胎である。

SX359出土遺物（311 ～ 313）

311は白磁皿Ⅲ-１類である。内面見込みを輪状に掻きとる。釉は青磁に近い黄色が強いオリーブ色に発色している。312は白磁椀Ⅳ-１aである。外面体部中位まで施釉している。体部の1/4が欠損する。313は黄釉陶器の四耳壺である。大宰府分類の耳壺Ⅲ-２類に比定できる。体部下位から底部にかけて欠損している。外面肩部から暗褐色の釉を流し、垂下した文様をつくる。耳部には横位に２条の凹線を施す。12世紀中頃の組み合わせか。

７．その他の土器、陶磁器

今回の調査で出土したその他の特徴的、重要な遺物を掲載しておく。

314はⅡ～Ⅲ面、315はSP246、316はⅡ～Ⅲ面、317はⅠ～Ⅱは面、318はSX750、319はSE168、320はⅢ面、321はⅡ～Ⅲ面、322はSX202、323はSX88、324はSX642、325、326（Fig.41）はⅢからⅣ面出土である。

314、315は緑釉陶器香炉の同一個体とみられる。胎土は白色を呈し、内面は露胎である。315の獣脚は上部に獣面が造られている。316は磁州窯系の緑釉陶器片である。梅瓶のような器形とみられる。掻き落としで草花文を描く。胎土は灰色で内面は黒褐色の釉が施されている。317も磁州窯系の緑釉陶器盤である。内外面に緑釉が施されている。内底部には線刻で草花文を掻き落とし描く。外周に唐

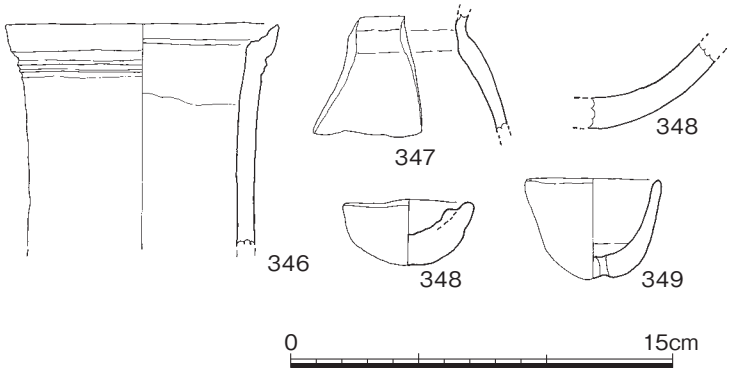


Fig.46　取瓶、坩堝実測図（1/3）

草文が連続し、内側に圏線が画している。胎土は灰色で砂粒を含む。318は犬のミニュチュアである。胎土は白色に磁器化しているが、外面は上部に褐釉が施され、露胎部は淡褐色を呈す。321は青白磁香炉の獣脚である。322は青白磁合子である。319は彩文のある天目である。草花を描いた後に連続する細い禾目が施されている。白色を呈しているが、顔料は不明である。323は青磁小椀である。口縁端部は輪花となり、外面に細い縦線、内面に花弁文の印文を施す。320は褐釉陶器の天目である。外面は体部中位まで施釉されている。黒色の釉で内外面に文様が描かれている。324は褐釉四耳壺の完形である。短い内傾した口縁端部は玉縁である。肩部が張り、屈曲部の強い稜を有す。耳部は縦型５はで短い。黄色がかる灰白色の釉が外面の口縁端部から肩部まで施されている。

325、326は須恵器甕である。326は灰白色を呈し、外面に平行タタキ痕を有す。

８．墨書土器（Fig.43）

墨書の一部が残る小片も含めて総数101点が出土した。判別できるものの概略は以下の通りである。

(1) 数に関わるもの

「二」が記されたもの３点、「十」が記されたもの２点、「廿」が記されたもの４点、「卅」が記されたもの３点である。

(2)「綱」が記されたもの

２文字で後に「綱」が記されたもの６点、「綱」のみのもの７点である。

(3)「僧」が記されたもの

「僧器」４点のうち３点はSX647から出土した。「僧」は１点である。

(4) 花押

４点である。

(5) 姓名

１漢字が３点、２漢字が９点、ひらがなが２点の総数14点である。

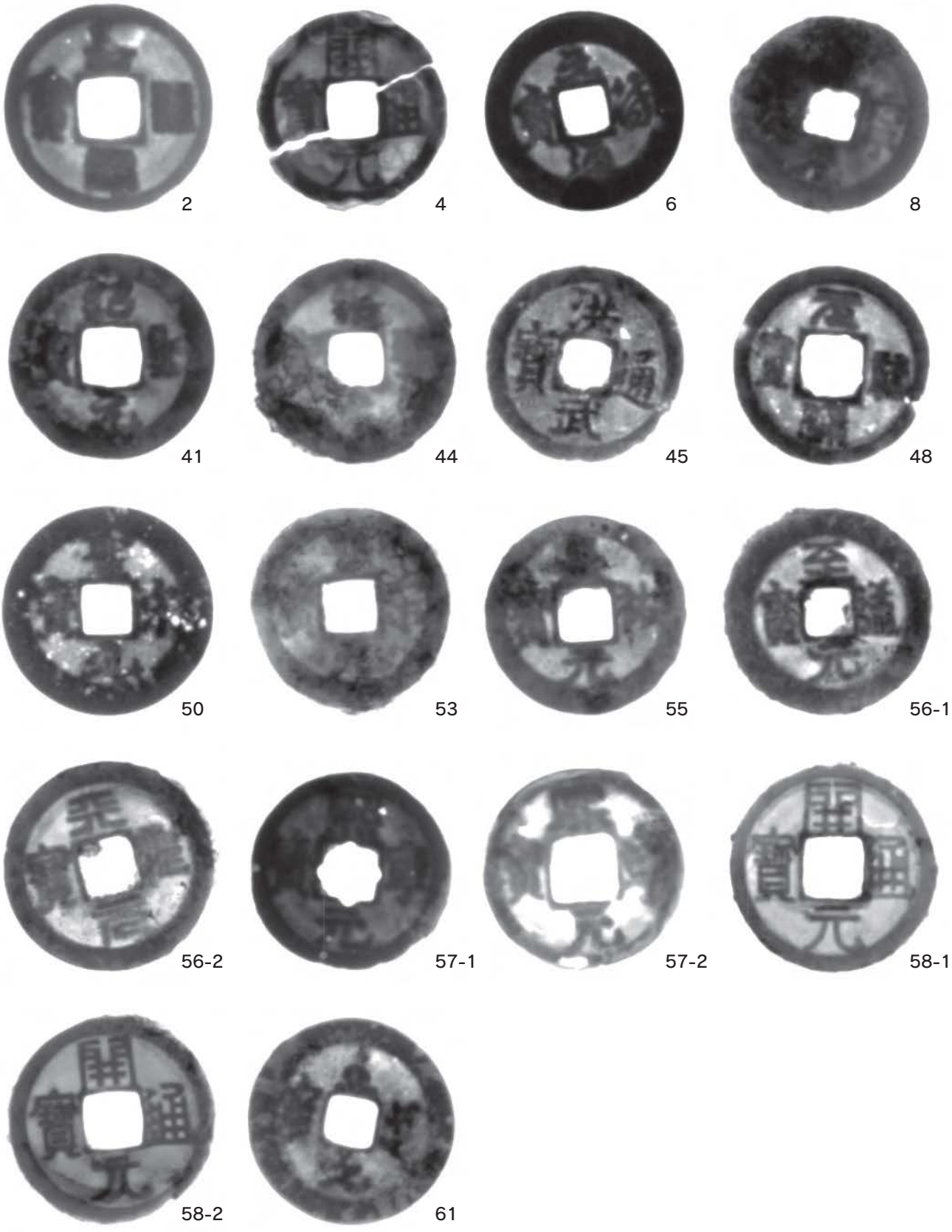
Fig.44に掲載した墨書土器は322は「念八」、323は不明、324は「大」と不明、325は鄭大、326、327は「ぢろ」か。328、329は不明。330は花押か。

９．滑石製品（Fig.44）

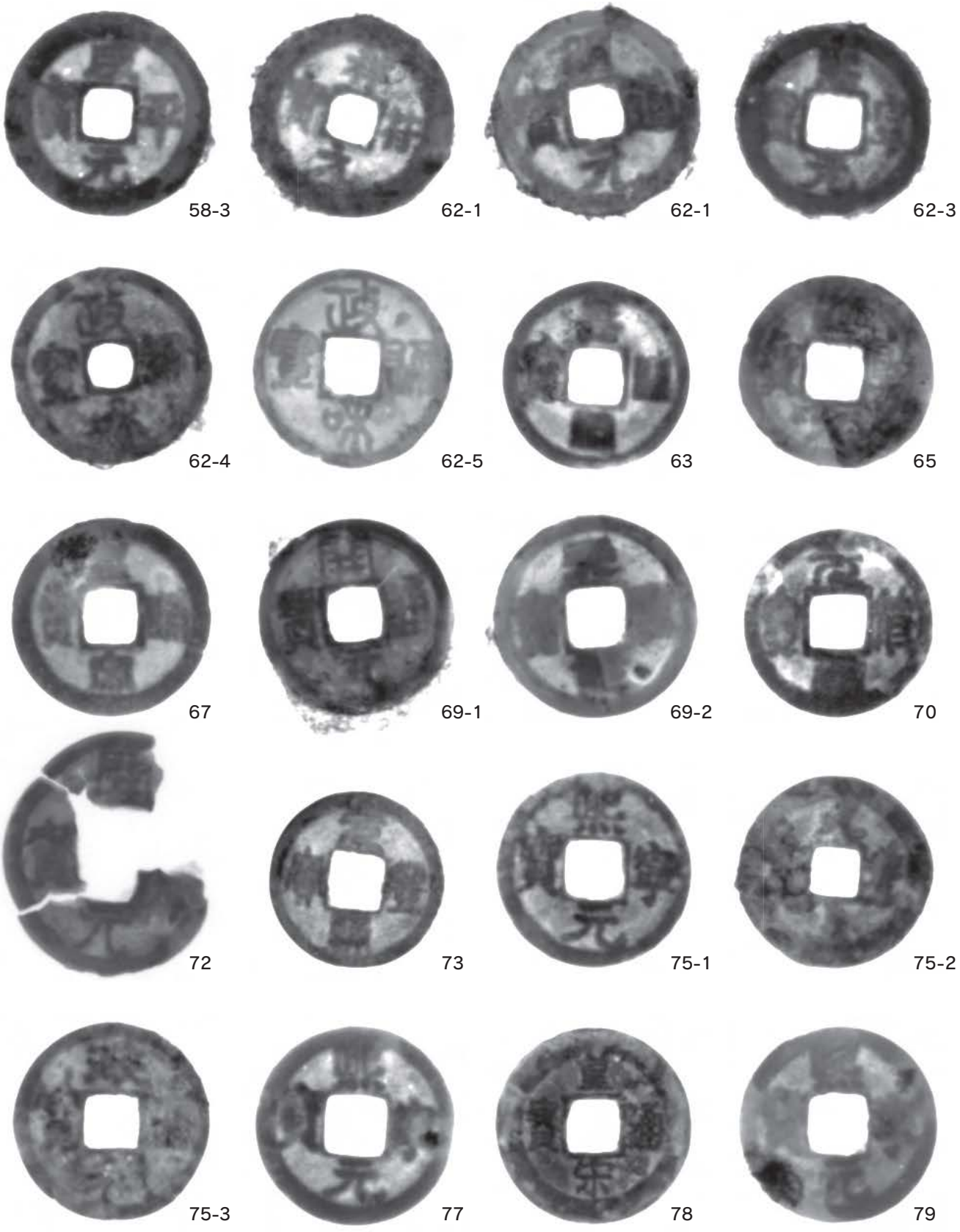
332 ～ 334は石鍋のミニュチュアであるが、下底に煤が付着し、実用されている。335は錘の未成品

Tab.1　出土銅銭一覧

番号	遺物名	初鋳年	遺構名
2	銭貨（□□通宝）		中央129周辺　129下層
4	銭貨（開元通宝）	621	SX272
6	銭貨（元符通宝・折二銭）	1098	SX367下部
8	銭貨（熙寧元宝か）	1068	575
41	銭貨（紹聖元寶）	1094	SX34
44	銭貨（紹聖元寶か）	1094	SX75
45	銭貨（洪武通寶）	1368	93（Ⅰ～Ⅱ面堆積土）
48	銭貨（元祐通寶）	1086	SX142
50	銭貨（聖宋元寶）	1101	SX181
53	銭貨（聖宋元寶か）	1101	SX189
55	銭貨（嘉祐元寶）	1056	SX218
56-1	銭貨（至道元寶）	995	SP237
56-2	銭貨（天聖元寶）	1023	SP237
57-1	銭貨（熙寧元寶）	1068	SX239～268
57-2	銭貨（熙寧元寶）	1068	SX239～268
58-1	銭貨（開元通寶）	621	289（288の縁）
58-2	銭貨（開元通寶）	621	289（288の縁）
58-3	銭貨（咸平元寶）	998	289（288の縁）
61	銭貨（至道元寶）	995	SP354
62-1	銭貨（祥符元寶）	1009	SX367下部
62-2	銭貨（明道元寶）	1032	SX367下部
62-3	銭貨（熙寧元寶）	1068	SX367下部
62-4	銭貨（政和通寶）	1111	SX367下部
62-5	銭貨（政和通寶）	1111	SX367下部
63	銭貨（嘉祐通寶か）	1056	SE590
65	銭貨（□聖元寶）		SE702（井筒）
67	銭貨（皇宋通寶）	1038	南東隅版築層出土Ⅳ～Ⅴ面
68	銭貨（小片）		遺構不明
69-1	銭貨（開元通寶）	621	西側（南際）Ⅳ～Ⅴ面黒（粘質）
69-2	銭貨（天□□寶か）		西側（南際）Ⅳ～Ⅴ面黒（粘質）
70	銭貨（元符通寶）	1098	東側Ⅱ～Ⅲ面整地層
72	銭貨（開元通寶）	621	東側Ⅱ～Ⅲ面
73	銭貨（元豊通寶）	1078	南西Ⅲ～Ⅳ面
75-1	銭貨（熙寧元寶）	1068	南西Ⅲ～Ⅳ面
75-2	銭貨（元豊通寶）	1078	南西Ⅲ～Ⅳ面
75-3	銭貨（政和通寶）	1111	南西Ⅲ～Ⅳ面
77	銭貨（熙寧元寶）	1068	北東Ⅱ～Ⅲ面整地（下部）
78	銭貨（皇宋通寶）	1038	北東Ⅱ面整地層
79	銭貨（熙寧元寶）	1068	１面検出



Ph.26　出土銅銭 1


58-3
62-1
62-1
62-3
62-4
62-5
63
65
67
69-1
69-2
70
72
73
75-1
75-2
75-3
77
78
79

Ph.27　出土銅銭 2

か。端部の研磨が未調整である。336は２孔を連結している。断面V字状である。338は１孔である337、339はスタンプとみられるが、孔を有した摘み側の天井部と周縁に煤が全面につく。339は石鍋取手の再利用とみられる。底面の周縁は削り湾曲させている。340は線刻で旻ヵと不明漢字が記されている。

10.　瓦（Fig.45）

前項以外の本調査で出土した瓦当について記す。

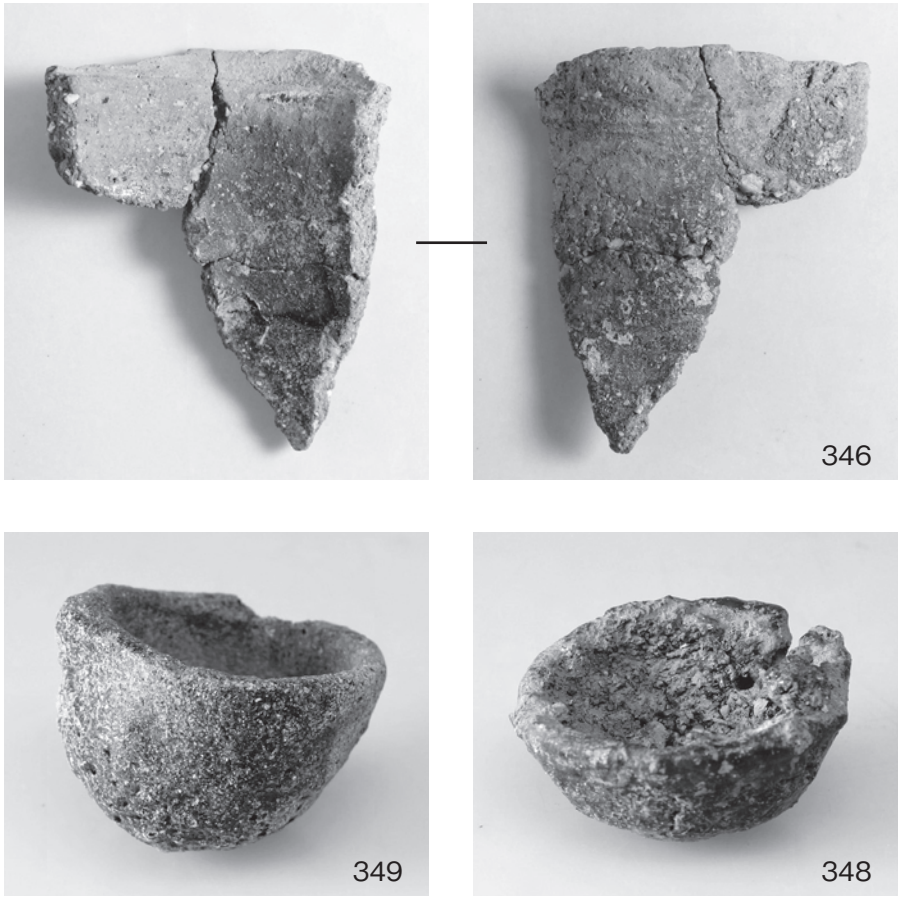
341は黒田氏の家紋である「橘」文の丸瓦瓦当である。SX105出土の23（Fig.18）と同タイプで、果実上部の葉の部分である。342は近世井戸SE31から出土した梅鉢文を付した平瓦瓦当である。345は中心飾りの宝珠文基部から伸展した子葉が剥落している。

11.　ガラス、鋳造関連遺物（Fig.46）

未整理のため、関連遺物の一部のみ掲載する。346は長頸壷口縁部か。火熱を受け劣化し脆弱となり、内面頸部の口縁端部から４cmほど下がった位置からガラス滓が付着する。348の内面には緑錆を含む滓が多量に付着し、外面は褐色のガラス状になった滓が付着する。349は底部に孔を有す。胎土は発泡している。このほか褐釉陶器底部片の内面に緑灰色を呈したガラス滓が付着したものがある。

12.　銅銭（Tab.1、Ph.26、27）

出土した銅銭は総数69枚である。その中に寛永通宝が８枚以上含まれている。小片、判読不能、寛永通宝を除いた銅銭が別表の通りである。



Ph.　ガラス、鋳造関連遺物

Ⅵ　おわりに

未整理の部分が多いが、特に重要と思われる、SX105、129とSX647について若干、ふれておきたい。

1．SX105、129について

SX105、129は時期的には近く、文様は少し異なるがどちらも黒田氏の家紋である「橘」の丸瓦瓦当が出土した。現在までのところ、この文様は福岡市の名島城跡、唐津市の名護屋城跡、長崎市の万才町遺跡から出土している。従って時期としては博多復興の天正十五年（1587）から黒田氏が筑前に入国し、福岡城の完成をみた慶長十二年（1607）頃までの可能性が高い。平瓦の文様も名島城や名護屋城から出土する文様の瓦当であり、この時期を大きく逸脱するものではない。

ともに出土した鬼板瓦も家紋瓦を含み、大小多様な大きさがみられることから、複雑な降り棟を有した本格的な瓦葺きの建物と考えられる。同様の家紋の鬼板瓦は支城である鷹取城の城門からも出土している。いずれにしても黒田氏が直轄する重要拠点であるとみられる。

長崎市の万才町遺跡は教会群が所在するところで、SK128からは「橘」文、「輪宝」文、「花十字」文が共伴して出土している。本調査でもSX105から「橘」文と「輪宝」文の組み合わせがみられ、密接な関係が窺がえる。黒田官兵衛（如水）がキリシタンであったことは知られるところであるが、イエズス会の年報によれば長崎の教会へ多くの寄進を行っていたことがわかる。また、博多商人の末次興善のように博多と長崎を結び付ける活動もみられる。従って、万才町遺跡の瓦はこのような関係から見ることが可能ではないだろうか。では本調査の建物の性格はどのようなものであろうか。出土遺物や瓦からは短期間の建物とみられる。SX129は炭に混じった瓦群と上層の焼土層、部分的に壁体が崩落したところがみられる。瓦は火熱を受けていないので、2次的な利用で鋳造遺構の下部構造とも考えられるが、瓦が他から搬入してきた状況はみられず、近接して瓦溜りのSX105が位置することからもこの場所に建築されていたとみられる。その場合、博多の中心的な寺院である聖福寺と対峙して黒田氏の関与が強い施設が築造されていたことになる。瓦当の「輪宝」の意味については宗教色も含め現在のところ不明と言わざるを得ない。

2．SX647について

特徴として1．完形品が無い、2．火熱を受けたものが多い。3．多量の陶磁器類の出土で土師器類はほとんど無い。4．「僧器」の墨書土器が3点出土した。ことが挙げられる。運搬から荷揚げ後の間も無い間のなかで火災等の戦乱や事故等により廃棄されたものと考えられる。景徳鎮窯の椀や香炉、広東系の白磁、龍泉窯系、同安窯系の青磁椀、皿と磁州窯系の陶器の組み合わせで12世紀末から13世紀初頭の基準資料となる。また、陶磁器の量や質、墨書土器からも「聖福寺」と関連した遺物と思われる。

Ph.28　集石SX130検出状況（北西から）

Ph.29　SX105検出状況（西から）

Ph.30　SX129土層（東から）

Ph.31　SX129焼土、粘土（壁体）検出状況

Ph.32　SX257人骨検出状況

Ph.33　SX359検出状況（東から）

Ph.34　SX449検出状況（北東から）

Ph.35　SX642検出状況（南から）

PL.2

Ph.36　SX105、129出土瓦

Ph.37　SX647出土青白磁、白磁椀

PL.4

Ph.38　SX647出土白磁、青磁椀、皿

Ph.39　SX647出土陶磁器

PL.6

Ph.40　陶磁器類

報告書抄録

ふりがな	はかた154
書名	博多154
副書名	博多遺跡群第199次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1289集
編著者名	荒牧宏行
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810－8621　福岡県福岡市中央区天神1－8－1　TEL　092－711－4667
発行年月日	2016年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
博多遺跡群（はかたいせきぐん）	福岡県福岡市博多区御供所町（ふくおかけんふくおかしはかたくごくしょまち）302番	40130	020121	33° 35′ 56″	130° 24′ 38″	20131115 ～ 20140320	152	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群 第199次	町屋	奈良～近世	井戸、廃棄土壙、掘立柱建物	陶磁器、土師器	黒田氏の家紋である「橘」文の瓦当、鬼板瓦が出土。

要約	博多遺跡群の砂丘頂部に位置し、中世博多の中心的な寺院である聖福寺の門前に位置する。16世紀末～17世紀初頭の黒田氏の家紋である「橘」文の丸瓦瓦当や鬼板瓦が出土し、その建物の性格が注目される。また、多量の陶磁器を廃棄した土壙からは広東系の白磁、景徳鎮、磁州窯系の陶器類の良好な組み合わせがみられ、12世紀末の基準資料となる。また、本調査の出土遺物量は極めて多く、希少な上品の輸入陶磁器も含む。

博多１５４

― 博多遺跡群第199次調査の報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1289集

2016（平成28）年３月25日発行

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号
☎（092）711－4667

印　刷　有限会社宏栄社印刷
福岡市南区清水１－10－５
☎（092）552－4967